兵庫県文化財調査報告　第157冊

神戸市所在

小名田窯跡

―― 山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告ＸＸⅣ ――

1997. 3.

兵庫県教育委員会

小名田窯跡
兵庫県文化財調査報告　第157冊
兵庫県教育委員会

神戸市所在

小名田窯跡

―― 山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告ＸＸⅣ ――

1997. 3.

兵庫県教育委員会

例　　言

1．本報告書は、山陽自動車道（神戸～三木）建設にともなって実施された、神戸市北区八多町下小名田所在の、小名田窯跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査および整理作業は、日本道路公団大阪建設局の委託を受けて、兵庫県教育委員会が実施した。発掘調査は、平成３（1991）年２月12日～同２月13日に確認調査を実施し、その成果を受けて平成６（1994）年１月11日～同３月18日に全面調査を実施した。

3．発掘調査は、兵庫県教育委員会が主体となり、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所主任久保弘幸、同技術職員仁尾一人が担当した。

4．本書で使用する標高値は、日本道路公団が設定した基準点を使用している。また、遺構の記録には、国土座標を使用し、方位は座標系を用いて示している。

5．遺構写真は、調査担当者が撮影した。また、空中写真は（株）パスコに委託したものである。また、遺物写真は（株）衣川（三宮写真室）に委託して撮影した。

6．整理作業は、平成７・８年度にわたり、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所にて実施した。その体制は本文中に記した通りである。

7．本書は、久保弘幸・仁尾一人が執筆・編集を担当し、小川美奈がこれを補助した。文責は本文目次に記した通りである。

8．本報告書に関連する、遺物および調査資料は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（魚住分館）にて保管している。

9．本報告書作成にあたり、下記の方々より極めて有益なご教示、ご指導を賜った。記して謝意を表したい。神戸市立博物館（当時）　森田　稔、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　水口富夫、岡田章一、岸本一宏、池田征弘（敬称略・順不同）。

目　　次

本 文 目 次

第１章　調査の経緯
　第１節　調査に至る経緯 ……（久保）　1
　第２節　発掘調査の経過 ……（久保）　1
　第３節　整理作業の経過 ……（久保）　2
第２章　周辺の環境
　第１節　地理的環境 ……（仁尾）　3
　第２節　歴史的環境 ……（仁尾）　5
第３章　調査の成果
　第１節　遺構
　　Ⅰ．窯体 ……（久保）　6
　　Ⅱ．灰原 ……（久保）　6
　第２節　遺物
　　Ⅰ．出土遺物の概要 ……（久保）　9
　　Ⅱ．組成と各器種の記載 ……（久保）　9
　　Ⅲ．小結 ……（久保）　12
　　Ⅳ．その他の遺構と遺物 ……（久保）　19
第４章　まとめ ……（仁尾）　21
英文サマリー ……（久保）　40
編集後記 ……（久保）　41

挿 図 目 次

第１図　遺跡の位置 ……　3
第２図　周辺の遺跡 ……　4
第３図　調査区設定位置図 ……　8
第４図　その他の遺物実測図 ……　14
第５図　小名田窯跡出土須恵器椀口径・器高分布図 ……　15
第６図　小名田窯跡出土須恵器椀底径分布図 ……　16
第７図　小名田窯跡出土須恵器皿口径・器高分布図 ……　17
第８図　小名田窯跡出土須恵器鉢口径・器高分布図 ……　18

表　目　次

第１表　小名田窯跡出土土器観察表（１）　……　27
第２表　小名田窯跡出土土器観察表（２）　……　35
第３表　小名田窯跡出土土器観察表（３）　……　39
第４表　小名田窯跡出土土器観察表（４）　……　39

図　版　目　次

図版１　小名田窯跡の位置
図版２　小名田窯跡の位置（明治20年陸軍作成地図）
図版３　小名田窯跡周辺地質図
図版４　山陽自動車道路線図
図版５　小名田窯跡地形測量図
図版６　窯体内土器出土平面図　第１床面／第２床面
図版７　窯体平面図および、断ち割り断面図
図版８　灰原土層断面図（１）
図版９　灰原土層断面図（２）
図版10　小名田窯跡出土土器（１）
図版11　小名田窯跡出土土器（２）
図版12　小名田窯跡出土土器（３）
図版13　小名田窯跡出土土器（４）
図版14　小名田窯跡出土土器（５）
図版15　小名田窯跡出土土器（６）
図版16　小名田窯跡出土土器（７）
図版17　小名田窯跡出土土器（８）
図版18　小名田窯跡出土土器（９）
図版19　小名田窯跡出土土器（10）
図版20　小名田窯跡出土土器（11）
図版21　小名田窯跡出土土器（12）
図版22　小名田窯跡出土土器（13）
図版23　小名田窯跡出土土器（14）出土土器底部拓影
図版24　長命寺池底検出の樋　平面図（１）
図版25　長命寺池底検出の樋　平面図（２）
図版26　清水廻り遺跡平面図

写真図版目次

写真図版１　小名田窯跡遠景（１）（２）
写真図版２　窯体および、灰原検出状況（１）（２）
写真図版３　窯体完掘状況（１）（２）
写真図版４　窯体第２床面検出状況
　　窯体断ち割り状況
写真図版５　小名田窯跡出土土器
写真図版６　小名田窯跡出土土器（１）
写真図版７　小名田窯跡出土土器（２）
写真図版８　小名田窯跡出土土器（３）
写真図版９　小名田窯跡出土土器（４）
写真図版10　小名田窯跡出土土器（５）
写真図版11　小名田窯跡出土土器（６）
写真図版12　小名田窯跡出土土器（７）
　　小名田窯跡出土瓦
写真図版13　小名田窯跡出土土器（８）
　　小名田窯跡出土土器・石・瓦

第1章　調査の経過

第1節　調査に至る経緯

本調査は、日本道路公団大阪建設局が事業主体者となる、山陽自動車道（神戸～三木）の建設にともなって実施されたものである。小名田窯跡は周知の窯跡であり、兵庫県教育委員会では、山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査の一環として、平成2（1990）年度に確認調査を実施した。その結果、現長命寺池の堰堤下に、灰原が遺存していることが明らかになったため全面調査をおこなうこととなり、平成5（1993）年度にこれを実施した。確認調査・全面調査の体制は下記の通りである。

確認調査の組織（平成2年度）

調査事務	兵庫県埋蔵文化財調査事務所	
	所長	内田隆義
	副所長	村上紘揚
	副所長	才木　繁
	総務課長	小池英隆
調査担当	所長補佐兼調査第1課長	大村敬通
	主査	大平　茂
	技術職員	山上雅弘

全面調査の組織（平成5年度）

調査事務	兵庫県埋蔵文化財調査事務所	
	所長	池水義輝
	副所長	渡邊　清
	副所長	三木正則
	総務課長	田中豊英
	企画調整班長	池田正男
調査担当	調査第2班長	西口和彦
	主任	久保弘幸
	技術職員	仁尾一人

第2節　発掘調査の経過

窯跡本体は、池の堰堤下から池底に埋没していることが予想された。このため、堰堤と池底のヘドロの除去を日本道路公団に依頼し、この作業が完了した後、人力による調査を実施した。

堰堤を除去した時点で、すでに窯体と灰原が露出したため、以下の調査はすべて人力によりおこなった。灰原は、池底にあたる部分で良好に遺存していたが、堰堤の南側は、堰堤と水田の造営によりほとんどが削平されていた。灰原には、窯体の主軸方向を基準とした断面観察用の畔を設定し、これに沿ってサブトレンチを掘削して、堆積状況を確認しつつ全面の掘り下げをおこなった。窯体については、遺存状況が極めて劣悪であったため、ただちに床面の調査となった。

調査の記録は、国土座標を用いた座標系を調査区内に設定し、これを基準として遺構実測をおこなった。また調査終了時点で、空中写真の撮影をおこなった（(株）パスコに委託)。

第３節　整理作業の経過

整理作業は、平成６年度～８年度の３年度にわたって実施した。平成６年度は、主として遺物の水洗・ネーミング、７年度は図化をおこない、８年度は主として、写真撮影、遺構図補正、トレース、レイアウト等を実施した。遺物写真の撮影は、（株）衣川に委託し属託員が写真の整理作業を実施した。

整理は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所の整理・普及班が担当し、嘱託員が全作業にあたった。

整理作業の組織は、次の通りである。

整理の組織（平成６年度）

整理事務	兵庫県埋蔵文化財調査事務所			
	所長	池水義輝		
	副所長	渡邊清		
	副所長	三木正則	整理担当属託員	
	総務課長	石井守	多賀直子	衣笠雅美
	企画調整班長	輔老拓治	西原美知子	長谷川洋子
整理担当	整理普及班長	岡崎正雄	伊藤ミネ子	江口初美
	整理普及班	高瀬一嘉	川上啓子	家光和子

整理の組織（平成７年度）

整理事務	兵庫県埋蔵文化財調査事務所			
	所長	青木正之		
	副所長	渡邊清		
	副所長	龍見祐輔	整理担当属託員	
	総務課長	石井守	小川美奈	横山麻子
	企画調整班長	輔老拓治	酒井喜美子	萩原里美
整理担当	整理普及班長	岡崎正雄	岡崎輝子	
	整理普及班	中村弘	尾崎比佐子	

整理の組織（平成８年度）

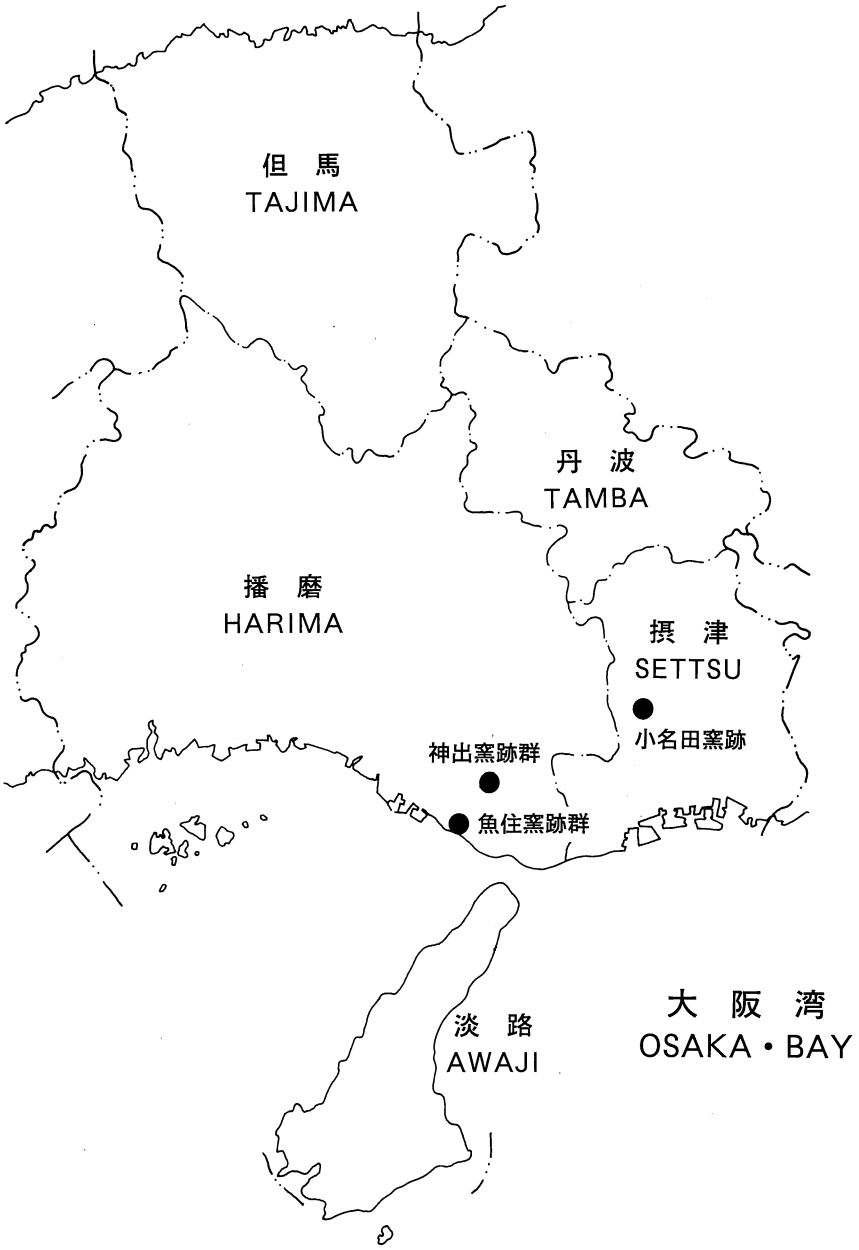
整理事務	兵庫県埋蔵文化財調査事務所			
	所長	青木正之	整理担当属託員	
	副所長	木下猛	小川美奈	宮沢照世
	副所長	龍見祐輔	石野照代	喜多山好子
	副所長	大村敬通	早川亜紀子	武田恵美子
	総務課長	石井守	中田明美	島村順子
	企画調整班長	輔老拓治	蔵幾子	茅原加寿子
整理担当	整理普及班長	岡崎正雄	日々雇用職員	
	整理普及班	中村弘	河上智晴	

第2章　周辺の環境

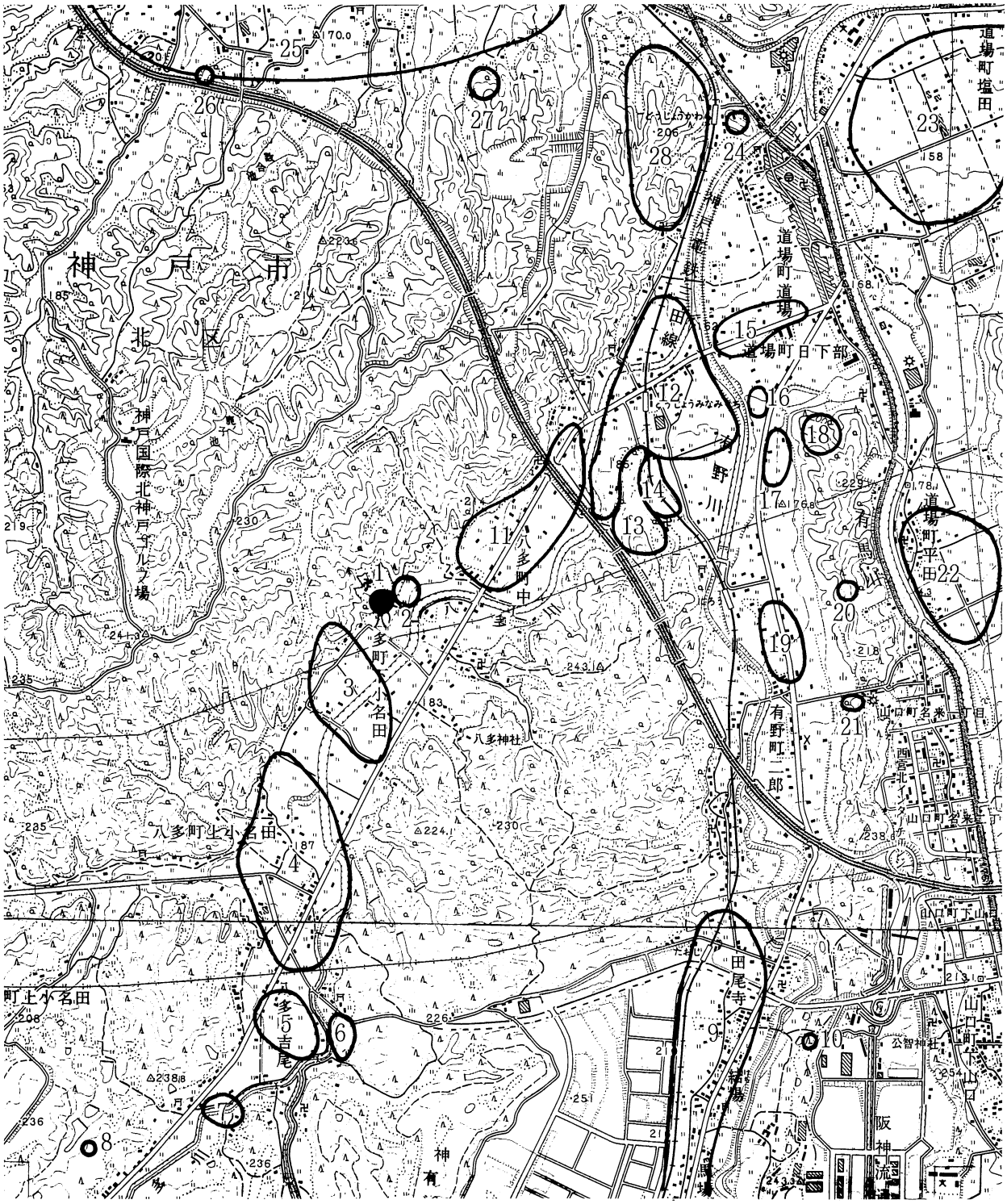
第1節　地理的環境

小名田窯跡は、三田市と北接する、神戸市北区八多町下小名田に所在する。周辺は、中国縦貫自動車道の建設から、近年では「神戸三田国際・公園都市」として、神戸市の鹿の子台や藤原台、三田市において急速に開発が進み、ニュータウンが建設されている。このため、周辺地域における遺跡の発掘調査は広範囲に及び、飛躍的に行われている。

調査地は、北側背後にほぼ東西に延びる丘陵の主尾根から、南向きに派生した支尾根裾部の緩傾斜地に位置し、標高は約185mを測る。前方は、武庫川の支流である八多川が北流し、沖積地が広がるが、調査地背後には、近世以降、長命禅寺が所在し、ため池として長命寺池が造成されている。窯跡は、この長命寺池の池底および、堰堤下より大半が破壊された状態で発見されたものである。



第1図　遺跡の位置



第2図　周辺の遺跡

1．小名田窯跡	2．清水廻り遺跡	3．下小名田遺跡	4．上小名田遺跡
5．吉尾遺跡	6．吉尾城跡	7．鹿堀遺跡	8．法仏坊廃寺
9．岡場遺跡	10．田尾寺東山古墳	11．八多中遺跡	12．日下部遺跡
13．小坂遺跡	14．二郎宮ノ前遺跡	15．日下部北遺跡	16．オキダ遺跡
17．二郎遺跡	18．二郎古墳群	19．下二郎遺跡	20．二郎南古墳群
21．東二郎遺跡	22．平田遺跡	23．塩田遺跡	24．松原城跡
25．宅原遺跡	26．雲禅寺廃寺	27．宅原城跡	28．北神ニュータウン遺跡群

第２節　歴史的環境

小名田窯跡が所在する神戸市北区において、周辺の歴史的な環境を概観するには、本来、三田盆地を含む広い地域からとらえるべきものであるが、ここでは、八多川、有野川、有馬川、長尾川の武庫川の支流である中小河川流域における一地域についての時代の変遷を追っていきたい。

この地域においては、旧石器時代の遺跡の存在や、石器の出土は認められず、縄文時代の後期あるいは、晩期に至り、宅原遺跡や塩田遺跡において遺構にともなうものではないものの縄文土器が出土することが確認されている。続く弥生時代では、後期の竪穴式住居址や土坑が検出された宅原遺跡や、石包丁、石斧等の石器が出土し、中期から後期にわたる拠点的な集落址と考えられる塩田遺跡が確認されている。古墳時代に入ると、木棺直葬墳である北神ニュータウン遺跡群第９地点（１号墳）が４世紀初頭に築造されたのを始めとし、有野川右岸の日下部地域において、５、６世紀に木棺直葬や竪穴式石室を主体部とする群集墳の形成や、馬具を副葬し６世紀後半に築造された横穴式石室墳であるオキダ古墳群（２号墳）の築造が認められる。また、古墳時代の集落遺跡については、二郎宮ノ前遺跡より、古墳時代後期末の遺構が、宅原遺跡においては、古墳時代のほぼ全期間を通じた遺構が検出されている。

奈良時代以降、旧摂津国は「和名類聚抄」に有馬郡五ケ郷として、春木郷、幡多郷、羽束郷、大神郷、忍壁郷の名がみられるが、幡多郷に属するこの地域には、遺跡の数が一挙に増加する。八多川流域における上小名田遺跡、下小名田遺跡、八多中遺跡などであり、有野川流域における日下部遺跡、二郎宮ノ前遺跡、小坂遺跡などである。また、長尾川流域における宅原遺跡は、縄文時代から、弥生時代、古墳時代へと集落が営まれ、さらに「評」の墨書のある須恵器が出土している。その後も宅原遺跡では、平安時代後期から鎌倉時代、室町時代へと続く掘建柱建物跡などが発見されており、弥生時代後期から中世にかけての拠点集落として、古代の有馬郡衙の所在遺跡として考えられている。なお、幡多郷の地名には、現在でも八多町や道場町日下部など古代豪族の秦氏、日下部氏との関係が考えられる地名が残されているものが多くみられる。

本報告書に記載されている小名田窯跡は、出土した土器から12世紀後半から13世紀前半に操業された窯跡であり、周辺遺跡の土器供給地のひとつと考えられる。隣接する清水廻り遺跡は、小名田窯跡の工房址と推定され、中世の窯跡と集落跡を理解しうる遺跡群である。

参 考 文 献

「兵庫県史　考古資料編」兵庫県　1992年
「下小名田遺跡－（その４）－」淡神文化財協会　1993年
「神戸市埋蔵文化財分布図」神戸市教育委員会　1996年
「上小名田遺跡の研究」神戸女子大学考古学研究室編上小名田遺跡調査委員会刊　1994年
「宅原遺跡　宮之元地区の調査」妙見山麓遺跡調査会　1996年

第3章　調査の成果

第1節　遺　構

Ⅰ．窯体（図版6）

窯体は、背後の丘陵から、南西方向に緩やかに張り出す斜面に立地している。兵庫県地質図（藤田和夫編　1996）によれば、この丘陵は神戸層群により構成されており、その最上部には大阪層群の上部累層からなる高位面が見られるという。小名田窯跡は、おそらく大阪層群に相当するであろう硬質の砂層・シルト層を掘り抜いて築造されたのであろう。窯跡の大部分は、長命寺池とその堰堤の造営のため破壊されている。調査で検出できたのは、窯体の一部のみであり、これに付随する溝等は検出されなかった。

小名田窯跡の窯体は、遺存状況が極めて悪く、床面としては幅約1.2m，延長約1.9mが残存していたにすぎない。床面の周辺には、地山が熱により変色した領域が広がっている（図版6　網点部分）。この床面より約2m離れた斜面の上位に、わずかに熱変色した部分が残されており、窯体上部の痕跡と判断された（図版6）。また窯体下方には灰原が形成されているが、窯体との間は約2mにわたって破壊されているため、焚口部については不明といわざるをえない。上位の熱変色部から、焚口推定位置までを含めた延長は、約5mとなる。神戸市西区で調査されている、神出窯跡群の例を見るならば、本来の延長もこれに近いか、若干長かった程度と推察してよかろう。その主軸方向は、概ね北西～南東にあったものと思われる。

窯体の床面は、灰白色に還元焼成された面として、2面が検出された。下位の面を操業時床面、上位の面を第2次床面と呼称する。

操業時床面は、断面図第4層（図版7）上面に相当する。遺存していた延長はわずか1m程度にすぎないが、この間に小皿を中心とした遺物が検出された。また焼台と思われる石材数点も床面で検出されている。床面の横断形は、椀底状を呈しており、中央部の平坦面は、0.3～0.4mである。縦断形を見るならば、検出された最下方は斜度26°の斜面であり、0.3～0.4mの平坦面を挟んで再び斜度45°前後の斜面となっている。遺物はこの平坦部周辺に集中していた。

第2次床面は、延長約2mが遺存している。操業時床面と異なり、横断面での平坦部分の幅は、約0.75mと広い。最下方に平坦面があり、そこから斜度46°の急斜面を挟んで、斜度12°の緩斜面となっている。緩斜面の最上方で、小皿・椀からなる遺物群が検出された。

Ⅱ．灰原（図版8・9）

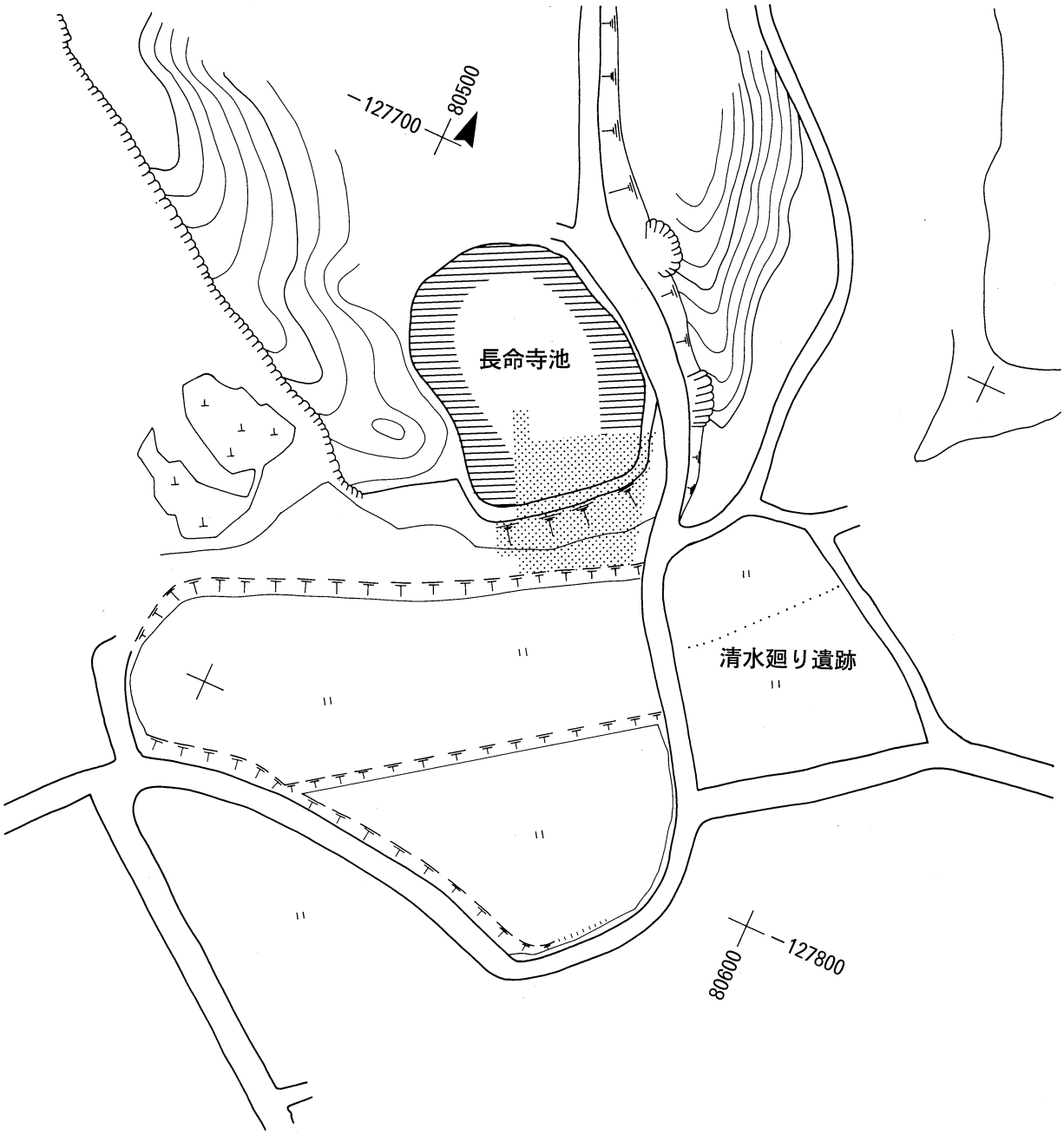
窯体が立地する斜面の下方には、灰原が形成されている。灰原は、窯体の主軸方向と同一方向に延びる。灰原中央部は、窯からの厚い廃棄物によって高く盛り上がっており、その両側を埋めるように堆積物の広がりが見られる。灰原の北西側は谷中にあたり、池が造営されたために破壊を免れていたが、南東側は堰堤と耕地の造営のため削平された範囲が相当広かったものと思われる。今回の調査で出土した遺物のほとんどが、灰原からの出土である。

断面観察から、灰原の堆積物は、まず窯体前面に形成されて小高い舌状に延び、その後この高まりの両側へ堆積したことが明らかである。この堆積物の間には、炭層、遺物層が複雑に挟まれており、操業回数を示唆している。調査にあたっては、平面的に全堆積物を区別して掘り下げることができなかったため、層位別の遺物取り上げは、あぜ部分に限定して実施した。

特に、窯体に近い断面4の灰原最下層であるD層からは、「生焼け」（酸化焔焼成）状態の椀が集中し

て出土しており、操業当初の焼成結果を示すものとして注目される。

なお、調査終了時点では、灰原の堆積が窯体の構築によって切られていたことから、本来窯跡が2基存在した可能性を考慮していた。しかし、灰原の堆積物が、まず窯体の前面に、主軸方向に沿って堆積していることを勘案すれば、やはり灰原は、遺存している窯体に由来するものと考える方が自然であろう。灰原の堆積物が窯体の構築によって切られていることについては、窯体の修復ないしは再構築にともなうものと考え、本来の窯跡も1基であったとしておきたい。



第３図　　調査区設定位置図

概　要

今回の調査で出土した遺物は、コンテナ約700 箱に達するが、その大部分は灰原の出土遺物であり窯体内出土の遺物で図示可能なものは、10点に満たない。灰原では、既述のように細分された堆積物の各層準から、遺物の出土が見られたが、最下層と上層との間で出土遺物の形態・組成等に相違点を見いだすことはできなかった。

整理作業では、遺物の器種分類を実施したのち、器種ごとの形態分類を試みたが、焼け歪みによる変形などもあり、椀・皿類については、形態分類のための明確な定義的根拠を見いだすことが困難であった。なお、各遺物の法量については、章末の表に一括した。

組　成

灰原・窯体からの出土遺物には、椀・高台付椀・皿・小皿・片口椀・片口鉢・鉢・壺および手捏ねの仕切り付土器が組成される。これらのうち大部分を占めるのは椀であり、皿がこれに次ぐ。他の器種はごくわずかな個体数にすぎず、片口鉢・鉢・壺・手捏ね土器は、図示した個体のみが出土している。計数を行っていないため、正確な組成比は不明であるが、椀は全体の90％程度を占めていよう。

椀（図版10～19）

椀は、明瞭な高台をつくり出すもの（ 図版19－373～378)以外は、形態的に一括して取り扱った。高台をつくり出すもの６個体は後述に委ね、ここではその他の椀について一括して記載する。

椀は、緩やかな膨らみをもって立ち上がる体部をもつものが主体をなしている。体部の形状から大きく変化することなく口縁部にいたる。口縁部は、端部をまるくおさめるか、またはわずかに外反させる例が大部分であるが、稀に強い外反を見せるもの（図版19－358・359)、端部を尖らせるもの（同358)、口縁端部内面を肥厚させるもの（同19－360～363)、端部外面を肥厚させるもの(図版13－143）等が見られる。また口縁部下位で体部がやや上方に屈折し、体部外面にわずかな稜を形成するもの(図版15－195・196)が認められる。

しかし以上のような形態の変異は、いずれも少数の個体に認められるのみで、これを根拠として椀の形態を細分することには慎重とならざるをえない。むしろここでは、土器製作時（轆轤成形時）のわずかなタッチの差と考えておきたい。

椀の口径は概ね14cm～18cm、器高は3.5cm～６cmの間に含まれるが、最も個体数が多いのは、口径15cm～17cm、器高４cm～５cmの間である。破片による口径の復原が大部分である上、焼け歪みによる変形を考慮せねばならないが、記載した全個体の計測値の分布が顕著な集中を見せることから（第５図)、上述の数値の信憑性は低くないと考えられる。

底部の形態は、ほとんどの個体が、この種の椀では最も退化した形態を示す。粗雑な糸切りの底部には調整は施されず、底部と体部との境界も不鮮明であり、わずかに平高台状の高まりをもつ例（図版19－364～372等）が散見されるのみである。極端な例では、底部にわずかな平坦面さえつくられず、椀を平面上に安定して置くこともできない。

見込み部の凹みも認められないものが大部分を占める。凹みをもつわずかな例でも、古い時期の椀に見られるような、底部に粘土板を接合したために生ずる底部全面に及ぶ凹みではなく、内底面から体部への稜線付近を、帯状にわずかに凹ませる程度のものである。

底部の直径は最小のもので3.9cm、最大のもので9.0cmである。記載した全個体の計測値を度数分布グラフ化すると、6.2cm～6.3cmをモードとする正規分布を示しており、平均値もこの前後になるものと思われる（第６図)。

高台付椀（図版19－373 ～378）

上述の椀以外に、明瞭な輪高台をもつ例が６個体見られる。高台の形態は逆三角形から台形など多様であるが、上述の椀に比べ、明らかに丁寧な調整が施されている。また378を除き、胎土は上述の椀類に比べ精選されており、焼成も明らかに堅緻である。これらの所属時期が異なっている可能性は、出土層準・状況から低いものと思われ、精製品として製作されていた可能性のほか、他の窯からの搬入の可能性が考慮される。

373は低い断面逆三角形の高台をもつが、高台の形態は整っているとは言えない。体部は底部から緩やかな膨らみをもちつつ立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部はまるくおさめられている。体部の厚みには大きな変化がない。

374は373と類似した高台を持つが、畳付部は平坦となる。体部は薄く、口縁端部は、上方にのびて薄く仕上げられている。

375は断面多角形状の高台を有する。畳付部は平坦面をなす。体部は、底部より膨らみをもって立ち上がり、口縁部下でわずかに外反する。口縁端部はまるくおさめられる。見込み部には、一段の凹みをもち、内底面中央部で再び隆起している。

376～378は底部のみの破片である。

376は375に類する断面多角形状の高台をもつ。375と同様、見込み部に一段の凹みをもち、内底面中央部が再び隆起している。

377はやや変形した高台の形状を示す。やはり375に近似した形態を示し、見込み部にはわずかながら凹みが認められる。

378は外方に開く高い高台を有する。高台は外方に直線的に伸びたのち、端部が外反している。胎土が他の例と明らかに異なる灰白色を呈しているうえ、粗粒の砂をまじえやや粗雑である。破断面に細かな欠損が密集し、本資料が埋没までにある距離を移動していることを示唆することから、本資料のみは混入の可能性を否定できない。

皿？（図版19－379・380）

379・380は皿とした。他の椀類に比べ、底径に対し器高が小さく偏平な感を受ける。ただし両資料とも破損品であり、径は復元されたものである。焼け歪みによる径の変化を考慮するならば、椀の可能性もあり得よう。ともに平坦で径の大きな底部から、屈折して直線的に開く短い体部を見せている。底径は他の椀に比べて、著しく大きく、特に380は11㎝前後の復原径となる。

小皿（図版20・21）

小皿は、椀に次ぐ組成比を占める。やはり明瞭に形態分類を行うことができないため、一括して記載する。

いずれも椀と同様、粗雑な糸切りの底部を有する。立ち上がりは、緩やかな膨らみをもつもの、ほぼ直線的なもの、やや外反するもの、概ね直上に立ち上がるものなどが認められる。口縁端部は、まるくおさめるものと肥厚させるものとが見られる。内底面には一定方向のナデが顕著に認められる。底部には、糸切りの後、簀の子状のものの上に置いた結果生じたと思われる、平行する圧痕が付着する例が、少なからず認められる（図版23－395～547）。こうした例は、小名田窯跡では、小皿に顕著であるが、少数の椀にも認められる。

小皿の口径は概ね7.0～9.0㎝、器高は1.0～1.6㎝の間に大部分の個体が含まれ、特に口径は8.0㎝、前後に集中する傾向が顕著である（第７図）。

片口椀（図版22）

10例を記載する。口縁部を凹ませて片口とするものである。整理作業開始当初は、焼け歪みにより生じた形態かと考えていたが、片口部を明らかに作出する例が見いだされたため、１細分形態として認定した。片口の形態は、口縁の一部をわずかに凹ませたもの（図版22－556・564)から、次項で記載する片口鉢と同様、幅広のＵ字形を呈する例(図版22－559・562)まで見られる。底部から体部に欠けての形態と法量が、既述の椀と概ね同一と認定しうる範疇にあるため、椀のバリエーションの一部と考えてよかろう。558のみは、形態が著しく崩れており、焼け歪みの可能性があろう。また564は片口の設け方がきわめてわずかである。

高台付片口鉢（図版22）

極めて特異な器種で、同時期の神出・魚住の窯跡でも、出土例は報告されていないようである。高い高台と、偏平な感を受ける浅い体部を特徴としている。４点が出土したが、このうち567は、灰原ｒ層の出土である。

566は底部を欠き、567も片口部分を欠くが、いずれも体部の形態・胎土・焼成から見て、本器種に属するものであろう。

566は、わずかに膨らみをもって立ち上がる体部から外反する口縁部に至り、端部はまるみをもつ。片口部は、幅広のＵ字形を呈する。

567は、やはりわずかに膨らみをもって立ち上がる体部を有する。口縁部はまるくおさめる。高台は逆台形状の断面形を呈し、外面はほぼ直立した形状を見せる。畳付部は平坦面となる。

568も上２者と同様の体部形態を示すが、口縁端部は切り落とされたような平坦面をなす。片口部は幅広のＵ字形を呈する。高台は、まるみをもちながら外方に開き、畳付部もまるみをもつ。

569もわずかに膨らみをもつ立ち上がりを見せるが、上３者と比較して、より開きが大きい。片口部は、幅広のＵ字形を呈する。高台は外方に直線的に開き、端部は傾斜する平坦面となっている。

高台付片口鉢の口径は、椀および片口椀よりも大きく、18～20㎝を測るが、器高は５㎝前後と椀と大差がない。すなわち、鉢部分の有効な深さが小さいこととなる。鉢部分の有効深度は、概略で3.5～4.0㎝程度であり、口径と比べて偏平な感を受ける。器壁は椀に比べてやや厚く、重量感がある。これは食器である椀に対し、調理器としての鉢の機能を考慮したうえでのことであろうか。ただ、それにしては有効器深が小さく、高台のみの高さで、外面で10～12㎜を測るという形状は、いささか奇異な感を受ける。いずれにせよ、同時期の他の窯跡で類例を見ないことから、型式学的にも、土器流通の点からも注目される資料である。

鉢（図版22）

直径が20㎝を超える大型の鉢を、本器種に分類した。７個体が出土しており、すべてを記載する。完形を保つ例はないが、他の遺跡での出土例から、片口となる可能性は高い。

570は底部を欠く。内・外面ともに、わずかな凹凸を見せながら、直線的に立ち上がる体部をもつ。口縁部は多角形状を呈し、端部はほぼ直上にのびている。このため口縁端部外面には、２条の稜線が認められる。内面には、ヘラ状工具によると思われる調整痕が、縦横に認められる。

571は底部から体部下方の破片である。ユビ押さえにより、底部をやや高台状につくりだしており、体部は直線的に外上方に立ち上がる。

572は底部を欠く。ゆるやかな膨らみをもって立ち上がる体部をもち、口縁部外面はやや屈折して再び内彎気味に開く。体部と口縁部付近では、器壁の厚さに著しい差が認められる。口縁端部には平坦面が形成されており、このため外面には１条の稜線がみられる。

573は底部の破片である。外面にはユビ押さえの痕跡が顕著であるが、571と異なり、底部は平坦面と

なる。内面にはヘラ状工具によると思われる調整痕が、縦横に認められる。

574は底部の中央を欠損している。平坦な底部から、直接立ち上がり、概ね直線的に開く体部を有す内面はゆるやかなカーブを見せており、口縁部でわずかに屈折して上方にのびる。端部はまるくおさめられる。

575は口縁部のみの破片である。口縁部にはわずかに凹んだ面が形成され、端部は上方に向かって薄く尖るように拡張されている。このため口縁部外面には、明瞭な稜線が形成されている。

576も底部を欠く。やや外反気味に立ち上がる体部をもち、口縁部には575と同様わずかに凹んだ面が形成されている。端部はやはり上方にのびるが、575ほど顕著ではない。

鉢の法量は、口径が概ね26〜33㎝、器高が10㎝前後を主体としている。

甕（図版22）

577は小型の甕である。全体に厚く、成形も粗雑な印象を受ける。体部中央に最大径があり、体部の側面形態は概ね紡錘形を呈する。頸部は強く屈折し、短く外反する口縁部にいたる。底部は厚みを増すが、特につくり出されておらず、極めて不安定な形状と言えよう。体部外面から口縁部下部には、平行タタキが観察される。タタキは、口縁部下部〜体部上方では斜位に、体部中央では横位に、体部下方では縦位に施されている。その重複関係の観察から、少なくとも体部中央のタタキが下方に先行していたことが看取される。

焼成は全体に不良で、酸化炎焼成の域を出ていない。さらに接合された破片間に著しい色調の差が認められ、一部が二次焼成を受けていることが明らかである。

瓦(図版23)

瓦は軒平瓦１点のほか、平瓦片数点が出土している。

578は軒平瓦である。上面に粗い布の痕跡をとどめる。胎土・焼成には本窯跡出土の須恵器との差異を見いだしがたく、小名田窯跡で生産されたものと判断される。端面は、全体の約1／2程度が残存しており、巴文が１か所に認められる。東播系の瓦に指摘される「包み込み技法」の有無は、断面観察では不明瞭である。瓦当面が矮小化していることから、あるいはこうした技法は採用されていないのかもしれない。

手捏ね土器(図版23)

579・580は手捏ねの須恵器である。いずれも約半分を欠損する。中央部に仕切りを設けるという特殊な形態を示す。同一時期では、寡聞にして類例を知らず、注目される資料ではあるが、その機能面については不明と言わざるをえない。粗雑な作りで、調整もまったく行われていないことから、日常的な用途をもつものと推察される。古墳時代の須恵器では、大阪府陶邑窯跡群に近似例がみられる。これはやはり手捏ねの身に、十字形の仕切りをつけたものである。

Ⅲ．小　　結

編年上の位置づけ

小名田窯跡で出土した遺物から、従来、編年上の特徴とされてきた形態として、以下のような点が指摘できる。

Ⅰ．椀は、底部と体部の境界が不鮮明なものが大部分を占める。高台もごく少数の個体に認められるのみである。見込み部を一段凹ませる例は極めて少ない。

Ⅱ．底部は大型化する。

Ⅲ．椀の体部は、総じて膨らみに乏しい。

Ⅳ．鉢の口縁部はほとんど拡張されず、まるくおさめるか、平坦な面をもつように仕上げられる。

Ⅰ～Ⅲの点は、東播系須恵器の編年（森田1987）では、神出第Ⅱ期の特徴とされており、特に底径の大きな椀は、第Ⅱ期第２段階の特徴とされている。しかし、一方でⅣのような鉢の形態は、神出第Ⅰ期に見られるものとされており、両者の間に整合的とはいえない部分が指摘できる。

さらに、神出第Ⅱ期には、椀の生産が急減し鉢の生産が急増することが指摘指摘されているが、小名田窯跡では、生産の大部分を椀が占めており鉢の比率は極めて低い。

小名田窯跡の時期は、極めて退化した椀の形態から、編年上は神出第Ⅱ期の第２段階（12世紀末～13世紀初頭）に位置づけるべきであろう。上述のような相反する特徴は、現在のところは、東播磨から離れた位置にある小名田窯跡の、局地的な現象として取り扱わざるをえない。しかし、神出・魚住窯跡群で生産される器形を必ずしも踏襲しない窯跡が、この地域に存在することについては注意を喚起しておきたい。

器種組成の特徴

器種組成では、椀の多さとその対局にある鉢の僅少さが注目される。神出窯跡群で鉢の生産が増加して、椀の減少が指摘される時期にその逆の組成を示すことは、既述のように、ひとまず地域的な現象であったと理解しておきたい。しかしこのことはとりもなおさず、小名田窯跡の須恵器が供給された地域が、ごく狭いものであったことを示唆することとなる。周辺地域における、今後の資料の増加に期待しておきたい。

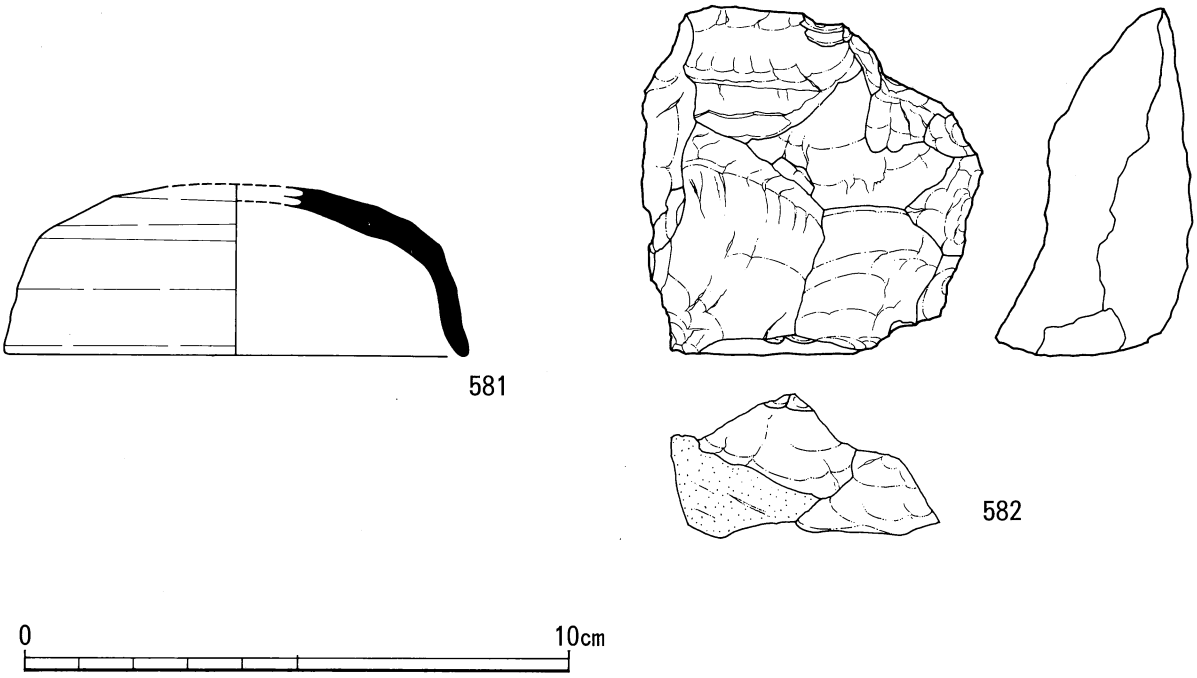
出土した器種の中で、注目しておきたいものには、高台付き片口鉢がある。わずか４個体の出土ではあるが、従来、東播系須恵器のなかには見られない器種・形態であり、今後の類例の増加が期待されよう。こうした独自の器種を生産させた背景が、局地的な事情であったのか、より広い範囲にわたる背景が存在したのかは興味深い。

また、巴文をもつ軒平瓦も注目される。神出古窯跡群では平安京内の宮殿・寺院の造営に用いられた瓦が生産されていたことが知られているが、小名田窯跡のような小規模な窯で生産された瓦が、どのような供給先をもっていたのかは、今後解決されるべき問題であろう。在地の有力者層がどのような館を保有していたかは判然としないが、今後の周辺遺跡の調査にあたっては、同笵瓦の検出に努めたい。

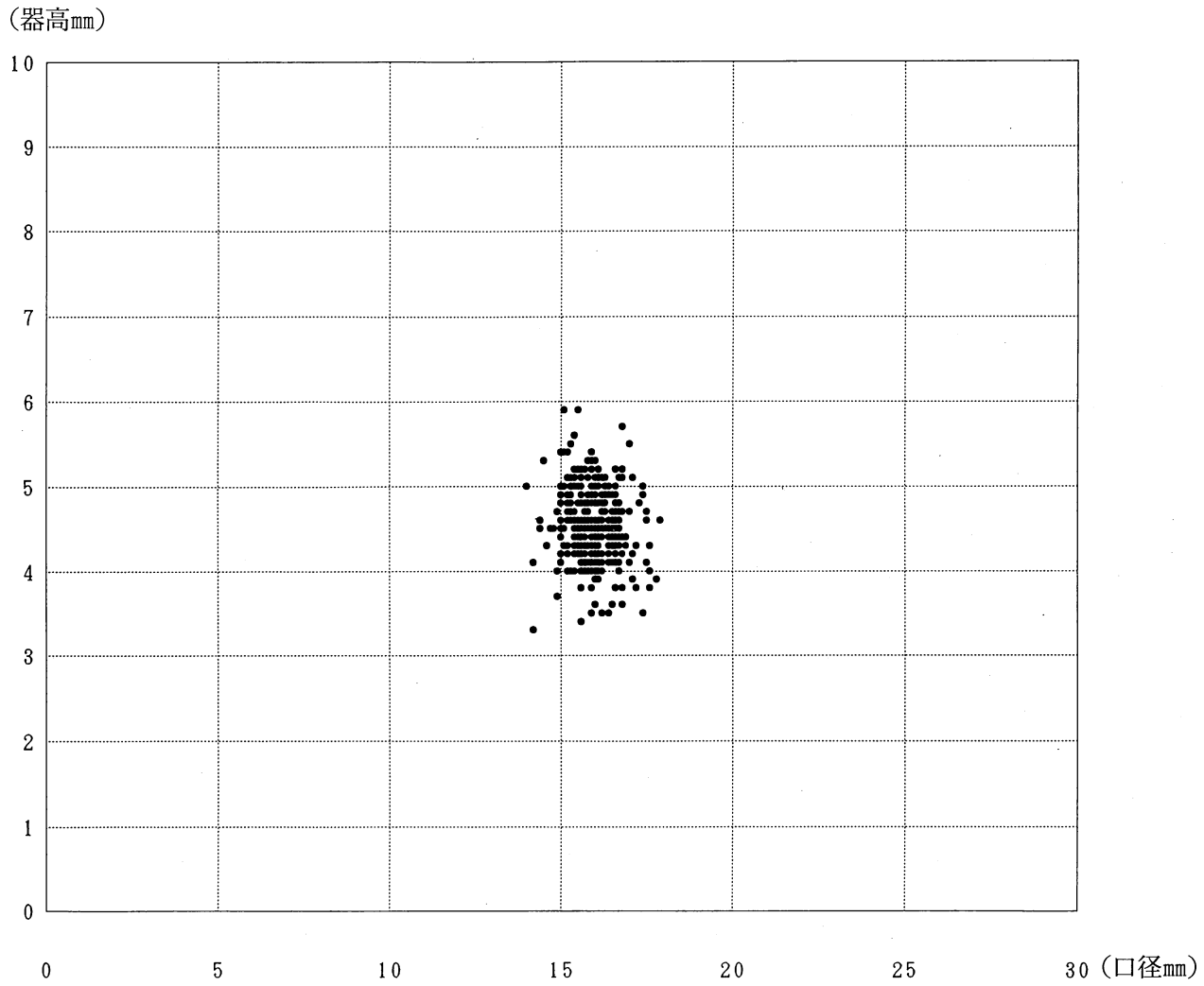
引用文献

森田　稔　　1987　「東播系中世須恵器の生産と流通」　『中近世須恵器の基礎研究』Ⅲ　日本中世土器研究会

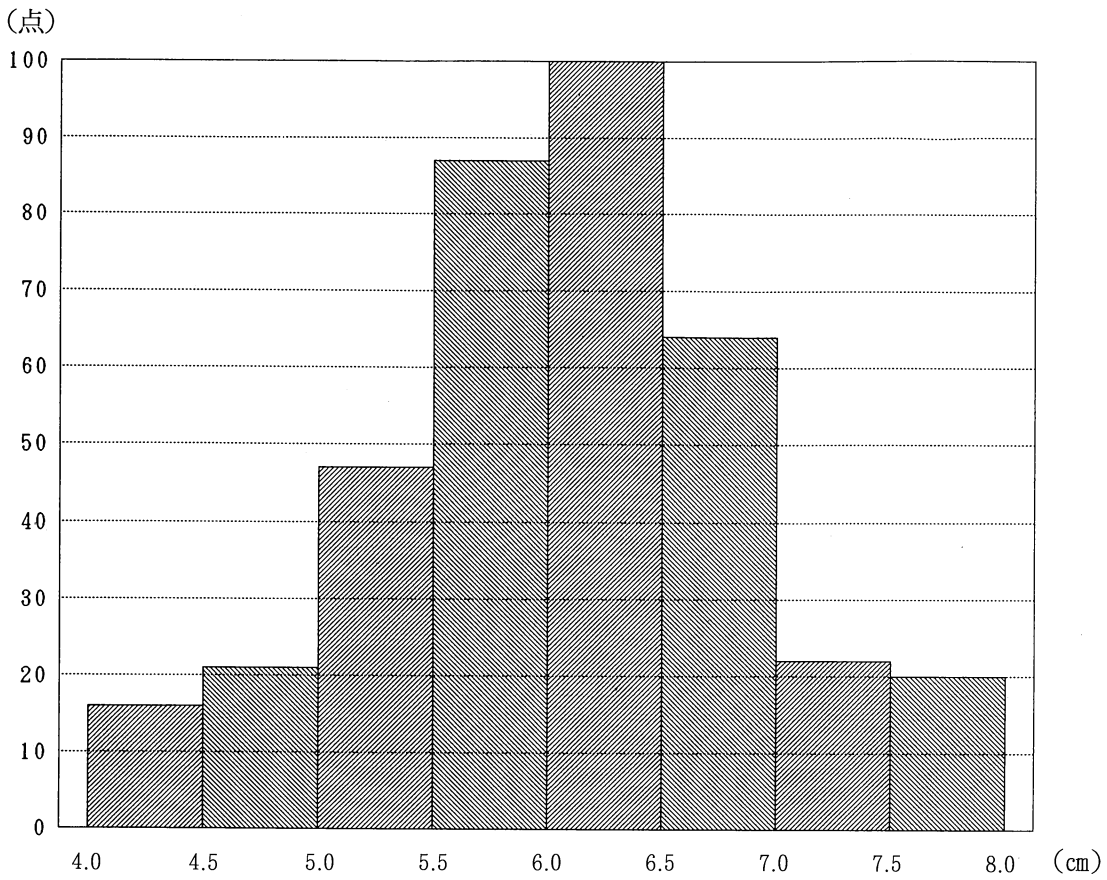
藤田和夫編　1996　「第４章　被覆層Ⅰ」　『兵庫の地質』（付図『兵庫県地質図』）兵庫県土木部（財）兵庫県建設技術センター



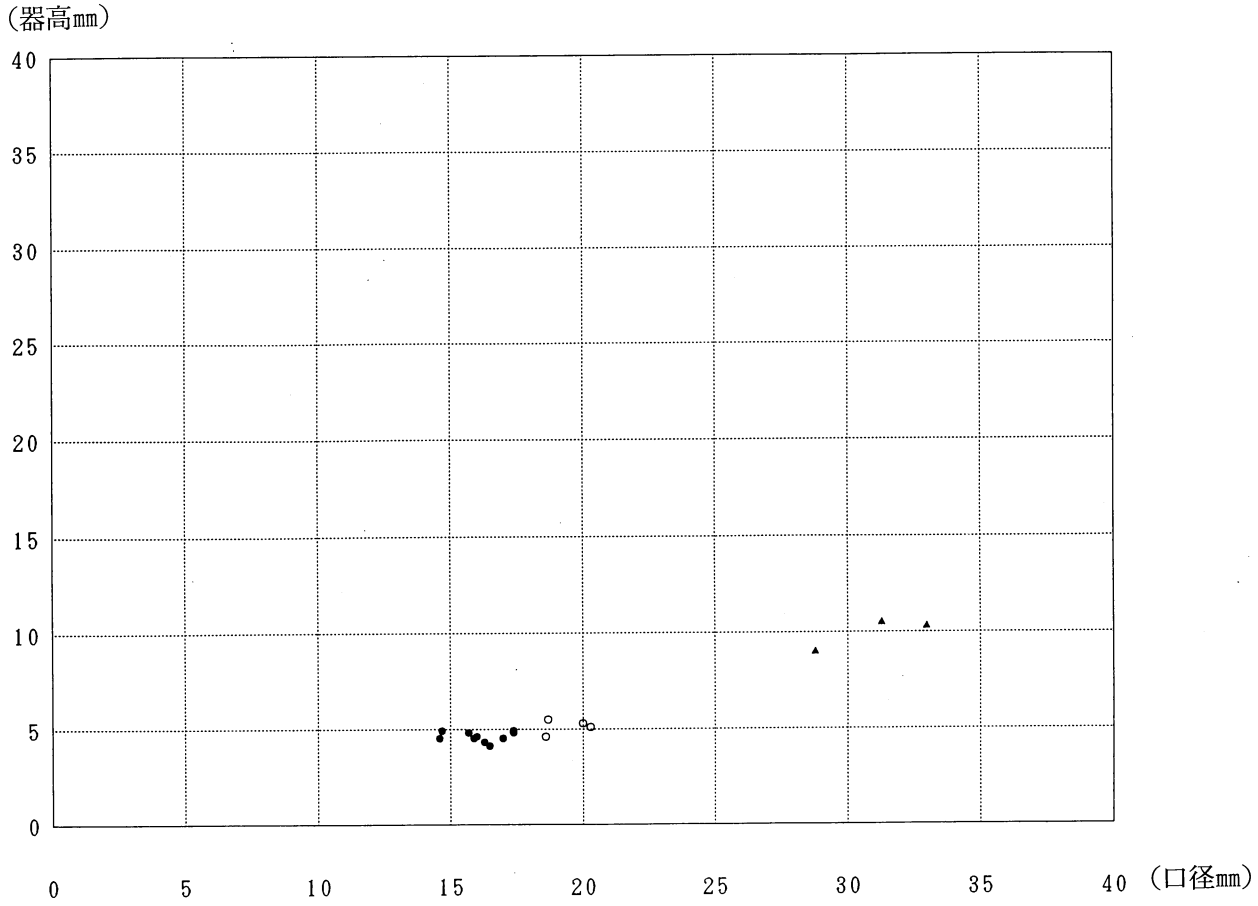
第４図　　その他の遺物



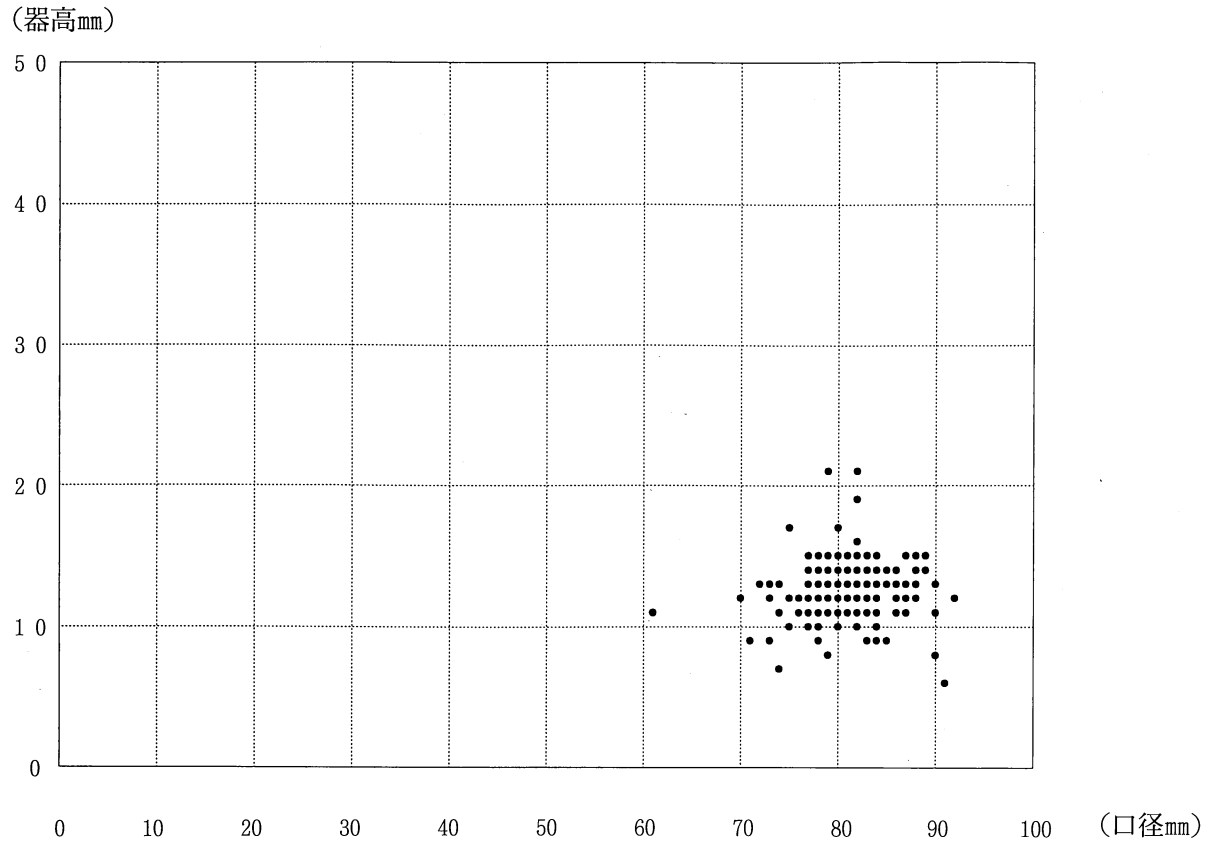
第５図　　小名田窯跡出土須恵器椀口径・器高分布図



第６図　　小名田窯跡出土須恵器椀底径分布図



第７図　　小名田窯跡出土須恵器片口椀・片口鉢・口径・器高分布図



第8図　小名田窯跡出土須恵器皿口径・器高分布図

Ⅳ．その他の遺構と遺物

１．樋（図版２３）

長命寺池の底より、多数の打設された杭とともに木製の樋が検出された。現在の池底から、厚さ３ｍを超えるヘドロの堆積を除去したのちに検出されたものであり、長命寺池築造時の樋である可能性も高い。しかし残念ながら、樋の時期を示す遺物は検出されなかった。

樋は針葉樹と思われる樹木の、枝を除去した幹を利用し、これをくり抜いて造られていたが、一部には、角材を利用したものも認められたことから、建造物の廃材を転用した可能性も勘案される。蓋は厚さ数㎝の板材が用いられており、多くの部分で樋の延長方向にかけられていたが、一部では直交方向にかけられていた。遺存状況は池側ほど良好で、蓋も樋本体もほぼ往時の状況をとどめていた。しかし末端部に近づくほど遺存状況は悪化し、末端部では材そのものが腐朽して消失していた。

樋の先端は、長命寺池の中央付近にまで延びており、先端部には木製の栓がされていた。栓に接する部分の蓋には、中央部に直径15㎝程度の円形の孔が開けられていた。この部分には、竹製等の筒を垂直に挿入し、池の水面にまで突き出すように造っていたのであろうが、残念ながら上部構造は遺存していなかった。

樋の末端は、蓋・樋本体ともに腐朽していたうえ、池の築堤のため削平を受けており、最終的にどこへ給水されていたかを確認することはできなかった。

この樋と窯跡との関連は、樋の年代が決定できない以上不明と言わざるをえない。しかし、長命寺池が造営された際には、堰堤も現在のように高くなく、従って小名田窯跡の灰原・窯体の大部分が、池の堰堤付近に露出していたことは確かである。

なお、検出された樋は、延長26m、幅0.4m、高さ0.3m、である。

２．杭　　列

樋の検出面と同一の面で、長命寺池が立地する谷の奥側に、多数の杭が打設された、杭列が検出された。杭は数列にわたっており、池の堤防の構築に伴うものと思われる。樋と同様、深いヘドロの下に検出されたことから、長命寺池造営時の堤防に伴う可能性が考慮される。

杭列に伴う遺物はなく、やはり時期を確定することは困難である。

３．その他の遺物（第４図　581・582）

窯跡に関連しない遺物として、古墳時代の須恵器１点と時期不明の石器１点が出土した。いずれも灰原からの出土であり、何らかの理由による混入と思われる。

581は須恵器杯蓋である。中央部を欠損するが、比較的丁寧な器面の調整が看取される。ゆるやかな傾斜をもつ天井部から、屈折して稜線を形成し口縁部に至る。口縁部はわずかに外反する。６世紀の末ころに属するであろうが、当該期の古墳、窯跡は近隣には知られていない。しかし、転磨の痕跡はほとんど見られず、至近距離からの混入と判断されることから、背後の丘陵に未知の古墳が存在した可能性を指摘しておきたい。口径8.7㎝、器高3.2㎝。

石器（582)は、同じく灰原より出土した。裏面は全面が自然面に被われており、亜角礫を素材としたことが理解される。石材は不明であるが、結晶を含む火山岩である。礫の周囲より、求心状の剥離を進めており、円盤状石核の一種と判断される。右側縁には、裏面側からの細かいがやや不規則な剥離が断続的に観察されることから、石核転用のスクレイパーとも考えられる。所属時期は不明であるが、器表面の風化が進行していることと、本地域周辺では、弥生時代以降にサヌカイト以外の石材が使用されることが稀であることから、縄文時代以前のものと考えたい。さらに言及するならば、このような円盤状の石核が用いられた時期としては、後期旧石器時代でもより古い時期またはそれ以前が指摘できよう。

しかしながら本遺跡周辺では、当該時期の遺跡は知られておらず、いずれにせよ今後の調査に問題を残す資料である。

第4章　まとめ

今回調査を実施した小名田窯跡では、窯本体の残存状況は極めて悪く、窯体の大きさ、各部の寸法、傾斜角度などの計測値をほとんど得ることができず、窯体の構造に関する資料は多くを得られなかった。しかし、窯体の断ち割り調査において、床面が2面確認されたことから、窯の操業は複数回行われていたと考えられる。また、窯体前面に広がる灰原からは、コンテナ約 700箱に及ぶ遺物が出土した。灰原は、窯体の大半を破壊した近世の池の造営により、南東側を一部削平されているが、広い範囲にわたって破損した遺物層と、焼土あるいは、炭層が堆積していた。出土した遺物は、椀、高台付椀、片口椀、皿、小皿、片口鉢、高台付片口鉢、甕および、手捏ねの仕切り付土器などの土器類の他に、軒平瓦、平瓦などの瓦類数点である。出土した土器類では、椀が約90パーセントを占め、小皿がそれに続き、その他の器種はそれぞれ数点ずつである。

以下に、「小名田窯跡の窯体構造」および、「小名田窯跡出土土器の編年上の位置付け」さらには、「小名田窯跡周辺の遺跡より出土した土器類」について、若干の考察を行い、小名田窯跡発掘調査のまとめとしたい。また、小名田窯跡との関連性が強い清水廻り遺跡[1]についても、その概要を「清水廻り遺跡との関連について」として述べておきたい。

小名田窯跡の窯体構造

小名田窯跡より発見された窯体は、部分的にわずかに残存していたため、窯体構造についてその詳細を記述することは不可能であるが、残存している部分あるいは、復元より推定されるそれらについてできうる限りの知見をあげておきたい。

わずかに残存していた窯体の床面を観察する限りでは、その一部が階段状に構築されていたものと考えられる。ほとんど傾斜が認められない緩やかな面の上方ないし下方には、傾斜角度が30°を超える急斜面（図版7　窯体断ち割り縦断面　4層）があり、ふたたび緩斜面につながっている。このような階段状の構造が、窯体全体にあったのか、残存している部分にのみ構築されていたのかは、判断する資料がなく、不明といわざるをえない。しかし、小名田窯跡に近い時期の魚住古窯跡群の調査例中、33号窯で焚口付近に約36°を測る急斜面があり、焼成部の緩斜面へと続く構造になっているものを見いだすことができる[2]。その他の窯は、床面の傾斜が概ね20°未満であり、焚口が残存していたものは33号窯のみであることから、急斜面は燃焼部と焼成部との境に設けられた可能性が考えられる。小名田窯跡では、焚口そのものの部分は残存していなかったが、灰原との位置関係から、残存していた窯体部分が焚口に極めて近接した部分に相当することが明らかである。以上のことから、小名田窯跡の焚口付近にみられる階段状の構造は、燃焼部と焼成部における境界の意味合いをもつものと判断される。

また、もうひとつの特徴として、窯体の幅の狭小さをあげることができる。上述の魚住古窯跡群の調査例では、床面の最大幅は約1.3～1.7mを測るが、小名田窯跡の残存部分では、最大に見積もってみても1.2mを超えるとは考えられない。小名田窯跡に片口鉢のような大型器種が少ないのはこのためであるかもしれず、小名田窯跡が、神出・魚住古窯跡群での椀生産が減少する時期に、ごく限定された地域に供給することを目的としていた窯であると想定すると、大型の窯体をもつものでなくとも十分に製品を生産する機能を果たせたものと考えられる。

小名田窯跡出土土器の編年上の位置付け

小名田窯跡より出土した須恵器は、「東播系中世須恵器」と呼称される[3]神戸市西区の神出古窯跡群あるいは、明石市の魚住古窯跡群出土の土器類と形態的に類似するものである。出土した土器のうち、その大半を占める椀および、小名田窯跡ではわずか7個体が出土したに過ぎないが各地で出土する東播系須恵器の大部分を占める片口鉢を、小名田窯跡の基礎資料として取り扱い、これより記述をすすめていきたい。但し、小名田窯跡出土の片口鉢は、完全な形状をとどめるものや、片口の形態が認められるものはなく、他の遺跡から出土した片口鉢との比較あるいは、神出および、魚住古窯跡群出土土器の器種構成などからその可能性が高いと考え、分類したものである。

出土した椀と片口鉢の特徴は、すでに述べている（第3章　第2節　遺物）が、改めてそれらを以下に記し、小名田窯跡基礎資料の編年上の位置付けを東播系中世須恵器編年[4]を参考にして行っていきたい。まず、小名田窯跡出土の椀の特徴として、

Ⅰ．底部と体部の境界が不鮮明なものが大部分を占め、高台もごく少数の個体に認められるのみで、見込み部を一段凹ませる例はほとんどみられない。

Ⅱ．底部は大型化する。

Ⅲ．体部は、総じて膨らみに乏しい。

以上3点があげられる。これらの特徴をもつ椀は、神出第Ⅱ期第2段階（12世紀末葉～13世紀前半）に相当するものである。しかし、小名田窯跡では、出土個体数は少量ではあるが、明瞭な高台をつくり出す椀や、平高台が消えて平底化した椀さらには、体部が直線化し底径が小さい椀なども出土している。これらは、それぞれ神出第Ⅰ期第1段階（11世紀後半）、第Ⅰ期第2段階（11世紀末葉～12世紀前半）、第Ⅱ期第1段階（12世紀中葉～後半）の特徴といえるものである。

次に、片口鉢の特徴として、

Ⅰ．口縁部はほとんど拡張されず、まるくおさめるか、平坦な面をもつように仕上げられる。

Ⅱ．体部は、口縁部がまるくおさめられたものは膨らみをもち、平坦な面をもつ口縁の体部は直線的あるいは、外反気味に立ち上がる。

などがあげられる。これらの特徴をもつ片口鉢は、神出第Ⅰ期（11世紀後半～12世紀前半）あるいは、それ以前に見られるものである。

以上のことから、小名田窯跡の基礎資料とした椀は、神出第Ⅰ期第1段階から第Ⅱ期第2段階（11世紀後半～13世紀前半）の時期と考えられ、片口鉢については、神出第Ⅰ期および、それ以前の時期（11世紀中葉～11世紀後半）と考えられる。しかし、小名田窯跡では、神出第Ⅱ期第2段階に位置付けられる形態の椀が出土土器量の約90パーセントを占めており、その他の時期に位置付けられる椀あるいは、片口鉢などの出土量はわずかである。一方、編年資料とした神出および、魚住古窯跡群の第Ⅱ期第2段階では、椀の生産は著しく減少し片口鉢の生産が急増する、小名田窯跡とは逆の生産傾向を示している。また、神戸市北区八多町下小名田に位置する小名田窯跡は、旧国名では摂津国有馬郡に所在し、旧播磨国明石郡に所在する神出古窯跡群や魚住古窯跡群とは直線距離にして約20km以上離れた地域で操業されている。そこで、これまでおこなってきた東播系中世須恵器編年を資料とする小名田窯跡出土土器の編年上の位置付けに加え、ここで改めて小名田窯跡における独自の編年を灰原土層断面図（図版4．5）の分層した土層より出土した土器を抽出し、堆積状況から出土量の多い椀の形態が新旧関係としてとらえうるか否かの検討を試みたい。

灰原土層断面図（図版5）の⑤および、②、④を観察すると、窯体前面に第1次的な堆積層が形成され、続いてそれらの西側により広い範囲に及ぶ第2次的な堆積層が形成されていることが理解できる。

これにより、⑤および、②、④におけるｒ・Ｉ・Ｄ・１層など（第１次的な堆積層）から出土した土器群を小名田第１段階、Ｅ・2-4層など（第２次的な堆積層）から出土した土器群を小名田第２段階とし、それらの形態上の相違を比較した。しかし、実際に抽出しえた土器は資料的に少数であり、編年上の特徴的な形態をもつものが含まれていないことなどから、椀の形態分類および、編年はほとんど行えなかった。その中で同一器種として比較しえた、小名田第１段階のＣ層出土椀（353他）と、小名田第２段階のＥ層出土の椀（326）では、形態的な違いは特に指摘することはできない。

これらの結果により、小名田窯跡基礎資料とした椀の編年上の位置付けは、上記に示した時期幅よりさらに限定された神出第Ⅱ期第２段階（12世紀末葉～13世紀前半）に相当するものと考えられる。その理由として、この時期の特徴をもつ椀が出土土器の大部分を占めていることに加え、灰原における下層（第１次的な堆積層）出土の椀と上層（第２次的な堆積層）出土の椀とのあいだに形態的な違いが認められないことなどが挙げられる。このため、出土個体数の少ない神出第Ⅱ期第２段階以前に位置付けられる椀や、神出第Ⅰ期および、それ以前の時期が考えられる片口鉢についても、小名田窯跡が東播磨地域から離れた地点で操業された、局地的な需要に対応するための窯ととらえることにより、少数の古い形態をとどめた椀や片口鉢が製作されたと考えるものである。

小名田窯跡周辺の遺跡より出土した土器類

続いて、神出および、魚住古窯跡群の所在する東播磨地域との比較から、小名田窯跡周辺の遺跡から出土した土器の特徴および、年代的な位置付けあるいは、それらと小名田窯跡との関係などを考えていきたい。

まず、小名田窯跡に隣接する清水廻り遺跡では、明らかに小名田窯跡において焼成されたと考えられる椀などが出土している。これらのうちには、窯体内において溶着し27枚が重なりあった状態の椀や、墨書土器などがあり、小名田窯跡の工房跡が想定される遺跡である。その概要は、別項で記述するためここでは触れずにおく。

次に、小名田窯跡出土土器と形態的に類似する土器が出土した窯跡としては、周辺では三田市の見比窯跡が確認されている。見比窯跡は、三田市の東部の黒川の支流である栗田川の上流右岸に所在し、小名田窯跡とは直線距離にして約10㎞離れている。窯跡は、以前窯体が露出していたといわれるが、現状では埋没しており、灰原が広い範囲にわたって確認されるようである。発掘調査は行われていないが、灰原の大きさより複数基存在するものと考えられ、採集された須恵器の報告が行われている[5]。報告によれば、見比窯跡より採集された椀は、底部と体部の境界が不鮮明なものや、底部が小型化したものであり、この他に、小皿、鉢がみられる。椀の形態上の特徴や、出土土器の器種構成などは小名田窯跡に極めて類似するものであり、ほぼ同時期の神出第Ⅱ期第２段階（12世紀末葉～13世紀前半）に操業されていたと考えられる窯跡である。

またこの他の遺跡では、三田市末東に所在する蛭田中世墓および、井ノ方遺跡より小名田窯跡出土土器と類似する土器群が確認されている[6]。蛭田中世墓は、近接する地点より近世墓が発見され、周辺より青磁皿１点と須恵器椀８点が出土したため、地形および、立地状況から中世墓の存在が考えられたものである。出土した椀の特徴としては、底部を若干突出させて平高台状に成形するものと、底部の突出がみられず平底のものであり、12世紀後半から13世紀前半の時期が考えられている[7]。井ノ方遺跡では、平安時代から室町時代の集落跡と、平安時代末から鎌倉時代初頭に操業していたと考えられる須恵器の窯跡（以下、井ノ方窯跡）が発見されている。井ノ方窯跡では窯体内から椀、片口鉢、小皿が出土しており、そのうちの大半を占める椀の特徴は、全体的に高台をもたない回転糸切りの平底をなすものであ

る。また、井ノ方遺跡より出土した土器類のうち、土坑15より出土した椀は井ノ方窯跡出土の椀に比べて底径が大きく、体部の立ち上がりがやや急で、器壁が若干厚く、全体にどっしりした印象をうけるものであり、13世紀前半の年代が与えられている[8]。この土坑15は、井ノ方窯跡の床面を掘り込んでおり、明らかに窯放棄後の遺構であり、小名田窯跡の操業年代に近い時期の遺構と考えられる。

以上が周辺の遺跡から出土した小名田窯跡出土土器と類似する土器群である。近年、小名田窯跡が立地する八多川流域あるいは、有野川、有馬川、長尾川流域において、数多くの遺跡の発掘調査が行われている[9]。しかし、小名田窯跡から供給されたと考えられる椀を中心とした土器群の出土は、隣接する清水廻り遺跡で確認されているが、その他の遺跡では確認されていない状況である。

清水廻り遺跡との関連について

清水廻り遺跡は、小名田窯跡の南東に位置し（図版４）、小名田窯跡が立地する丘陵と同一の支尾根の先端に立地している。両遺跡の距離はわずか数十mしか離れていない。清水廻り遺跡の整理作業は、実施されていないため詳細は不明であるが、出土遺物を概観したところでは、小名田窯跡と大差のない時期に属するものである。

小名田窯跡に先行して調査が行われた清水廻り遺跡（図版26）では、中世の掘建柱建物跡数棟とともに、土坑、溝などが検出されている。なかでも遺跡の西端で検出された溝（図版26　以下、土坑１）からは、27枚の溶着した須恵器椀が出土しており、清水廻り遺跡と小名田窯跡との関連を示す根拠となっている。この土坑１は、南北（丘陵と同一方向）に主軸をもち、長さ約6.0m、幅約1.6m、深さ約0.2mを測る。溝内には多数の礫が投入されており、溶着した須恵器椀は溝底に密着して埋没していた。須恵器椀は、いずれも小名田窯跡で出土した椀と同様の形態、胎土、焼成であり、小名田窯跡で生産されたことは明らかである。また、この土坑１の堆積土からは、他にも須恵器椀の破片が出土している。この他、土坑１に隣接して、一端に溝をともなう、長さ約6.0m、幅約1.2mを測る細長い土坑が検出されている。土坑からは、幅約0.6mを測る溝が延びており、この溝と土坑の間には、杭が打設されていた痕跡が認められている。このため、土坑は谷水あるいは、湧水を常に一定量溜める機能を持っていた可能性が考慮される。土坑から延びる溝は、池状の低地部に至るが、これより先は調査区外にあたるため、調査は行えなかった。

掘建柱建物跡は、水溜め状の土坑の北側および、東側に配置されている（正確な規模の復元は行えなかったが、柱穴の配置から建物の位置は推定可能である）。また、調査区東端の建物跡が想定される地点からは、石組をもつやはり水溜め状の土坑が検出されている。

この他、清水廻り遺跡の調査区域内からは、ロクロピットのような工房を直接示すような遺構は検出されなかった。しかし、小名田窯跡との位置関係が極めて近接し、小名田窯跡で生産された須恵器が出土していることや、須恵器工房に必要な水を貯蓄する機能をもつ土坑が検出されていることなどから、清水廻り遺跡が小名田窯跡にともなう工房跡である可能性は高いと考えられる。今後、清水廻り遺跡の整理作業を進めるにあたり、こうした視座から検討を行っていきたい。

以上のことから、小名田窯跡の調査を通じて、以下の項目が判明すると同時に、今後の問題点として提起されるものである。

1．小名田窯跡の操業年代は、神出第Ⅱ期第２段階に相当する12世紀末葉から13世紀前半に位置付けられる。

2．小名田窯跡は、同時期に操業された神出および、魚住古窯跡群における東播磨地域の生産体制で

ある、「椀の生産が著しく減少し片口鉢の生産が急増する」状況とは逆の、椀が約90パーセントを占める生産体制である。

3．小名田窯跡における単一的な形態の椀の出土量の多さあるいは、粗雑なつくりなどからは、一地域の需要に応じた局地的な生産を行った窯跡と考えられる。

4．小名田窯跡出土土器の大半を占める椀とは明らかに胎土および、焼成が違う、精製品として製作されたと考えられる高台付椀や、神出・魚住古窯跡群でその確認例がない高台付片口鉢などが数点ではあるが出土している。

5．3において、小名田窯跡を局地的な需要に対応する窯跡と考えたが、周辺の遺跡より小名田窯産と思われる土器類は出土しておらず、その供給先の遺跡が未だに確認されていない現状である。

6．隣接する清水廻り遺跡は、その立地状況、出土遺物、掘立柱建物跡などから、小名田窯跡の工房跡であると考えられ、中世の窯業集落の状況を復元しうる遺跡である。

4．5については、今後の調査によって新たな資料が得られるものと思われるが、周辺の遺跡調査において、小名田窯跡出土土器が確認され、生産遺跡と消費地との関係あるいは、小名田窯跡の性格について理解されることが望まれる。

註

1）清水廻り遺跡は、平成5年度（1994年5月～7月）に兵庫県教育委員会において発掘調査が行われており、平成9年度には、整理作業および、調査報告書の刊行が予定されている。

2）大村敬通・水口富夫『魚住古窯跡群』　1983　兵庫県教育委員会

3）森田　稔「東播系中世須恵器の生産と流通」『中近世土器の基礎研究』Ⅲ　1987　日本中世土器研究会

4）註3に同じ

5）高島信之・畠中　剛「見比窯址採集の須恵器について」『三田考古』第13号　1984　三田市教育委員会

6）『青野ダム建設に伴う発掘調査報告書（2）』　1988　兵庫県教育委員会

7）註6所収　岡田章一「蛭田遺跡」

8）註6所収　久保弘幸・中川　渉「井ノ方遺跡」および、岸本一宏「井ノ方窯跡」

9）八多川流域では、山陽自動車道建設事業に伴い、小名田窯跡の発掘調査の他、八多中遺跡、清水廻り遺跡の調査が行われており、さらに都市計画道路北神中央線建設に伴う下小名田遺跡の調査や、六甲北有料道路建設に伴う上小名田遺跡の調査なども行われている。また、有野川流域では公園都市線車両留置施設設置事業に伴う二郎宮ノ前遺跡の調査や、道場八多地区特定土地区画整理事業に伴う日下部遺跡の調査などが行われている。

その他の参考文献

「神出古窯跡群」『昭和57年度神戸市埋蔵文化財年報』　1985　神戸市教育委員会

『神出　神出古窯跡群に関連する遺跡群の調査』　1985　妙見山麓遺跡調査会

「神出古窯跡群」『昭和58年度神戸市埋蔵文化財年報』　1986　神戸市教育委員会

『神出　1986　神出古窯跡群に関連する遺跡群の調査』　1986　妙見山麓遺跡調査会

「神出古窯跡群」『昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報』　1987　神戸市教育委員会

『神出　Ⅲ　神出古窯跡群に関連する遺跡群の調査』　1987　妙見山麓遺跡調査会

荻野繁春「西日本における中世須恵器系陶器の生産資料と編年」『福井県考古学会誌』3　1985　福井県考古学会

丹治康明「東播系須恵器について」『中近世土器の基礎研究』　1985　日本中世土器研究会

森田　稔「東播系中世須恵器生産の成立と展開－神出古窯址群を中心に－」『神戸市立博物館研究紀要』第3号　1986　神戸市立博物館

吉岡康暢「東播系窯と珠洲系窯」『考古学ジャーナル』No.280　1987　ニュー・サイエンス社

第１－１表　　小名田窯跡　出土土器観察表

No.	品　種	法　量（cm）			特徴（形態／技法・調整）	備　　考
		口　径	器　高	底　径		
1	椀	(15.4)	4.3	(5.6)	底部は粗雑な糸切り。底部と体部の境界は不鮮明。体部はゆるやかな膨みをもって立ち上がる。口縁端部はまるくおさめる。	灰原N層出土
2	椀	(15.6)	3.8	(4.5)		灰原N層出土
3	椀	(16.1)	3.9	(4.5)		灰原N層出土
4	椀	(15.8)	4.6	(5.4)		灰原N層出土
5	椀	(15.1)	4.3	(5.6)		灰原N層出土
6	椀	(15.7)	(4.5)	(5.7)		
7	椀	(15.3)	5.0	6.0		
8	椀	(15.2)	4.8	(5.1)		灰原N層出土
9	椀	(16.8)	4.4	5.2		
10	椀	(14.4)	4.6	4.3		
11	椀	(16.2)	4.9	5.7		
12	椀	(16.0)	4.3	(5.1)		
13	椀	16.2	4.8	6.1		
14	椀	(15.1)	5.9	(5.6)		
15	椀	(15.5)	5.2	5.8		
16	椀	(15.6)	4.2	(5.6)		
17	椀	(15.2)	4.9	(6.4)		
18	椀	(15.0)	4.6	4.4		
19	椀	(15.8)	4.6	5.5		
20	椀	(15.9)	4.8	(6.2)		
21	椀	(15.7)	4.4	(6.1)		
22	椀	(16.6)	4.6	(6.4)		
23	椀	(16.2)	4.1	(5.4)		
24	椀	(15.4)	4.6	(4.5)		
25	椀	(14.9)	4.7	(5.0)		
26	椀	(15.6)	4.2	(5.9)		
27	椀	(17.2)	4.3	6.0		
28	椀	(15.7)	4.7	(6.0)		
29	椀	(16.7)	4.0	(5.6)		
30	椀	(15.7)	4.6	(6.5)		
31	椀	(16.5)	4.5	(5.2)		
32	椀	(16.2)	3.5	(5.6)		
33	椀	(15.2)	4.6	(5.9)		
34	椀	(16.7)	4.6	5.0		
35	椀	(15.7)	4.0	6.2		
36	椀	(14.6)	4.3	(4.2)		
37	椀	(16.6)	4.1	(8.1)		
38	椀	(16.4)	5.0	5.5		
39	椀	(15.7)	4.1	6.4		
40	椀	(15.9)	4.9	(4.8)		
41	椀	(14.7)	(4.5)	5.2		
42	椀	(15.0)	4.6	(5.0)		
43	椀	(16.6)	4.2	(6.0)		
44	椀	(15.2)	4.0	(6.8)		
45	椀	(16.2)	4.1	(6.6)		
46	椀	(15.3)	(4.7)	(7.4)		
47	椀	(17.0)	5.5	(6.4)		
48	椀	(17.6)	(4.0)	(6.8)		
49	椀	(15.2)	4.9	6.3		
50	椀	(15.8)	4.7	(5.4)		

第１－２表　　小名田窯跡　出土土器観察表

No.	品　種	法　量（cm）			特徴（形態／技法・調整）	備　　考
		口　径	器　高	底　径		
51	椀	(16.0)	(4.6)	5.2	底部は粗雑な糸切り。底部と体部の境界は不鮮明。体部はゆるやかな膨みをもって立ち上がる。口縁端部はまるくおさめる。	灰原Ⅰ層出土
52	椀	(16.2)	4.2	6.6		
53	椀	(16.0)	4.5	(5.9)		
54	椀	(15.3)	4.9	(5.8)		
55	椀	(15.6)	(4.2)	(4.3)		
56	椀	15.6	4.6	5.4		
57	椀	15.3	4.9	4.8		
58	椀	(15.6)	3.8	(5.3)		
59	椀	(14.8)	4.5	(5.4)		
60	椀	(15.7)	4.0	5.0		
61	椀	(17.2)	3.8	(6.4)		
62	椀	(16.0)	3.8	(5.8)		灰原Ⅰ層出土
63	椀	(16.4)	4.4	5.6		
64	椀	(16.7)	5.1	(8.0)		
65	椀	(15.8)	4.1	6.6		
66	椀	(14.5)	(5.3)	(5.0)		
67	椀	(15.4)	5.2	(5.6)		
68	椀	(15.0)	4.5	(5.8)		
69	椀	(16.2)	4.0	(5.4)		
70	椀	(15.8)	(4.6)	(4.6)		
71	椀	(16.0)	(4.0)	(4.3)		
72	椀	(14.9)	3.7	4.6		
73	椀	(15.4)	4.2	(6.2)		
74	椀	(16.0)	4.0	(4.4)		
75	椀	(16.2)	(4.0)	(6.7)		
76	椀	(15.8)	4.3	(5.6)		
77	椀	(15.2)	4.3	(4.2)		
78	椀	(17.6)	4.3	3.9		
79	椀	(16.1)	4.3	(5.4)		
80	椀	(15.5)	4.5	(5.9)		
81	椀	(16.6)	4.2	6.6		
82	椀	(16.9)	4.4	(4.6)		
83	椀	16.2	4.7	5.2		
84	椀	(16.4)	4.4	6.0		
85	椀	(16.4)	4.6	(6.0)		
86	椀	(16.7)	4.7	(5.8)		
87	椀	?	?	5.6		
88	椀	(15.6)	4.6	(5.1)		
89	椀	(15.9)	5.0	(6.6)		
90	椀	(15.5)	4.5	(6.8)		
91	椀	(15.2)	5.4	6.2		
92	椀	(16.0)	4.3	(7.3)		
93	椀	(15.6)	(4.4)	(6.5)		
94	椀	(16.1)	4.3	(4.5)		
95	椀	(17.8)	(3.9)	(8.9)		
96	椀	(15.5)	4.5	(5.6)		
97	椀	(15.0)	(4.4)	(6.5)		
98	椀	(15.0)	4.8	(6.1)		
99	椀	(15.6)	4.5	7.9		
100	椀	(17.0)	4.7	(6.2)		

第１－３表　　小名田窯跡　出土土器観察表

No.	品　種	法　量（cm）			特徴（形態／技法・調整）	備　　考
		口　径	器　高	底　径		
101	椀	(16.6)	4.5	6.9	底部は粗雑な糸切り。底部と体部の境界は不鮮明。体部はゆるやかな膨みをもって立ち上がる。口縁端部はまるくおさめる。	
102	椀	(16.2)	4.8	(7.2)		
103	椀	(15.9)	3.5	7.8		
104	椀	(15.8)	4.5	6.4		
105	椀	(16.0)	4.2	6.0		
106	椀	(15.5)	(5.0)	(6.0)		
107	椀	(16.0)	4.5	(5.6)		
108	椀	(16.4)	3.5	(6.6)		灰原Ｉ層出土
109	椀	(16.5)	4.5	(6.1)		灰原Ｉ層出土
110	椀	(14.9)	4.0	(5.0)		
111	椀	(16.5)	(4.5)	(8.1)		
112	椀	(16.6)	4.7	(5.4)		
113	椀	(15.9)	4.5	(7.4)		
114	椀	(14.2)	4.1	(5.8)		
115	椀	(16.2)	4.6	(6.3)		
116	椀	(16.2)	4.8	(6.4)		
117	椀	(16.7)	(4.8)	(7.0)		灰原Ｃ層出土
118	椀	(16.3)	(4.8)	(8.0)		
119	椀	(17.6)	3.8	(9.0)		
120	椀	(16.6)	4.4	(6.7)		
121	椀	(16.8)	3.6	(6.4)		
122	椀	(15.5)	4.2	(5.3)		
123	椀	(15.0)	4.1	(6.4)		
124	椀	(16.0)	4.1	(7.0)		
125	椀	(17.4)	(5.0)	(6.8)		灰原Ｃ層出土
126	椀	(15.9)	4.5	(6.1)		
127	椀	(16.5)	4.7	5.6		
128	椀	(15.4)	4.4	5.8		
129	椀	(15.4)	5.0	5.3		
130	椀	(15.4)	4.2	5.0		
131	椀	(16.6)	4.5	6.0		
132	椀	(15.9)	4.3	(6.2)		
133	椀	(15.8)	4.6	(5.5)		
134	椀	(15.8)	4.0	(6.7)		
135	椀	(15.5)	4.3	(7.6)		
136	椀	(15.8)	5.3	5.5		
137	椀	(14.7)	4.5	(6.3)		
138	椀	(15.0)	5.0	(7.5)		
139	椀	(16.7)	4.8	(7.1)		
140	椀	(16.6)	4.5	(6.3)		
141	椀	(16.4)	4.3	(7.6)		
142	椀	(16.2)	5.1	(6.8)		
143	椀	(15.7)	4.7	(6.0)		
144	椀	(15.8)	4.3	(6.2)		
145	椀	(15.9)	4.5	6.6		
146	椀	(15.5)	4.4	(6.6)		
147	椀	(15.9)	5.4	5.3		
148	椀	(17.1)	3.9	6.3		
149	椀	(15.4)	4.7	6.4		
150	椀	(15.5)	4.5	6.0		

第１－４表　　小名田窯跡　出土土器観察表

No.	品　種	法　量（cm）			特徴（形態／技法・調整）	備　　考
		口　径	器　高	底　径		
151	椀	(16.8)	5.1	7.1	底部は粗雑な糸切り。底部と体部の境界は不鮮明。体部はゆるやかな膨みをもって立ち上がる。口縁端部はまるくおさめる。	
152	椀	(15.6)	5.2	(6.0)		
153	椀	15.7	5.2	4.8		
154	椀	(15.4)	4.5	(4.8)		
155	椀	(15.0)	4.2	6.0		
156	椀	(16.5)	4.5	(6.2)		
157	椀	16.9	4.3	6.2		
158	椀	(15.7)	4.8	(4.9)		
159	椀	(15.8)	4.3	(4.4)		
160	椀	(16.1)	4.5	6.7		
161	椀	(15.8)	(4.6)	(6.3)		
162	椀	(16.8)	4.7	5.9		
163	椀	(16.5)	(3.6)	(6.2)		
164	椀	(16.0)	4.6	(6.5)		
165	椀	(16.6)	4.5	(6.9)		
166	椀	(15.6)	4.3	(5.5)		
167	椀	(16.6)	4.2	(8.1)		
168	椀	(16.8)	5.7	(7.4)		
169	椀	(16.2)	4.4	(6.4)		
170	椀	(16.6)	4.6	(6.8)		
171	椀	(15.3)	4.7	7.0		
172	椀	(16.0)	4.6	(5.0)		
173	椀	(17.1)	5.1	6.2		
174	椀	(16.0)	(4.8)	(4.6)		
175	椀	(16.4)	4.3	5.8		
176	椀	(17.5)	4.7	(6.8)		
177	椀	(15.8)	4.5	(5.2)		
178	椀	(15.8)	5.3	(7.0)		灰原Ⅰ層出土
179	椀	(15.3)	4.6	(5.6)		灰原Ⅰ層出土
180	椀	(15.0)	4.6	(5.7)		
181	椀	(14.8)	4.5	(6.5)		
182	椀	(17.5)	4.1	(6.9)		
183	椀	(15.4)	4.7	(6.6)		
184	椀	(16.8)	4.7	(8.6)		
185	椀	15.4	(4.5)	5.3		
186	椀	(16.2)	4.0	5.8		
187	椀	16.0	4.2	5.0		
188	椀	(16.5)	4.6	(6.9)		
189	椀	(17.4)	4.9	6.8		
190	椀	(15.9)	4.1	5.2		灰原Ⅰ層出土
191	椀	(16.7)	4.5	6.8		
192	椀	(16.7)	4.1	(6.7)		
193	椀	(16.6)	4.4	(7.6)		
194	椀	(17.0)	4.1	(5.9)		
195	椀	15.2	4.2	6.2		
196	椀	(15.5)	4.4	(7.0)		
197	椀	(15.0)	4.9	(6.8)		
198	椀	(16.0)	(4.6)	(6.6)		
199	椀	(15.8)	4.5	(6.0)		
200	椀	(15.5)	(4.2)	(7.4)		

第１－５表　　小名田窯跡　出土土器観察表

No.	品　種	法　量（cm）			特徴（形態／技法・調整）	備　　考
		口　径	器　高	底　径		
201	椀	(16.0)	4.0	(8.1)	底部は粗雑な糸切り。底部と体部の境界は不鮮明。体部はゆるやかな膨みをもって立ち上がる。口縁端部はまるくおさめる。	
202	椀	16.2	4.4	6.7		
203	椀	(16.3)	4.5	6.0		
204	椀	(15.9)	4.2	5.3		
205	椀	(15.6)	4.0	(6.3)		
206	椀	(15.8)	5.1	(6.5)		
207	椀	(16.7)	4.4	(6.6)		
208	椀	(14.4)	4.5	4.1		
209	椀	(16.1)	4.5	5.2		
210	椀	(15.6)	4.5	(5.8)		
211	椀	(16.0)	5.1	(8.1)		
212	椀	(15.4)	5.1	(6.2)		
213	椀	(16.1)	4.2	(5.4)		
214	椀	(15.4)	4.6	(6.0)		
215	椀	(16.7)	4.3	(5.7)		
216	椀	(16.4)	4.1	(5.5)		
217	椀	16.7	4.7	6.3)		
218	椀	(16.1)	5.0	7.6		
219	椀	(16.0)	5.1	6.8		
220	椀	(15.9)	3.8	5.0		
221	椀	(15.7)	4.3	(6.4)		
222	椀	(15.6)	4.4	6.2		
223	椀	(15.8)	4.6	6.5		
224	椀	(15.8)	4.1	6.0		
225	椀	(15.6)	4.5	(5.2)		
226	椀	(15.8)	4.1	(6.8)		
227	椀	(15.6)	4.5	6.1		
228	椀	(15.6)	5.1	6.7		
229	椀	(16.2)	4.6	(6.6)		
230	椀	(16.0)	4.2	6.2		
231	椀	(16.0)	4.9	6.6		
232	椀	(15.8)	4.6	7.2		
233	椀	16.0	3.9	7.3		
234	椀	(16.5)	4.3	7.9		
235	椀	(16.0)	3.6	(5.9)		
236	椀	(15.8)	4.3	(7.3)		
237	椀	(15.0)	4.6	4.8		
238	椀	(14.0)	5.0	5.7		
239	椀	(15.6)	(4.9)	(5.6)		
240	椀	15.1	5.4	6.3		
241	椀	(15.7)	4.3	(6.2)		
242	椀	(15.1)	5.0	6.2		
243	椀	(15.5)	5.0	(5.6)		
244	椀	(15.4)	5.6	(6.2)		
245	椀	(16.1)	5.1	(7.0)		
246	椀	(15.6)	4.3	6.1		
247	椀	(16.2)	4.4	(5.4)		
248	椀	(15.3)	4.8	6.3		
249	椀	(15.7)	4.4	(6.4)		
250	椀	(16.3)	4.5	6.3		

第１－６表　　小名田窯跡　出土土器観察表

No.	品　種	法　量（cm）			特徴（形態／技法・調整）	備　　考
		口　径	器　高	底　径		
251	椀	(16.2)	4.5	(5.4)	底部は粗雑な糸切り。底部と体部の境界は不鮮明。体部はゆるやかな膨みをもって立ち上がる。口縁端部はまるくおさめる。	
252	椀	(17.6)	(4.3)	(7.5)		
253	椀	(16.4)	4.5	5.7		
254	椀	17.3	4.8	6.3		
255	椀	(16.6)	4.7	6.3		
256	椀	(16.0)	4.6	5.8		
257	椀	15.8	4.8	6.9		灰原Ｃ層出土
258	椀	(15.9)	5.4	6.2		灰原Ｃ層出土
259	椀	(16.2)	4.5	(6.4)		
260	椀	(15.3)	4.6	(6.0)		
261	椀	(16.7)	4.3	(6.0)		
262	椀	(16.6)	5.2	(8.4)		
263	椀	16.0	5.0	5.5		
264	椀	(15.4)	4.7	5.4		
265	椀	(16.3)	4.7	6.4		
266	椀	(16.1)	4.6	7.5		
267	椀	16.1	5.0	6.0		
268	椀	(16.4)	4.2	(7.0)		
269	椀	(16.1)	5.2	5.8		
270	椀	(16.4)	4.9	(6.4)		
271	椀	(15.6)	4.2	(6.0)		
272	椀	(16.0)	4.9	6.8		
273	椀	(16.3)	4.5	(7.2)		
274	椀	(15.3)	5.5	7.3		
275	椀	(17.4)	5.0	(6,5)		
276	椀	(15.3)	4.0	(6.5)		
277	椀	(16.1)	4.8	(6.4)		
278	椀	(16.6)	4.5	6.6		
279	椀	(16.0)	4.5	(5.0)		
280	椀	(16.0)	3.9	(6.1)		
281	椀	(16.2)	4.7	(7.1)		
282	椀	(15.1)	4.5	(6.2)		
283	椀	(15.9)	5.3	(6.6)		
284	椀	(16.6)	4.9	6.5		
285	椀	(16.2)	4.6	(6.3)		
286	椀	(15.4)	4.5	(7.0)		
287	椀	(16.5)	4.4	5.8		
288	椀	(16.6)	5.0	6.2		
289	椀	(16.8)	5.2	(6.4)		
290	椀	15.6	4.5	6.4		
291	椀	(16.1)	4.1	7.0		
292	椀	16.3	4.5	5.9		
293	椀	(15.9)	4.4	5.4		
294	椀	15.6	4.8	5.8		
295	椀	(16.0)	5.0	(6.2)		
296	椀	(15.8)	4.8	6.9		
297	椀	16.0	4.2	6.0		
298	椀	(15.6)	4.6	(5.6)		
299	椀	(16.1)	4.3	(6.1)		
300	椀	(15.9)	4.0	7.9		

第１－７表　　小名田窯跡　出土土器観察表

No.	品　種	法　量（cm）			特徴（形態／技法・調整）	備　　考
		口　径	器　高	底　径		
301	椀	(15.6)	4.1	5.9	底部は粗雑な糸切り。底部と体部の境界は不鮮明。体部はゆるやかな膨みをもって立ち上がる。口縁端部はまるくおさめる。	
302	椀	(17.2)	3.8	5.0		
303	椀	(15.9)	4.6	5.4		
304	椀	(16.6)	4.8	6.5		
305	椀	(15.6)	4.9	6.2		
306	椀	16.2	4.6	6.5		
307	椀	16.0	4.9	6.7		
308	椀	15.2	4.7	6.0		
309	椀	(15.8)	4.7	6.1		
310	椀	(15.2)	4.6	5.6		灰原Ｄ層出土
311	椀	16.3	4.9	6.4		
312	椀	(15.5)	4.8	(5.2)		
313	椀	(16.6)	4.3	(6.8)		
314	椀	(15.6)	5.0	6.8		
315	椀	(16.0)	5.3	5.5		
316	椀	(15.7)	4.4	6.0		
317	椀	(16.2)	4.8	(5.0)		
318	椀	(15.3)	5.1	5.7		灰原Ｉ層出土
319	椀	16.2	4.0	5.9		
320	椀	(15.4)	4.5	6.4		灰原ｎ層出土
321	椀	15.2	4.7	6.2		
322	椀	15.8	4.5	6.7		
323	椀	(15.8)	(4.7)	(5.6)		
324	椀	(17.5)	4.6	6.8		灰原４－８層出土
325	椀	(16.8)	(4.2)	(5.4)		
326	椀	(16.0)	4.6	7.0		灰原Ｅ層出土
327	椀	(15.0)	5.4	5.6		
328	椀	16.4	5.0	7.0		
329	椀	(15.5)	5.9	6.4		
330	椀	15.4	4.7	6.2		
331	椀	(15.5)	4.6	(7.0)		灰原Ｄ・Ｆ層出土
332	椀	16.3	5.0	6.6		
333	椀	(16.0)	4.9	6.0		灰原Ｄ・Ｆ層出土
334	椀	(16.0)	5.0	5.8		灰原Ｄ・Ｆ層出土
335	椀	16.0	4.4	(6.4)		灰原Ｄ・Ｆ層出土
336	椀	15.9	4.2	5.8		
337	椀	(15.9)	5.2	6.1		灰原Ｃ層出土
338	椀	(16.2)	4.7	6.2		
339	椀	(15.9)	4.3	6.4		
340	椀	(17.1)	4.2	7.2		
341	椀	(16.1)	4.4	6.1		
342	椀	(16.0)	4.6	(5.8)		
343	椀	16.5	4.3	6.6		
344	椀	16.3	4.5	6.0		
345	椀	15.9	4.4	5.9		
346	椀	16.5	4.9	6.5		灰原５－８層出土
347	椀	16.5	4.7	6.8		
348	椀	16.4	4.5	6.5		
349	椀	15.8	4.7	6.5		
350	椀	(16.1)	4.0	6.8		

第１－８表　　小名田窯跡　出土土器観察表

No.	品　種	法　量（cm）			特徴（形態／技法・調整）	備　　考
		口　径	器　高	底　径		
351	椀	15.4	4.0	5.2	底部は粗雑な糸切り。底部と体部の境界は不鮮明。体部はゆるやかな膨みをもって立ち上がる。口縁端部はまるくおさめる。	
352	椀	16.3	4.9	7.6		
353	椀	(15.7)	4.2	(4.8)		灰原Ｃ層出土
354	椀	16.5	4.5	6.2		灰原５－４層出土
355	椀	16.7	4.5	6.0		
356	椀	(15.6)	5.1	6.2		
357	椀	(15.2)	5.1	(6.2)		
358	椀	(17.9)	4.6	(6.8)		
359	椀	(15.6)	3.4	4.2		
360	椀	(14.2)	3.3	(4.2)		
361	椀	(16.5)	4.4	5.7		
362	椀	(16.3)	5.1	7.0		
363	椀	(16.0)	4.5	(6.0)		灰原Ｉ層出土
364	椀	(16.5)	4.3	5.4		
365	椀	(17.4)	3.5	(6.5)		
366	椀	(16.6)	3.8	(5.8)		
367	椀	(16.8)	3.8	5.8		
368	椀	(16.5)	4.1	5.7		
369	椀	(15.8)	(4.9)	(6.7)		
370	椀	16.4	4.5	6.5		
371	椀	(16.2)	4.2	(6.3)		
372	椀	16.8	4.6	6.2		
373	高台椀	(14.7)	4.6	(7.0)	わずかに平高台をつくる。他の特徴は椀と同じ。	
374	高台椀	(16.2)	5.2	(7.4)		
375	高台椀	(15.1)	5.8	6.5		
376	高台椀	?	(4.2)	(7.3)		灰原Ｎ層出土
377	高台椀	?	(2.2)	(7.2)		
378	高台椀	?	(3.4)	(8.0)		
379	皿　?	(15.0)	4.0	(7.5)	椀の変形したものの可能性もあり。	
380	皿　?	(17.6)	3.8	(11.2)		

第２－１表　　小名田窯跡　出土土器観察表

No.	品　種	法　量（cm）			特徴（形態／技法・調整）	備　　考
		口　径	器　高	底　径		
381	小　皿	(7.6)	1.2	5.4	底部は粗雑な糸切り。	
382	小　皿	(7.7)	1.3	6.0		
383	小　皿	8.3	1.1	6.6		
384	小　皿	(7.8)	1.3	6.1		
385	小　皿	(7.7)	1.1	(6.0)		
386	小　皿	(7.3)	1.3	(5.4)		
387	小　皿	8.5	1.4	6.4		
388	小　皿	(8.2)	1.5	6.4		
389	小　皿	(7.3)	1.2	(5.6)		
390	小　皿	8.1	1.2	6.4		
391	小　皿	(8.1)	1.4	(6.1)		
392	小　皿	8.1	1.3	6.3		
393	小　皿	8.2	1.2	5.9		
394	小　皿	(6.1)	1.1	(6.4)		灰原２－４層出土
395	小　皿	(8.6)	1.3	(7.0)		
396	小　皿	8.4	1.5	6.0		
397	小　皿	(8.5)	(1.4)	(6.4)		
398	小　皿	(8.7)	1.5	(6.6)		
399	小　皿	(8.0)	1.3	(5.9)		
400	小　皿	(7.7)	1.3	(5.5)		
401	小　皿	(8.2)	1.0	(5.8)		
402	小　皿	7.3	0.9	4.2		
403	小　皿	8.2	1.1	6.2		
404	小　皿	(8.4)	1.2	6.7		
405	小　皿	(7.7)	(1.4)	(6.0)		
406	小　皿	(8.7)	(1.3)	(7.0)		
407	小　皿	(8.2)	1.4	(6.0)		灰原Ｉ層出土
408	小　皿	(8.1)	1.4	6.1		
409	小　皿	(7.8)	1.1	(5.1)		
410	小　皿	(8.0)	1.1	(6.6)		
411	小　皿	(8.4)	0.9	6.1		灰原ｊ・１層出土
412	小　皿	(8.8)	1.4	(6.0)		
413	小　皿	(8.8)	1.4	(7.0)		
414	小　皿	7.9	2.1	5.6		
415	小　皿	(8.4)	1.2	6.8		
416	小　皿	7.7	1.2	5.8		
417	小　皿	8.4	1.1	6.7		
418	小　皿	8.0	1.1	5.9		
419	小　皿	(7.4)	1.1	(5.8)		
420	小　皿	(8.2)	1.4	(6.2)		
421	小　皿	(8.0)	1.2	6.0		
422	小　皿	(7.8)	1.4	(5.6)		
423	小　皿	(7.8)	1.2	(5.6)		
424	小　皿	(8.9)	(1.5)	(5.9)		
425	小　皿	(8.1)	1.4	6.1		
426	小　皿	(9.0)	1.1	6.9		
427	小　皿	(8.7)	1.3	(6.6)		
428	小　皿	(7.8)	1.0	5.7		
429	小　皿	7.5	1.2	5.9		
430	小　皿	7.8	1.3	6.1		

第２－２表　　小名田窯跡　出土土器観察表

No.	品　種	法　量（cm）			特徴（形態／技法・調整）	備　　考
		口　径	器　高	底　径		
431	小　皿	(8.6)	1.1	6.2	底部は粗雑な糸切り。	
432	小　皿	(8.1)	1.2	(6.7)		
433	小　皿	(8.7)	1.1	6.0		
434	小　皿	8.1	1.3	6.0		
435	小　皿	(8.2)	(1.3)	(6.6)		
436	小　皿	7.9	1.2	5.9		
437	小　皿	(8.0)	1.3	(5.9)		
438	小　皿	(8.3)	1.2	5.6		
439	小　皿	8.3	1.2	6.1		
440	小　皿	(8.2)	2.1	6.2		
441	小　皿	(7.8)	1.5	(6.1)		
442	小　皿	8.0	1.0	6.7		
443	小　皿	(7.9)	1.1	(6.7)		
444	小　皿	8.2	1.1	6.6		
445	小　皿	8.4	1.3	6.5		
446	小　皿	8.1	1.1	6.4		
447	小　皿	(7.2)	1.3	(5.5)		
448	小　皿	(8.6)	1.4	6.5		
449	小　皿	(8.3)	1.1	(6.8)		
450	小　皿	7.8	(1.5)	(6.4)		
451	小　皿	(8.5)	(1.3)	(5.9)		
452	小　皿	(8.1)	1.4	(6.4)		
453	小　皿	7.9	1.3	6.4		
454	小　皿	(7.6)	1.2	5.9		
455	小　皿	8.0	1.7	5.9		
456	小　皿	(7.6)	1.2	(5.6)		
457	小　皿	(7.5)	1.7	(6.2)		
458	小　皿	(8.3)	1.5	6.7		
459	小　皿	(8.4)	1.4	6.2		
460	小　皿	8.6	1.4	5.9		
461	小　皿	(7.8)	0.9	(6.0)		
462	小　皿	(9.0)	1.3	5.8		
463	小　皿	(8.3)	1.1	(5.8)		
464	小　皿	8.0	1.5	6.2		
465	小　皿	(8.5)	0.9	6.5		
466	小　皿	8.3	1.2	6.5		
467	小　皿	(7.8)	1.2	(5.8)		
468	小　皿	(8.7)	1.2	6.6		
469	小　皿	(8.8)	1.2	6.2		
470	小　皿	8.3	1.2	6.2		
471	小　皿	7.7	1.0	5.7		
472	小　皿	(8.0)	1.3	(5.9)		
473	小　皿	(7.8)	1.4	(6.5)		
474	小　皿	(7.7)	1.5	(5.8)		
475	小　皿	7.6	1.1	5.0		
476	小　皿	(7.8)	1.3	(5.8)		
477	小　皿	8.5	1.4	6.5		
478	小　皿	(7.8)	1.2	4.9		
479	小　皿	7.9	1.2	5.7		
480	小　皿	(8.6)	1.4	(6.4)		

第２－３表　　小名田窯跡　出土土器観察表

No.	品　種	法　量（cm）			特徴（形態／技法・調整）	備　　考
		口　径	器　高	底　径		
481	小　皿	(7.9)	1.2	(5.8)	底部は粗雑な糸切り。	
482	小　皿	8.8	1.3	6.0		
483	小　皿	8.1	1.2	6.2		
484	小　皿	(8.6)	1.3	(6.4)		
485	小　皿	8.0	1.3	6.2		
486	小　皿	(7.4)	1.1	(5.9)		
487	小　皿	8.3	1.1	6.3		
488	小　皿	(8.6)	(1.3)	(6.6)		
489	小　皿	(8.4)	1.4	(5.3)		
490	小　皿	8.0	1.2	6.6		灰原Ｃ層出土
491	小　皿	(8.4)	1.0	(6.2)		
492	小　皿	(8.2)	1.3	(5.4)		
493	小　皿	(8.0)	1.3	5.5		
494	小　皿	8.2	1.3	6.6		
495	小　皿	8.6	1.2	6.2		
496	小　皿	8.2	1.2	6.1		
497	小　皿	7.9	0.8	4.9		
498	小　皿	(7.8)	1.2	(5.7)		
499	小　皿	(7.0)	1.2	(5.1)		灰原Ｃ層出土
500	小　皿	(8.1)	(1.1)	(6.6)		
501	小　皿	7.6	1.1	(6.2)		
502	小　皿	(8.3)	(0.9)	(6.3)		
503	小　皿	7.7	1.2	5.9		
504	小　皿	(8.6)	(1.2)	(6.2)		
505	小　皿	(7.9)	1.1	(5.0)		灰原Ｃ'層出土
506	小　皿	8.1	1.5	6.6		
507	小　皿	(7.6)	(1.2)	(5.9)		
508	小　皿	(8.2)	1.6	5.8		
509	小　皿	(7.9)	(1.1)	(6.2)		
510	小　皿	(8.6)	1.1	(6.0)		
511	小　皿	(7.8)	1.2	6.0		
512	小　皿	7.7	1.3	5.8		
513	小　皿	(7.9)	1.2	(6.1)		
514	小　皿	(8.6)	1.3	(6.6)		
515	小　皿	(7.9)	1.1	(6.0)		
516	小　皿	(8.5)	(1.3)	(6.5)		
517	小　皿	(8.0)	1.3	(5.9)		
518	小　皿	7.9	1.4	6.1		
519	小　皿	7.1	0.9	4.6		
520	小　皿	(9.1)	1.6	(6.9)		
521	小　皿	(8.2)	1.2	(6.3)		
522	小　皿	(7.8)	1.3	(6.7)		
523	小　皿	8.0	1.0	6.2		灰原Ｄ・Ｆ層出土
524	小　皿	7.8	1.1	6.4		灰原Ｄ・Ｆ層出土
525	小　皿	(7.7)	1.2	(6.0)		
526	小　皿	(8.0)	1.2	6.4		灰原Ｉ層出土
527	小　皿	(7.5)	1.0	(4.7)		
528	小　皿	9.2	1.2	6.8		
529	小　皿	(7.7)	1.1	6.0		
530	小　皿	7.5	1.0	4.8		

第２－４表　　小名田窯跡　出土土器観察表

No.	品　種	法　量（cm）			特徴（形態／技法・調整）	備　　考
		口　径	器　高	底　径		
531	小　皿	8.0	1.7	6.4	底部は粗雑な糸切り。	
532	小　皿	(7.7)	1.1	(5.9)		
533	小　皿	(8.2)	1.9	(5.8)		
534	小　皿	8.1	1.3	6.9		
535	小　皿	(8.1)	1.5	6.3		
536	小　皿	(8.8)	1.5	(6.9)		
537	小　皿	8.0	9.5	6.1		灰原ｎ層出土
538	小　皿	8.6	1.4	6.4		灰原５－４層出土
539	小　皿	8.9	1.4	6.5		灰原５－４層出土
540	小　皿	(8.3)	1.3	(6.0)		灰原５－４層出土
541	小　皿	(7.4)	1.3	(5.0)		
542	小　皿	(7.7)	(1.5)	(5.9)		
543	小　皿	8.0	1.2	5.9		
544	小　皿	7.4	0.7	4.7		
545	小　皿	9.0	0.8	7.2		
546	小　皿	7.9	1.5	6.9		
547	小　皿	(8.0)	(1.4)	(4.8)		
548	小　皿	(8.3)	1.4	(6.6)		
549	小　皿	8.3	1.3	6.1		窯体内最終床面上
550	小　皿	8.3	1.2	6.2		窯体内最終床面
551	小　皿	7.4	1.1	5.8		窯体内最終床面上
552	小　皿	8.0	1.2	6.3		窯体内最終床面
553	小　皿	8.2	1.3	5.8		窯体内最終床面上
554	小　皿	(8.1)	1.1	6.5		窯体内最終床面
555	小　皿	(7.6)	5.8	5.7		

第３表　　小名田窯跡　出土土器観察表

No.	器　種	法　量（cm）			特徴（形態／技法・調整）	備　　考
		口　径	器　高	底　径		
556	片口椀	(14.6)	(4.5)	(6.4)	底部は粗雑な糸切り。底部と体部の境界は不鮮明。体部はゆるやかな膨みをもって立ち上がる。口縁端部はまるくおさめる。片口部は、口縁部一部をわずかに下方へひねる。	
557	片口椀	(14.7)	4.9	(6.6)		
558	片口椀	16.0	4.6	6.6		
559	片口椀	(17.0)	4.5	(7.1)		
560	片口椀	(15.7)	4.8	(7.0)		
561	片口椀	(16.3)	4.3	(7.2)		
562	片口椀	(17.4)	(4.8)	(6.6)		
563	片口椀	15.9	4.5	5.9		
564	片口椀	(16.5)	4.1	7.8		
565	片口椀	(17.4)	(4.9)	(7.4)		

第４表　　小名田窯跡　出土土器観察表

No.	器　種	法　量（cm）			特徴（形態／技法・調整）	備　　考
		口　径	器　高	底　径		
566	片口鉢	(18.6)	(4.6)	?	高台付	灰原Ｒ層出土
567	片口鉢	(18.7)	5.5	(10.2)		
568	片口鉢	20.0	5.3	9.9		
569	片口鉢	(20.3)	5.1	(9.8)		
570	鉢	(26.1)	(6.6)	?		灰原Ｋ層出土
571	鉢	?	(4.8)	(11.3)	大型の片口鉢ないしはその底部。	
572	鉢	(28.8)	9.0	(11.4)		
573	鉢底部	?	(6.7)	(13.4)		
574	鉢	(33.0)	10.3	(12.6)		灰原Ｃ層出土
575	鉢	(27.7)	(3.3)	?		灰原Ｃ層出土
576	鉢	(31.3)	(10.5)	(12.2)		
577	鉢	(13.3)	(23.4)	(21.1)		
578	軒平瓦	—	—	—		
579	不明	(6.5)	2.7	(3.5)	手捏ねの須恵器。	灰原１層出土
580	不明	(5.5)	3.3	(4.4)		

ONADA KLIN

Report of an Excavation at the Site of a Sueki Kiln at Onada, Kobe, Hyogo pref Japan.

KUBO Hiroyuki and NIO Kazuto, Editors

March, 1997

Hyogo Prefectural Board of

Education, Center for Archaeology

Report No. 157

SUMMARY

This report summarizes the results of an excavation at the Onada Kiln site in Kobe city, Hyogo pref. Japan. The Kiln is dating to the end of 12th century or early 13th century A.D. Staff of the Hyogo prefectural center for archaeology carried out the excavation in 1994. The proposed construction of the Sanyo high-way, we nsccesstitated excavation on account of the foundation of the high-way.

Location of the site

Onada Kiln site is situated in the northern ward of Kobe city. The site is located on gentle sl-ope, at the edge of a hill, and the hight of the site is 183 meters above the sea level.

Onada Kiln Site and Artifacts

The greater part of the kiln chamber was destroyed. The remaining length of the kiln was 1.9 meters, and its width was 1.2 meters. The actual length of the kiln chanber was around 5 meters, we estimated.

To the southwest of this kiln, an ash field was located. In the ash field, we found a large quantity broken or poorly fired Sue-pottery as well as the ash from the kiln. The ash field extend to the southwest for more than 10 meters, and to the northwest and to the south-east also for 10meters.

The majority of artifacts excavated at Onada kiln site were fragments of bowls (椀) and small dishies (小皿). We also excavated small numbers of mortars(摺鉢) and a pot (甕).

Conclusion

In consequence of the archaeological excavation and typological analysis, we could fix the exact date of these earthware. So the kiln is dating to the end of 12th. century or early 13th. century A.D. The kiln was used in a short period of time. In this period, very large-scale kiln cluster was producing Sue pottery, in the western area of Kobe (called Higashi Harima area). And great qantity of Sue pottery were excavated at the kiln cluster. But we had very few data in the northern area. On this excavation we realized, for the first time, the actual condition of production Sue pottery, in the northern area of Kobe-city.

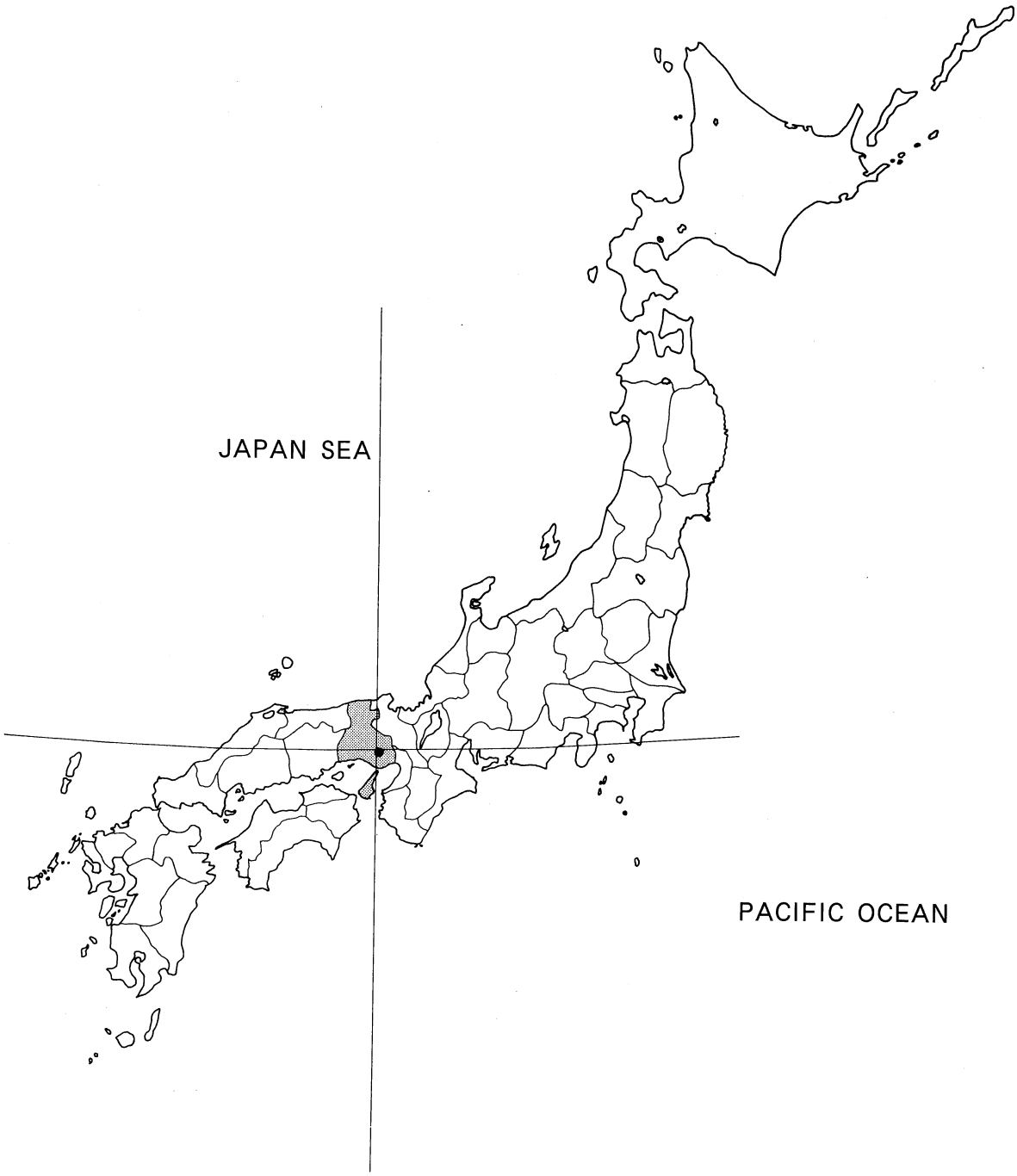
編集後記

小名田窯跡の報告書を、ようやく刊行することができた。調査をおこなったのが1991（平成３）年のことであるから、早くも６年の歳月が過ぎ去ったことになる。この間に私たちは、阪神・淡路大震災という、これまでだれも体験しなかった大災害を体験することになった。それから２年あまり。復興の事業は今も続いており、埋蔵文化財の調査も間断なく行われているのが現状である。

これまで私たちは、埋蔵文化財の仕事に携わりながら、調査した事実を、事実としてしか受け止めていなかった部分がある。阪神・淡路大震災の後、埋蔵文化財の調査の資料中から、過去の地震の痕跡が次々と見いだされ、それが地震の研究に活用される状況を見て、改めて、私たちがそうした記録を掘りあてていたのだということを、認識させられた。無論、私たちは地震の専門家ではない。しかし、埋蔵文化財の調査を通じて、地層に残された過去の地震の痕跡を見いだすことは可能である。そして私たちには、その年代を決定する蓄積がある。今後の調査にあたっては、学際的な研究をいっそう深化させ、埋蔵文化財のデータを他の領域でも利用しやすいような、情報の提供を行っていくことが、私たちの仕事のひとつになるように思われる。

今回報告された小名田窯跡の資料は、山陽自動車道の建設に伴ってみつかった、数多くの埋蔵文化財のごく一部にすぎない。県民の方々をはじめ多くの方に、こうした資料が利用されることが、多くの方々の支持によって調査をしている私たちの、切なる希望である。それとともに、森浩一同志社大学教授が仰るように、考古学を通じて地方に夢や勇気を与えるような貢献が多少なりともできるのであれば、望外の幸せである。

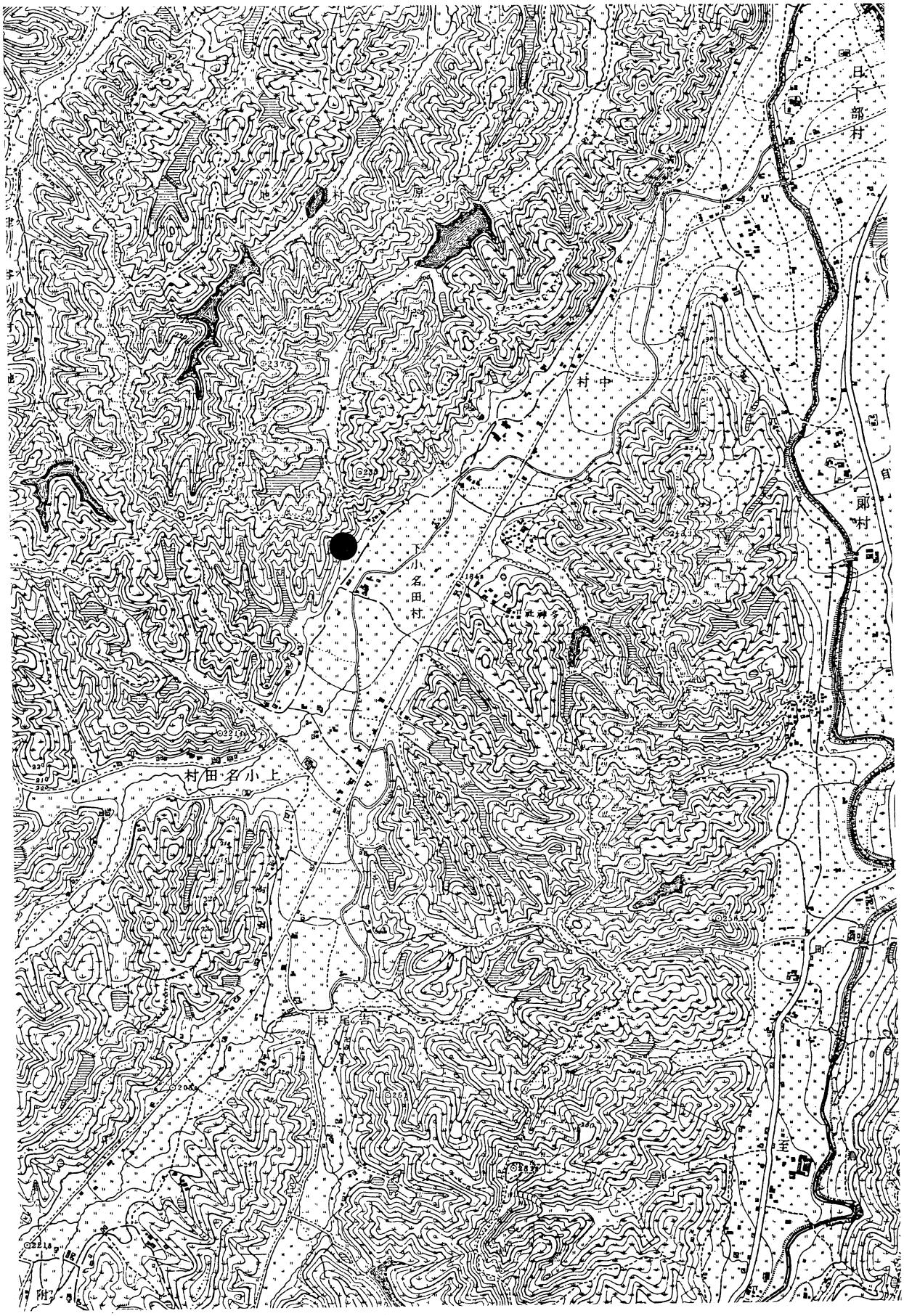
平成９（1997）年令月吉日



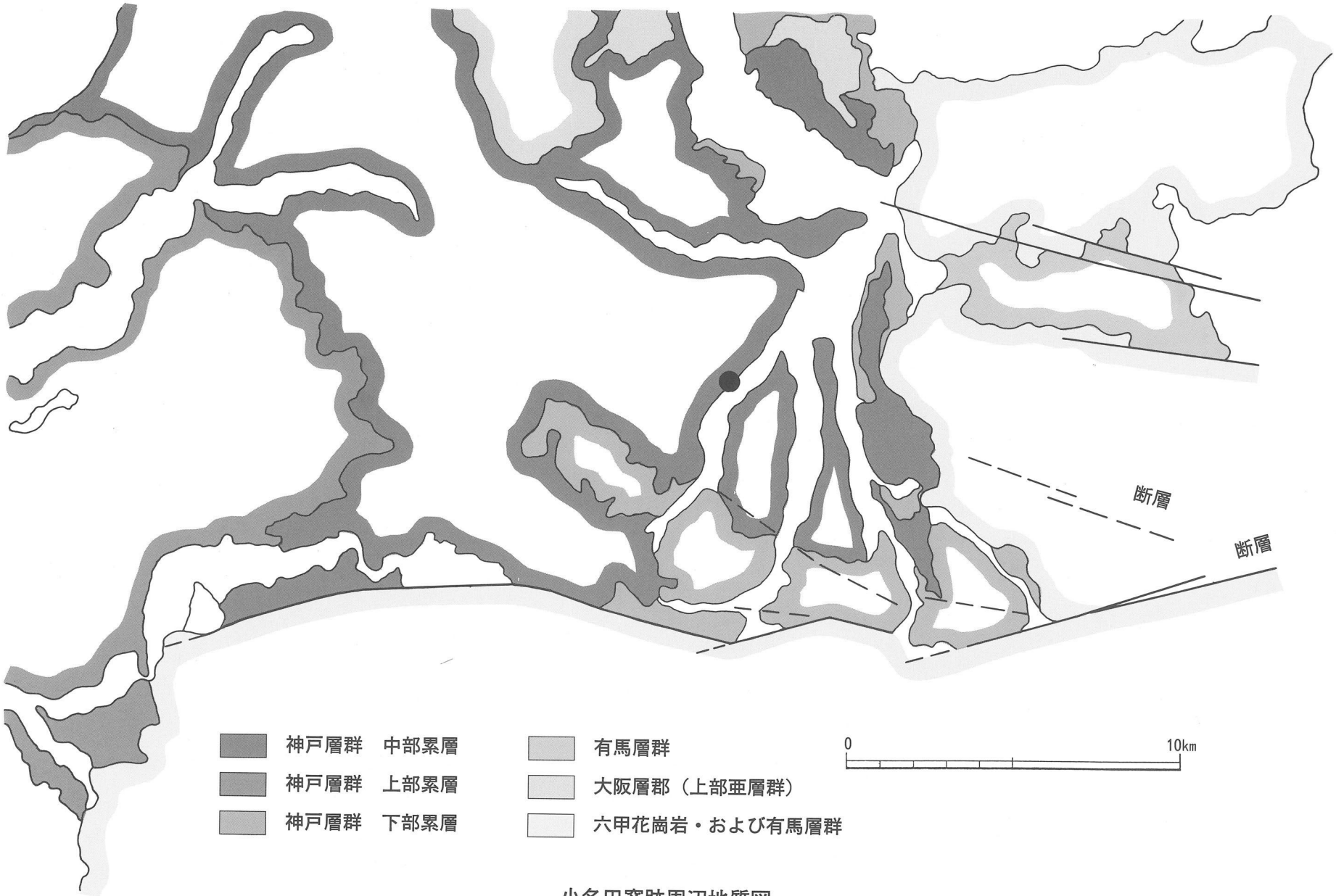
LOCATION OF ONADA KILN SITE

小名田窯跡の位置

図版 2



小名田窯跡の位置（明治20年陸軍作成地図）

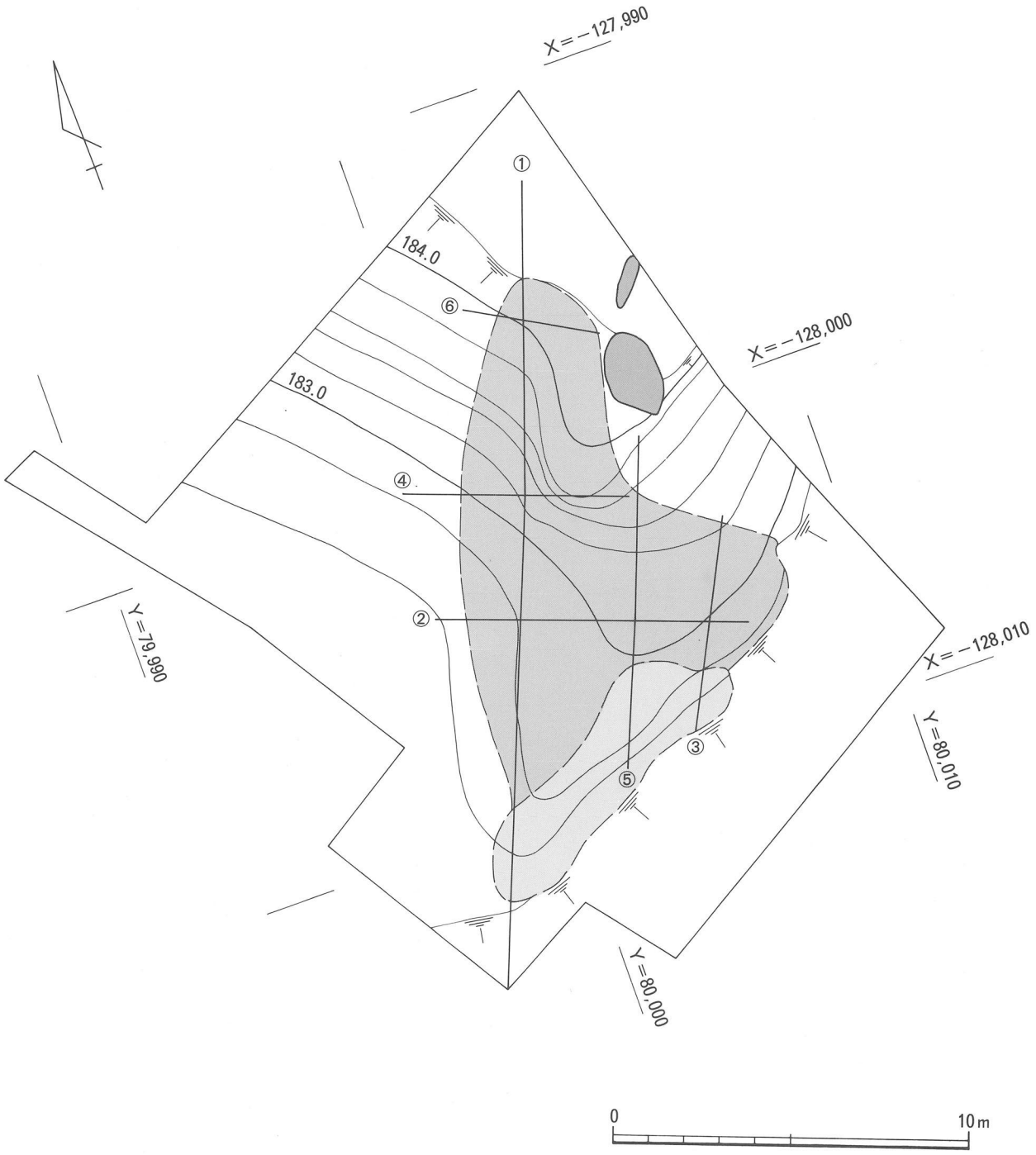


小名田窯跡周辺地質図

図版3

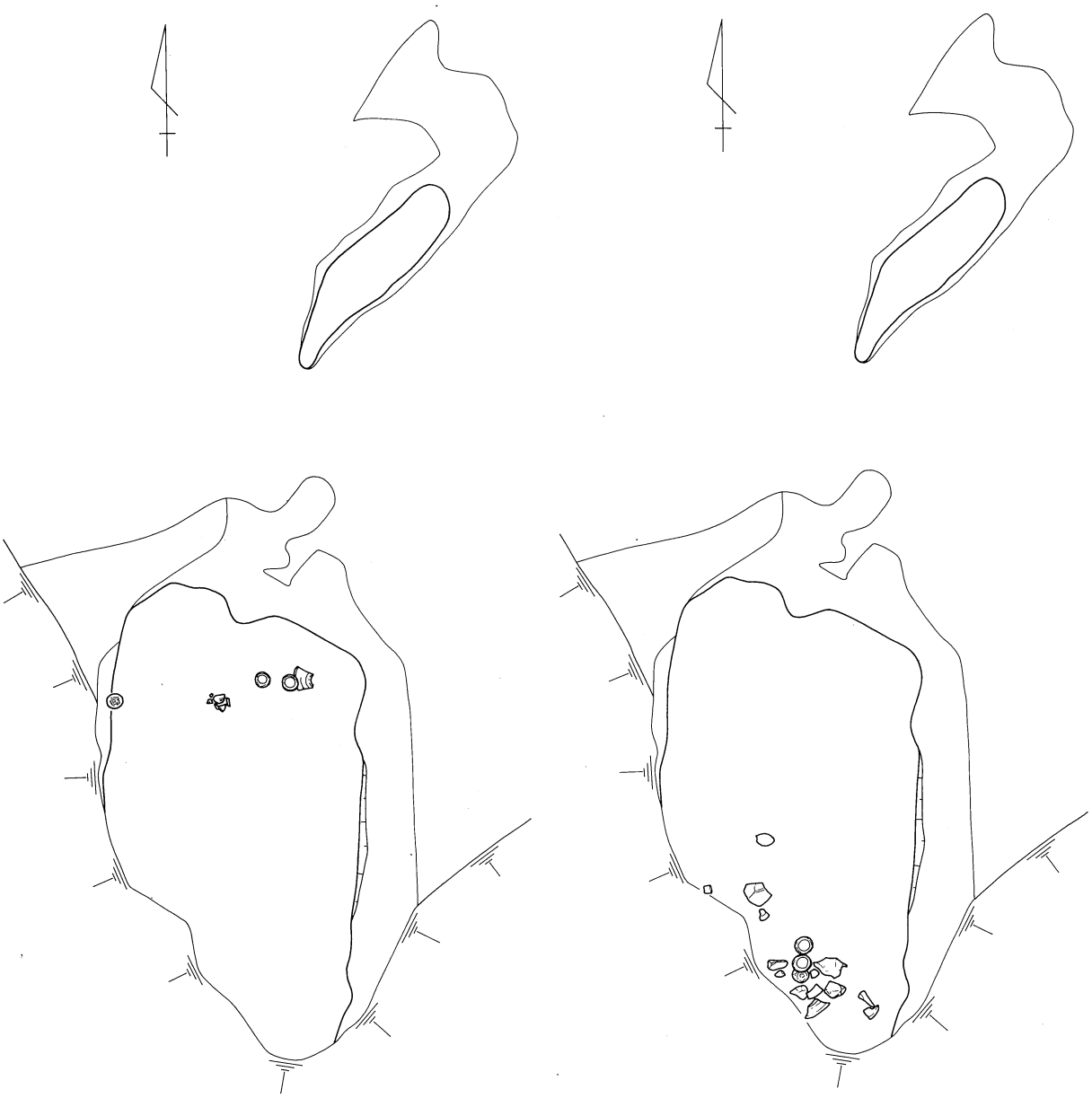
図版 4

完成後の山陽自動車道と調査地周辺


X=−127,990
X=−128,000
X=−128,010
Y=79,990
Y=80,010
Y=80,000
184.0
183.0
①
②
③
④
⑤
⑥
0
10m

小名田窯跡地形測量図

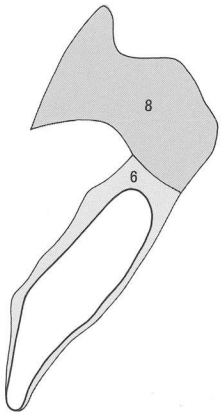
図版 6

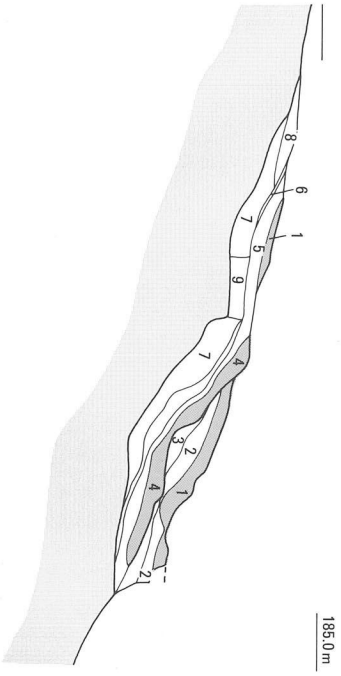


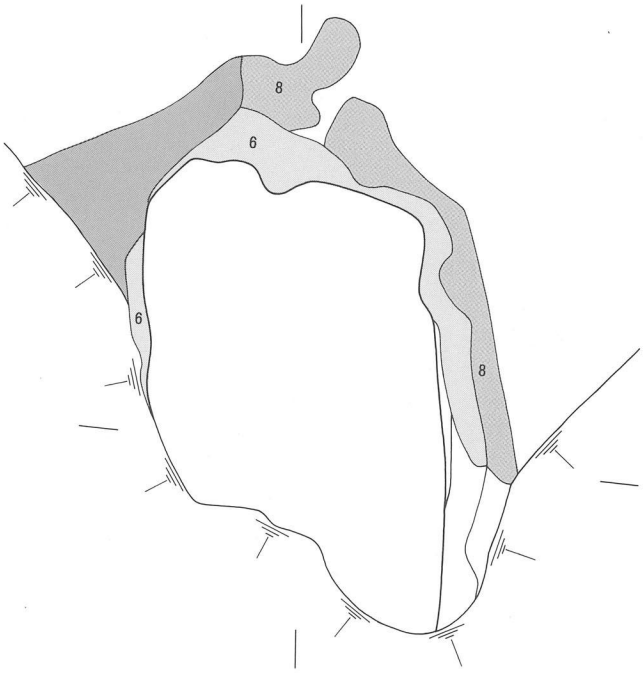
第 1 面
（操業時床面）

第 2 面
（第 2 次床面）

窯体内土器出土平面図







1．灰白色還元層（5Ｙ７／１）　窯体最終時床面

2．明黄褐色酸化層（2.5Ｙ６／６）

3．暗赤褐色酸化層（2.5ＹＲ３／２）　焼土層

4．灰白色還元層（5Ｙ７／１）　窯体操業当初床面

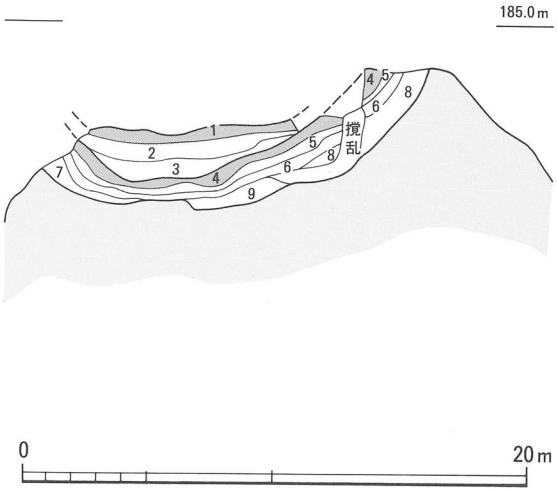
5．明黄褐色酸化層（2.5Ｙ７／６）

6．明赤褐色酸化層（2.5ＹＲ５／８）　焼土層

7．灰赤色酸化層（2.5ＹＲ６／２）　焼土含

8．暗赤褐色酸化層（7.5Ｙ３／３）　焼土層

9．浅黄色層（2.5Ｙ７／４）　焼土粒微量含

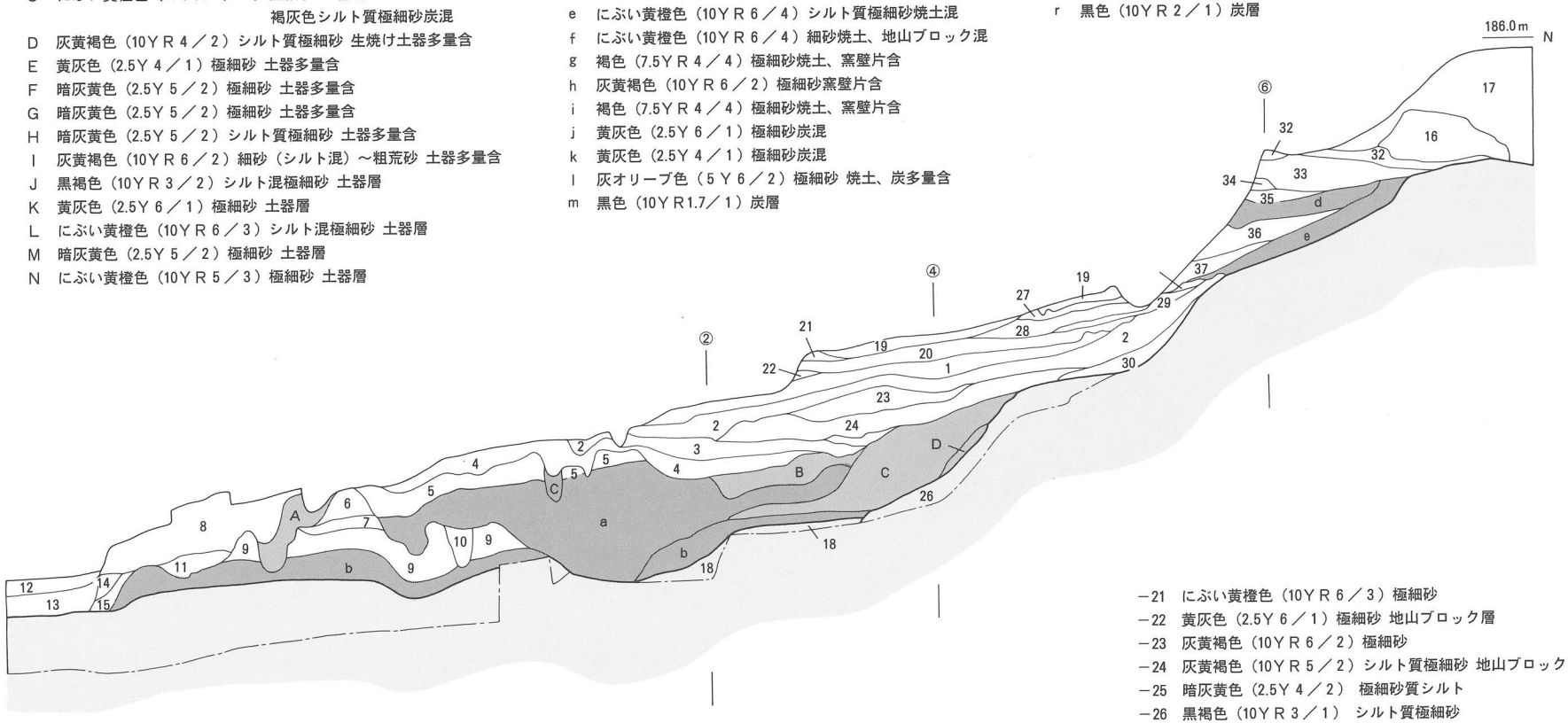


窯体平面図および断ち割り断面図

A　暗灰黄色（2.5Y 5／2）シルト質極細砂 土器多量含
B　黄灰色（2.5Y 5／1）シルト質極細砂 土器層
C　にぶい黄橙色（10YR 6／3）極細砂 土器層
C′　にぶい黄橙色（10YR 6／3）極細砂 土器層
　　褐灰色シルト質極細砂炭混
D　灰黄褐色（10YR 4／2）シルト質極細砂 生焼け土器多量含
E　黄灰色（2.5Y 4／1）極細砂 土器多量含
F　暗灰黄色（2.5Y 5／2）極細砂 土器多量含
G　暗灰黄色（2.5Y 5／2）極細砂 土器多量含
H　暗灰黄色（2.5Y 5／2）シルト質極細砂 土器多量含
I　灰黄褐色（10YR 6／2）細砂（シルト混）～粗荒砂 土器多量含
J　黒褐色（10YR 3／2）シルト混極細砂 土器層
K　黄灰色（2.5Y 6／1）極細砂 土器層
L　にぶい黄橙色（10YR 6／3）シルト混極細砂 土器層
M　暗灰黄色（2.5Y 5／2）極細砂 土器層
N　にぶい黄橙色（10YR 5／3）極細砂 土器層

a　オリーブ灰色（5GY 6／1）シルト質極細砂 炭層
b　灰色（10Y 4／1）極細砂質シルト炭混
c　褐灰色（10YR 5／1）シルト質極細砂炭含
d　にぶい黄橙色（10YR 7／2）シルト質極細砂焼土混
e　にぶい黄橙色（10YR 6／4）シルト質極細砂焼土混
f　にぶい黄橙色（10YR 6／4）細砂焼土、地山ブロック混
g　褐色（7.5YR 4／4）極細砂焼土、窯壁片含
h　灰黄褐色（10YR 6／2）極細砂窯壁片含
i　褐色（7.5YR 4／4）極細砂焼土、窯壁片含
j　黄灰色（2.5Y 6／1）極細砂炭混
k　黄灰色（2.5Y 4／1）極細砂炭混
l　灰オリーブ色（5Y 6／2）極細砂 焼土、炭多量含
m　黒色（10YR1.7／1）炭層

n　灰黄褐色（10YR 5／2）極細砂 焼土、炭多量含
o　暗灰黄色（2.5Y 5／2）極細砂 焼土、炭多量含
p　灰色（10Y 5／1）極細砂質シルト炭含
q　灰オリーブ色（5Y 4／2）極細砂質シルト 炭多量含
r　黒色（10YR 2／1）炭層

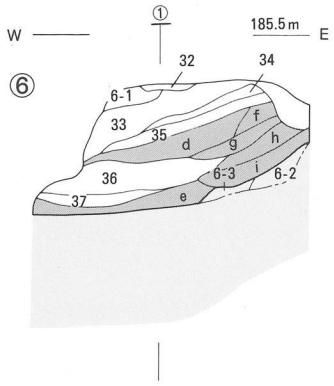


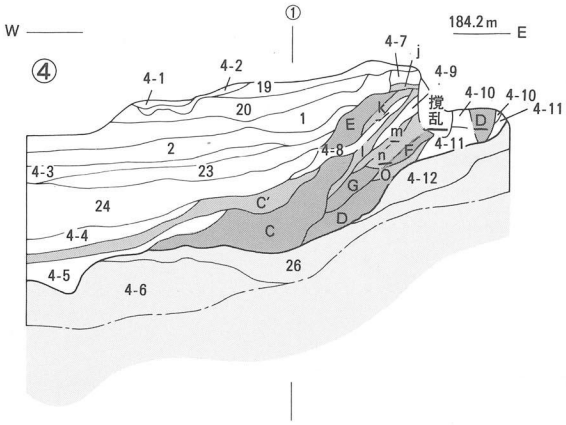
①
1－1　にぶい黄橙色（10YR 6／3）シルト質極細砂
－2　灰黄褐色（10YR 6／2）シルト質極細砂 地山ブロック混
－3　褐灰色（10YR 5／1）シルト質極細砂
－4　灰黄褐色（10YR 5／2）シルト質極細砂 地山ブロック多量混
－5　灰黄褐色（10YR 5／2）シルト質極細砂
－6　黄灰色（2.5Y 5／1）極細砂
－7　暗灰黄色（2.5Y 5／2）シルト質極細砂
－8　灰黄色（2.5Y 6／2）極細砂～細砂 近世以降の推積
－9　オリーブ灰色（2.5GY 6／1）シルト質極細砂 地山ブロック含

－10　緑灰色（7.5GY 6／1）シルト質極細砂 地山ブロック含
－11　黄灰色（2.5Y 6／1）細砂 地山ブロック多量含
－12　黄灰色（2.5Y 6／1）シルト質極細砂 近世以降の憤乱
－13　緑黄色（2.5Y 7／2）極細砂質シルト 近世以降の憤乱
－14　灰白色（5Y 7／2）極細砂質シルト 鉄分多量に含 近世以降の憤乱
－15　オリーブ灰色（2.5GY 6／1）シルト質極細砂 近世以降の憤乱
－16　黄灰色（2.5Y 6／1）シルト質極細砂
－17　灰黄色（2.5Y 6／2）極細砂 盛土
－18　オリーブ灰色（2.5GY 6／1）極細砂質シルト～粘土～細砂
－19　暗灰黄色（2.5Y 5／2）極細砂
－20　灰黄褐色（10YR 6／2）極細砂

－21　にぶい黄橙色（10YR 6／3）極細砂
－22　黄灰色（2.5Y 6／1）極細砂 地山ブロック層
－23　灰黄褐色（10YR 6／2）極細砂
－24　灰黄褐色（10YR 5／2）シルト質極細砂 地山ブロック層
－25　暗灰黄色（2.5Y 4／2）極細砂質シルト
－26　黒褐色（10YR 3／1）シルト質極細砂
－27　灰白色（2.5Y 7／1）極細砂
－28　黄灰色（2.5Y 6／1）極細砂
－29　にぶい黄褐色（10YR 5／3）極細砂
－30　黄灰色（2.5Y 6／1）シルト質極細砂
－31　浅黄色（2.5Y 7／3）極細砂
－32　黄灰色（2.5Y 6／1）極細砂
－33　にぶい黄褐色（10YR 5／4）細砂
－34　黄褐色（2.5Y 5／4）シルト混極細砂
－35　にぶい黄色（2.5Y 6／3）極細砂
－36　黄褐色（10YR 5／6）細砂
－37　灰黄褐色（10YR 6／2）極細砂

灰原土層断面図（1）



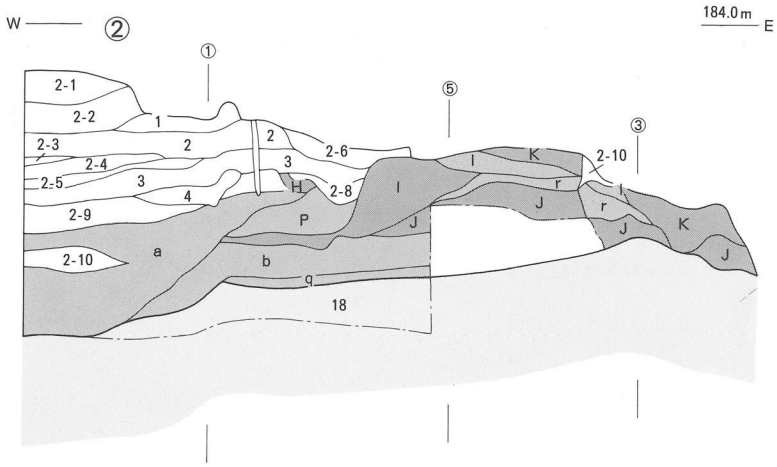


⑥

6－1　灰黄色（2.5Y 6／2）　極細砂～細砂
　－2　にぶい黄褐色（10YR 5／4）　シルト質極細砂～細砂
　－3　灰黄色（2.5Y 6／2）　細砂

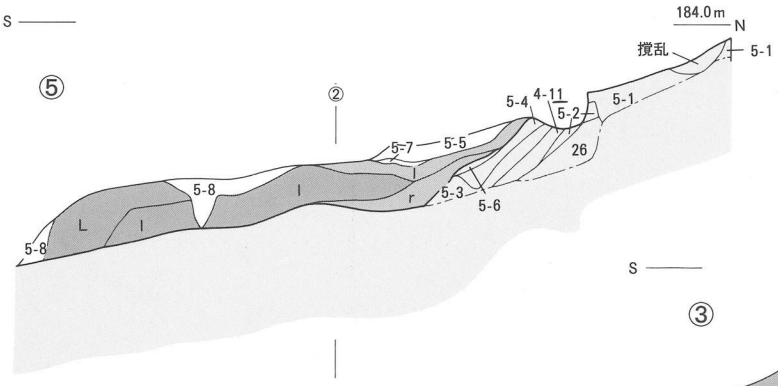
④

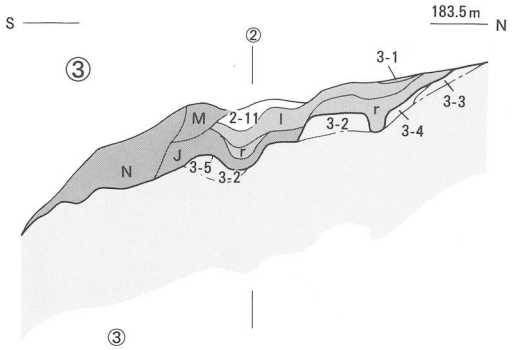
4－1　灰黄色（2.5Y 7／2）極細砂
　－2　黄灰色（2.5Y 6／1）シルト質極細砂
　－3　オリーブ灰色（2.5GY 6／1）シルト質極細砂
　－4　暗灰黄色（2.5Y 4／2）極細砂
　－5　灰オリーブ色（5Y 4／2）シルト質極細砂
　－6　青灰色（10BG 6／1）シルト質極細砂
　－7　黄灰色（2.5Y 6／1）極細砂
　－8　黄灰色（2.5Y 6／1）極細砂
　－9　黄灰色（2.5Y 6／1）極細砂
　－10　灰白色（2.5Y 7／1）極細砂
　－11　褐灰色（10YR 6／1）極細砂
　－12　灰色（5Y 6／1）極細砂



②

2－1　灰黄色（2.5Y 6／2）極細砂 地山ブロック含
　－2　黄灰色（2.5Y 6／1）極細砂 地山ブロック多量含
　－3　灰色（7.5Y 5／1）シルト質極細砂 地山ブロック含
　－4　灰色（10Y 6／1）シルト質極細砂 地山ブロック含
　－5　灰色（7.5Y 6／1）地山ブロック層（軟岩風化層）
　－6　灰黄色（2.5Y 6／2）極細砂 地山ブロック含
　－7　暗灰黄色（2.5Y 5／2）シルト質極細砂
　－8　暗灰黄色（2.5Y 5／2）シルト質極細砂
　－9　灰色（7.5Y 6／1）地山ブロック層
　－10　緑灰色（10G 5／1）シルト質極細砂
　－11　黄灰色（2.5Y 6／1）極細砂



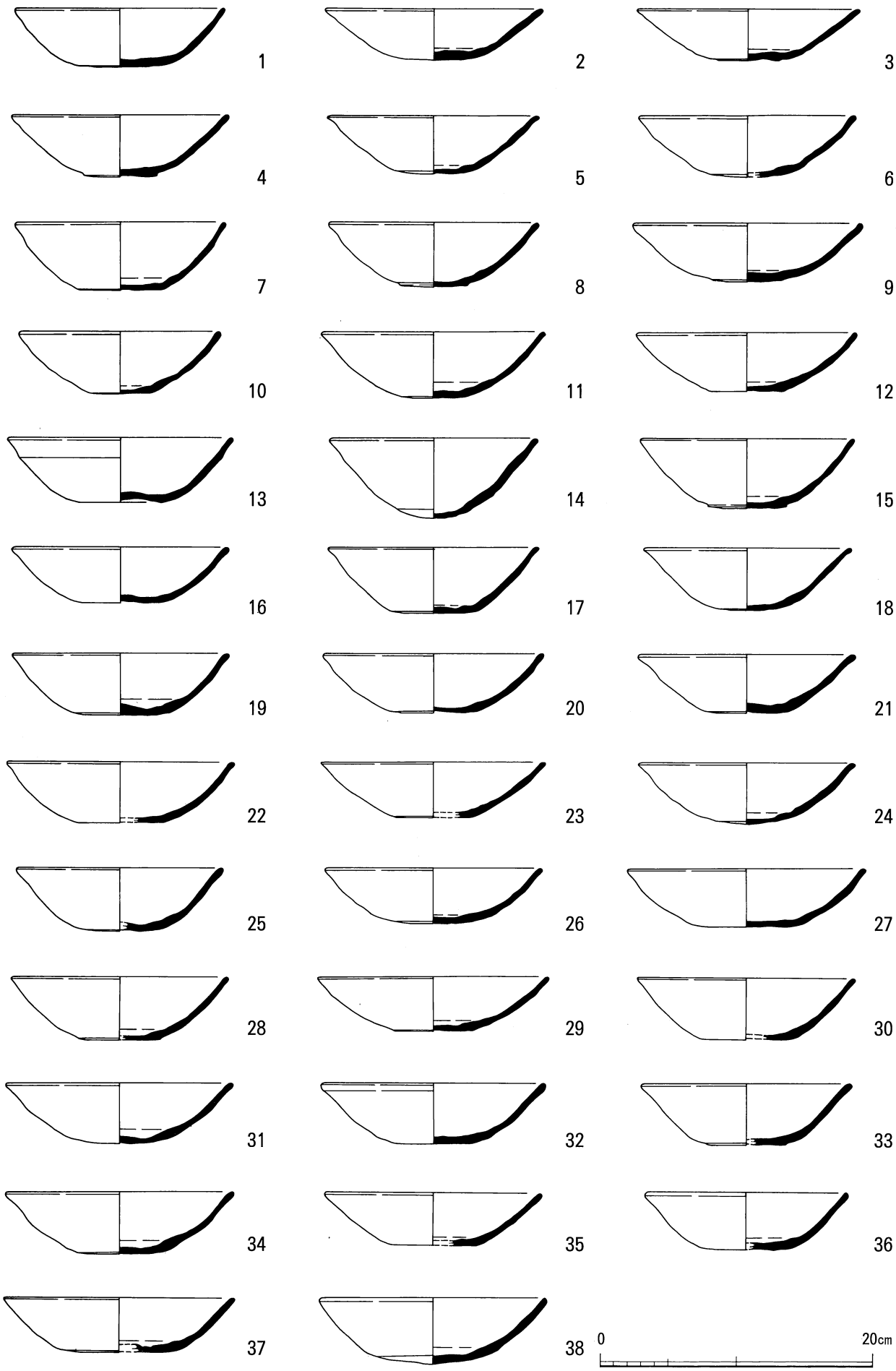


⑤

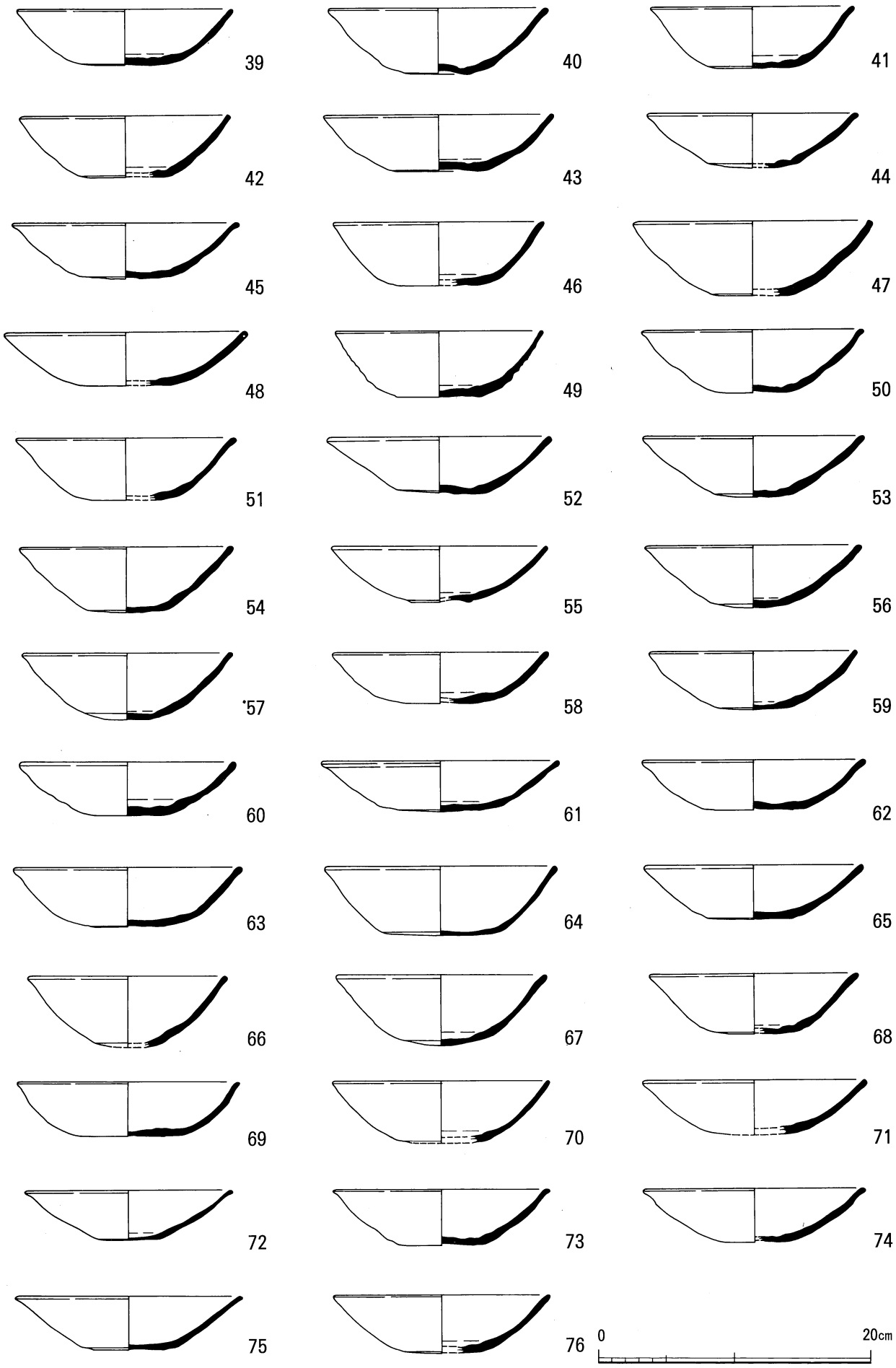
5－1　灰色（5Y 6／1）　極細砂
　－2　褐灰色（10YR 4／1）　極細砂
　－3　浅黄色（2.5Y 7／3）　極細砂
　－4　灰黄色（2.5Y 7／2）　シルト混極細砂
　－5　灰白色（5Y 7／1）　極細砂
　－6　灰黄褐色（10YR 4／2）　シルト混極細砂
　－7　灰黄褐色（10YR 4／2）　極細砂
　－8　にぶい黄橙色（10YR 7／2）　極細砂

③

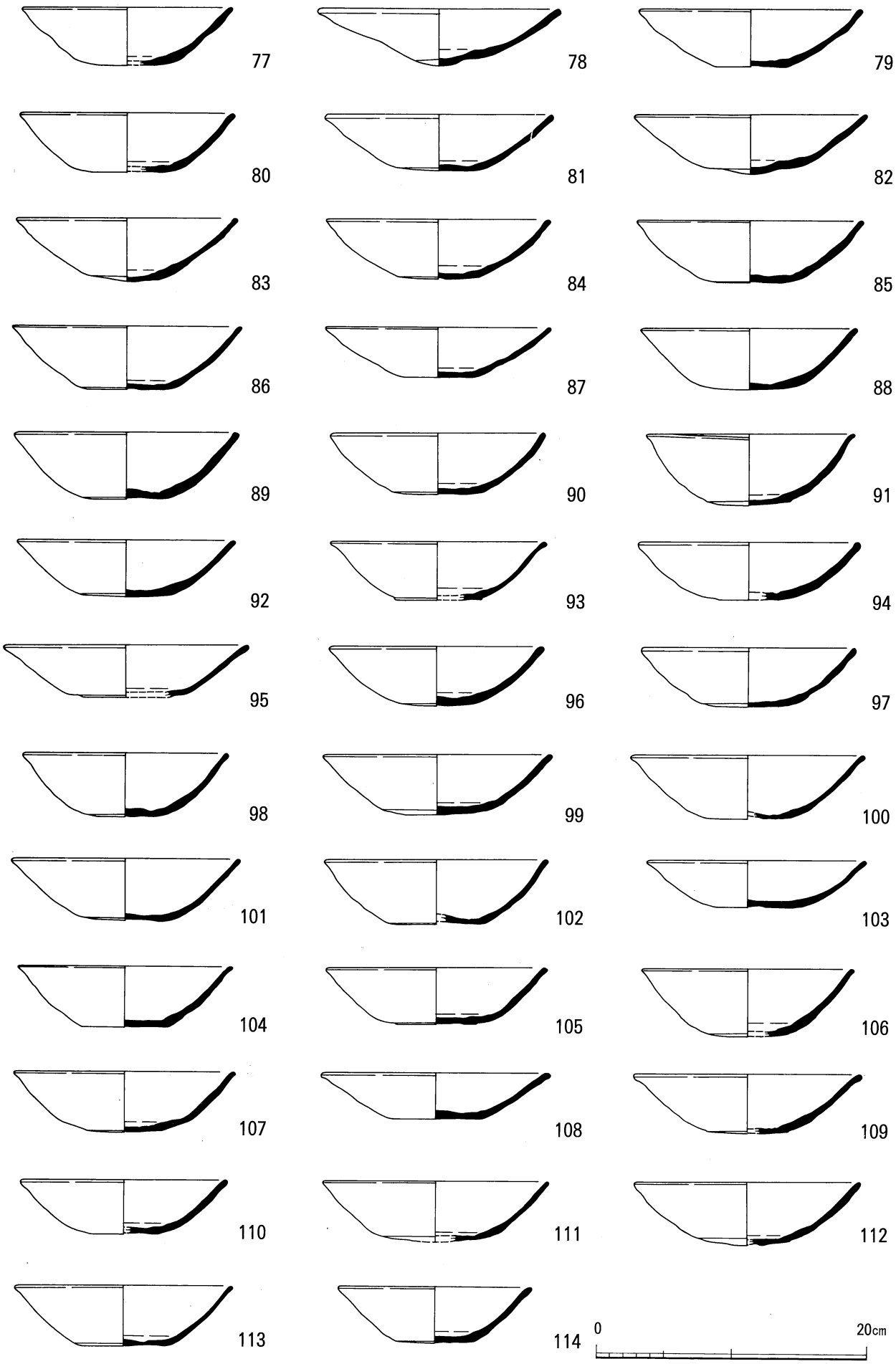
3－1　褐灰色（10YR 6／1）　極細砂
　－2　灰黄色（2.5Y 7／2）　極細砂
　－3　灰黄褐色（10YR 4／2）　シルト質極細砂
　－4　にぶい黄橙色（10YR 6／3）　ルト質極細砂
　－5　灰黄褐色（10YR 4－2）　極細砂


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
0
20cm

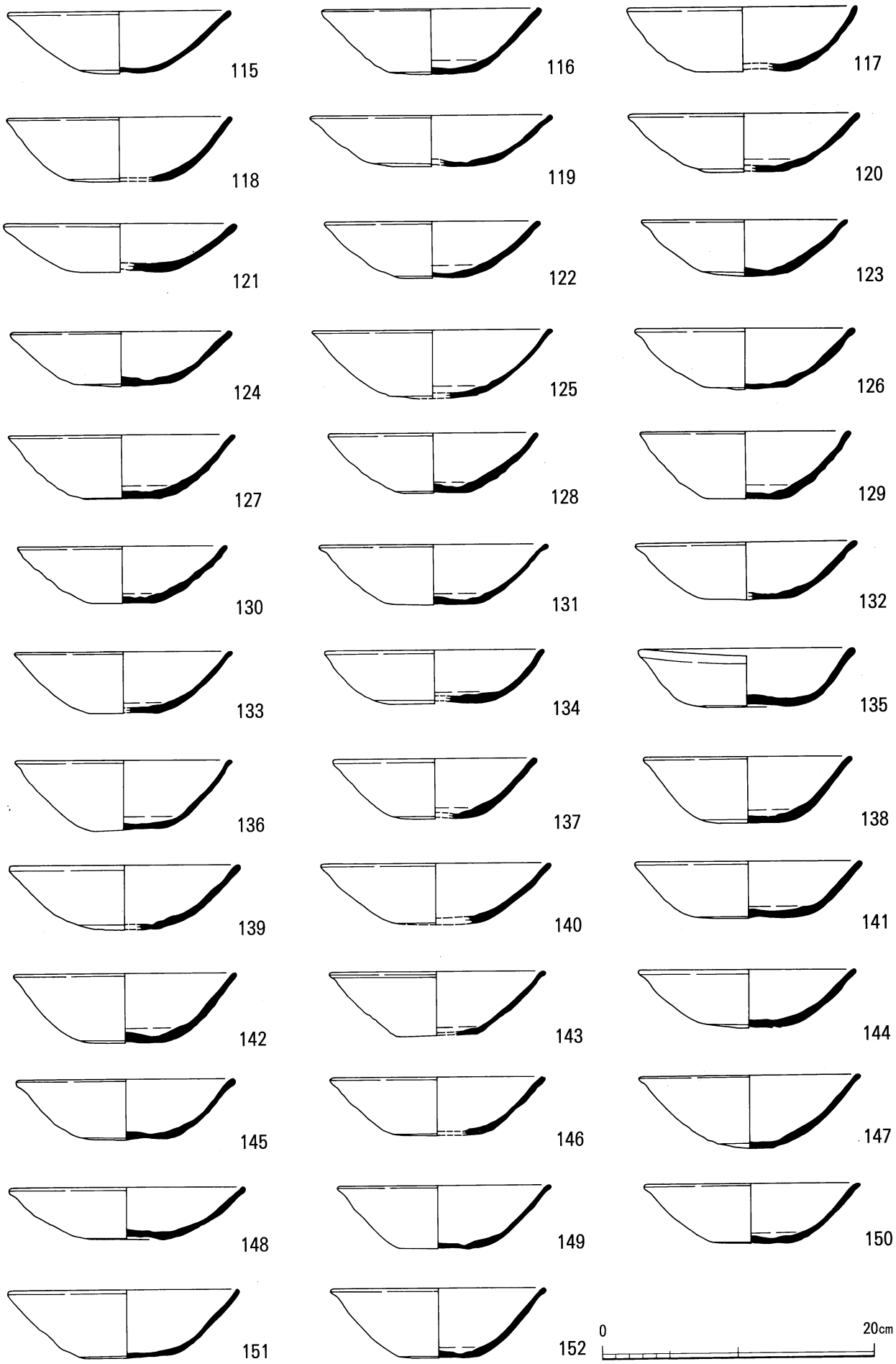
小名田窯跡出土土器 (1)


39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
0
20cm

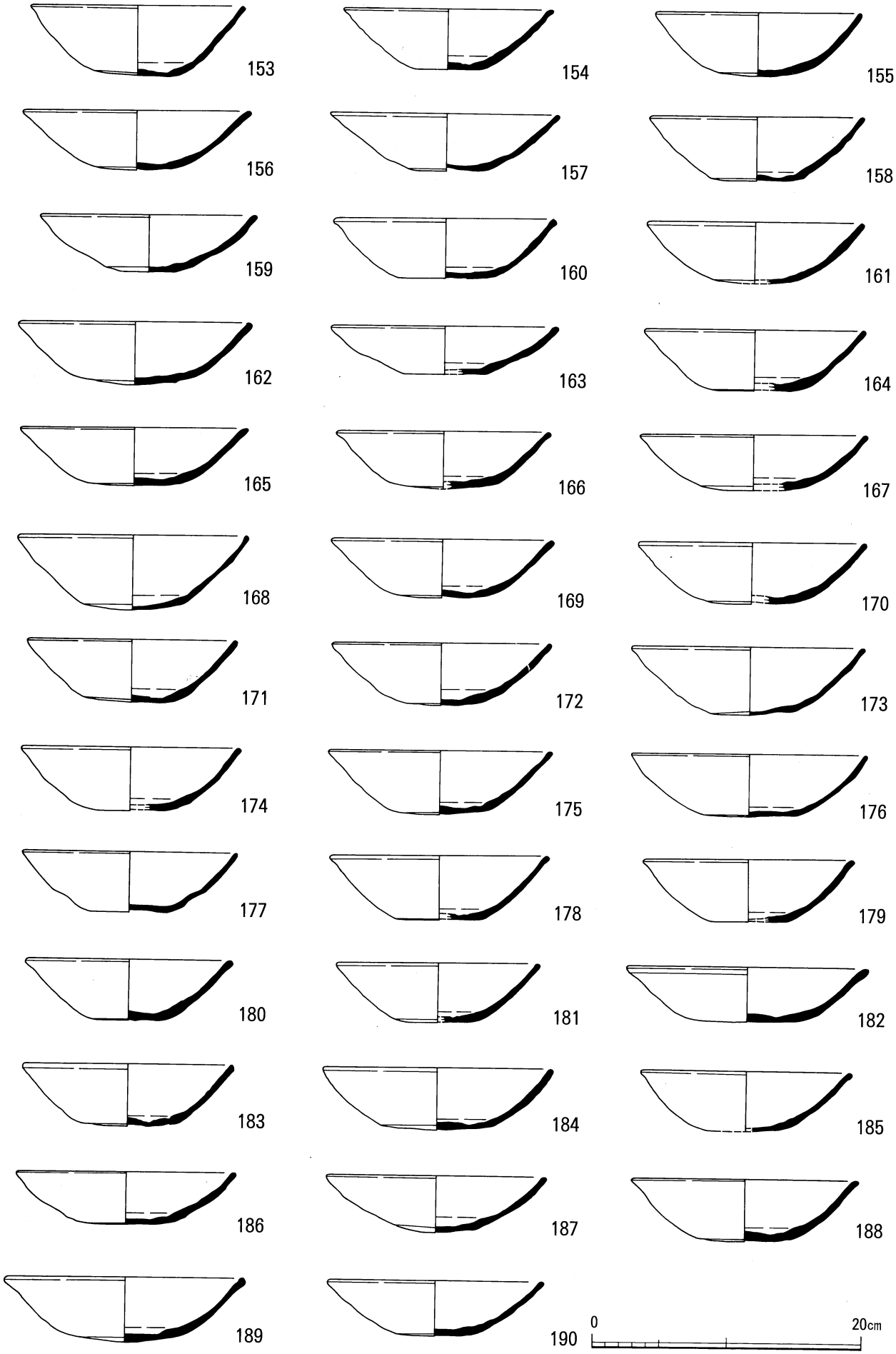
小名田窯跡出土土器（2）


77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
0
20cm

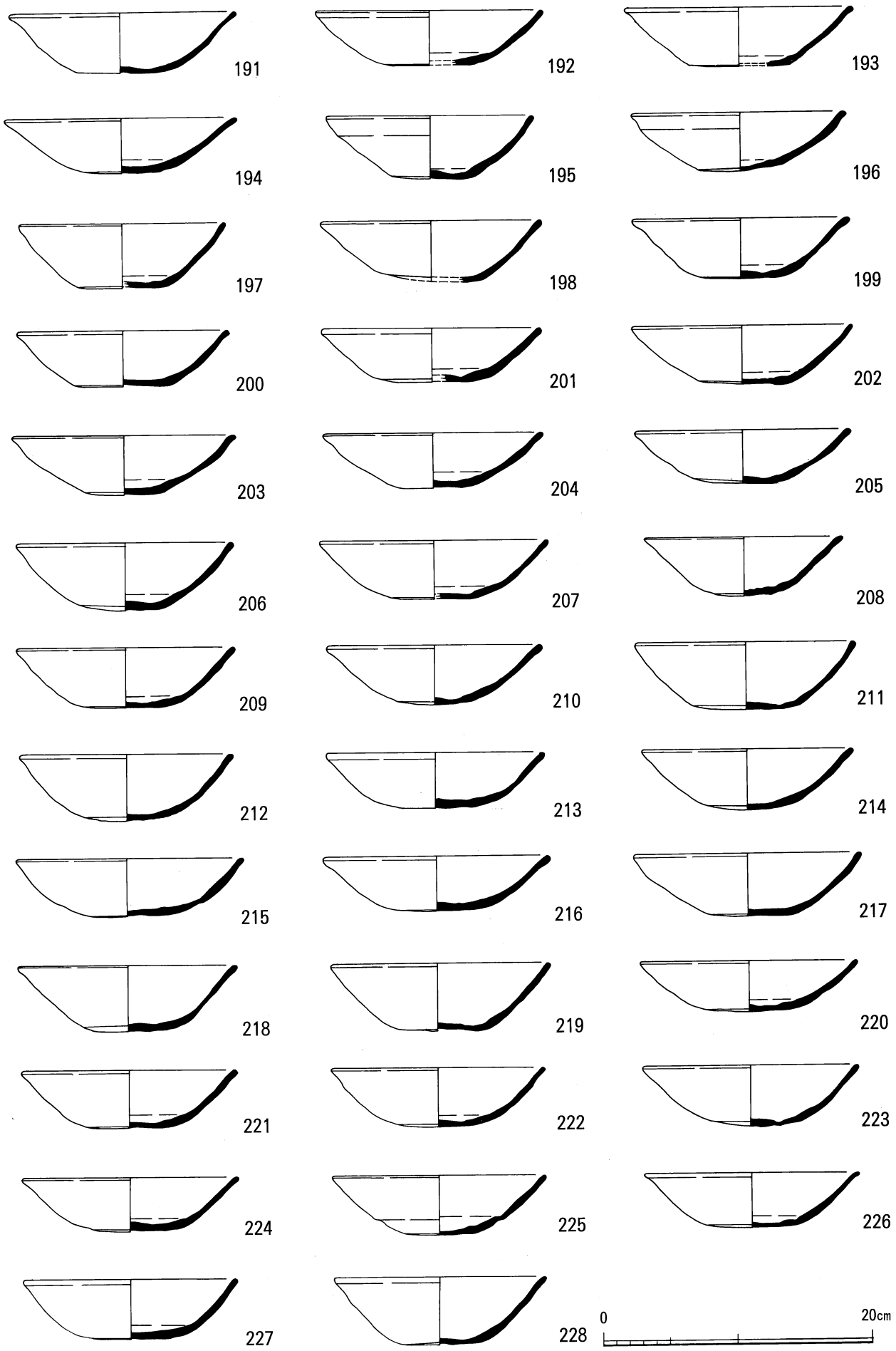
小名田窯跡出土土器（3）


115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
0
20cm

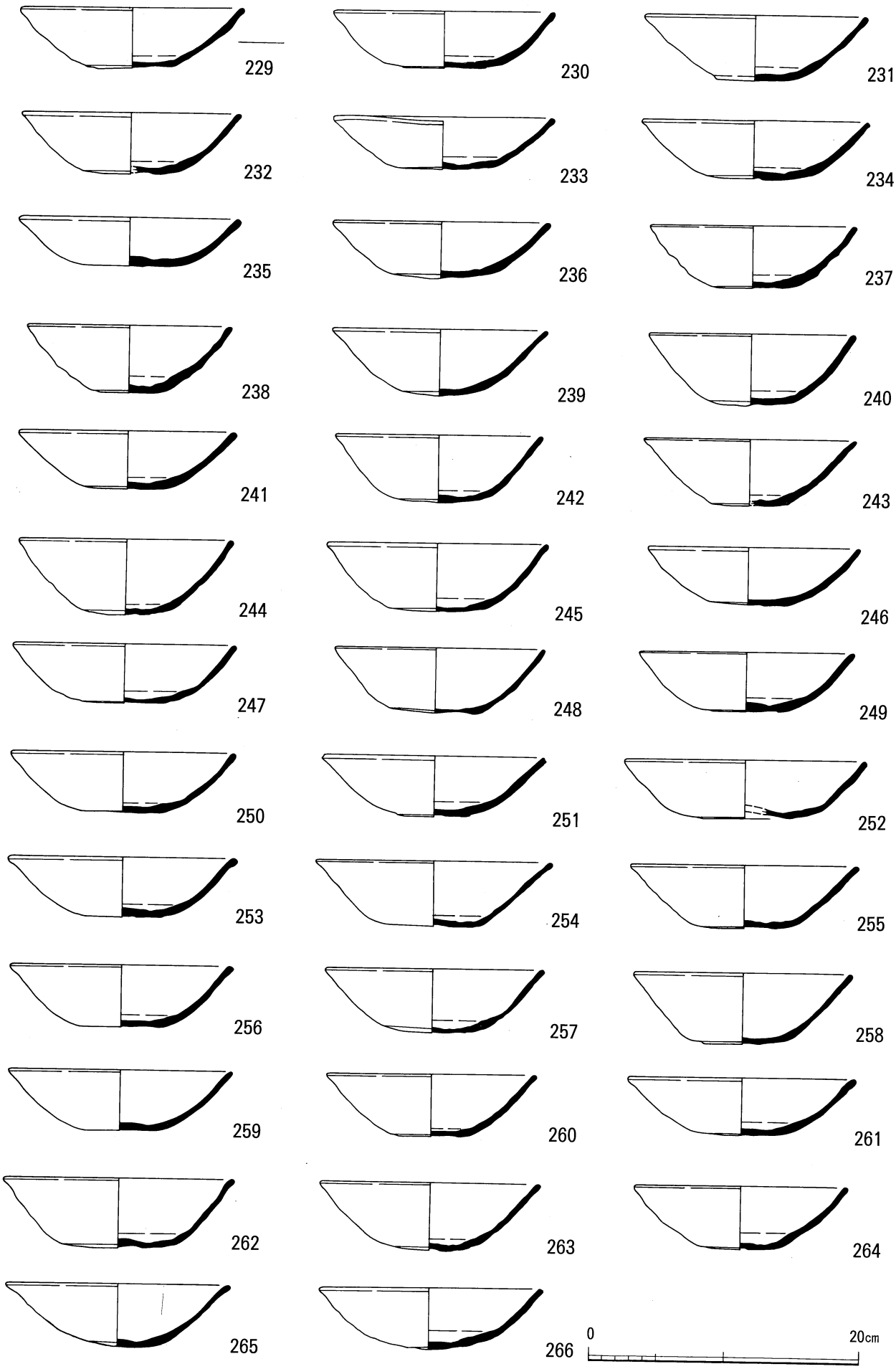
小名田窯跡出土土器（4）


153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
0
20cm

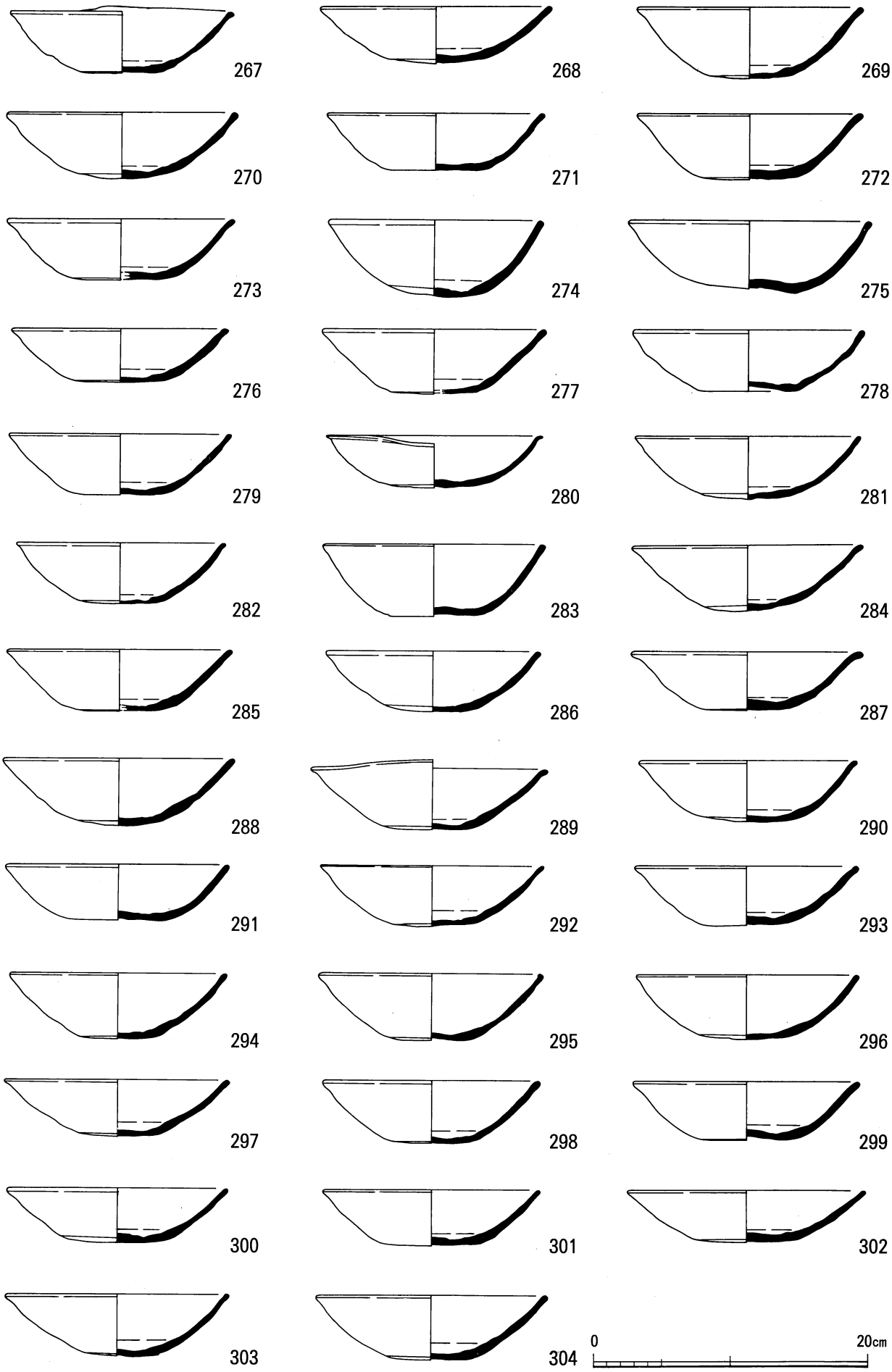
小名田窯跡出土土器 (5)


191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
0
20cm

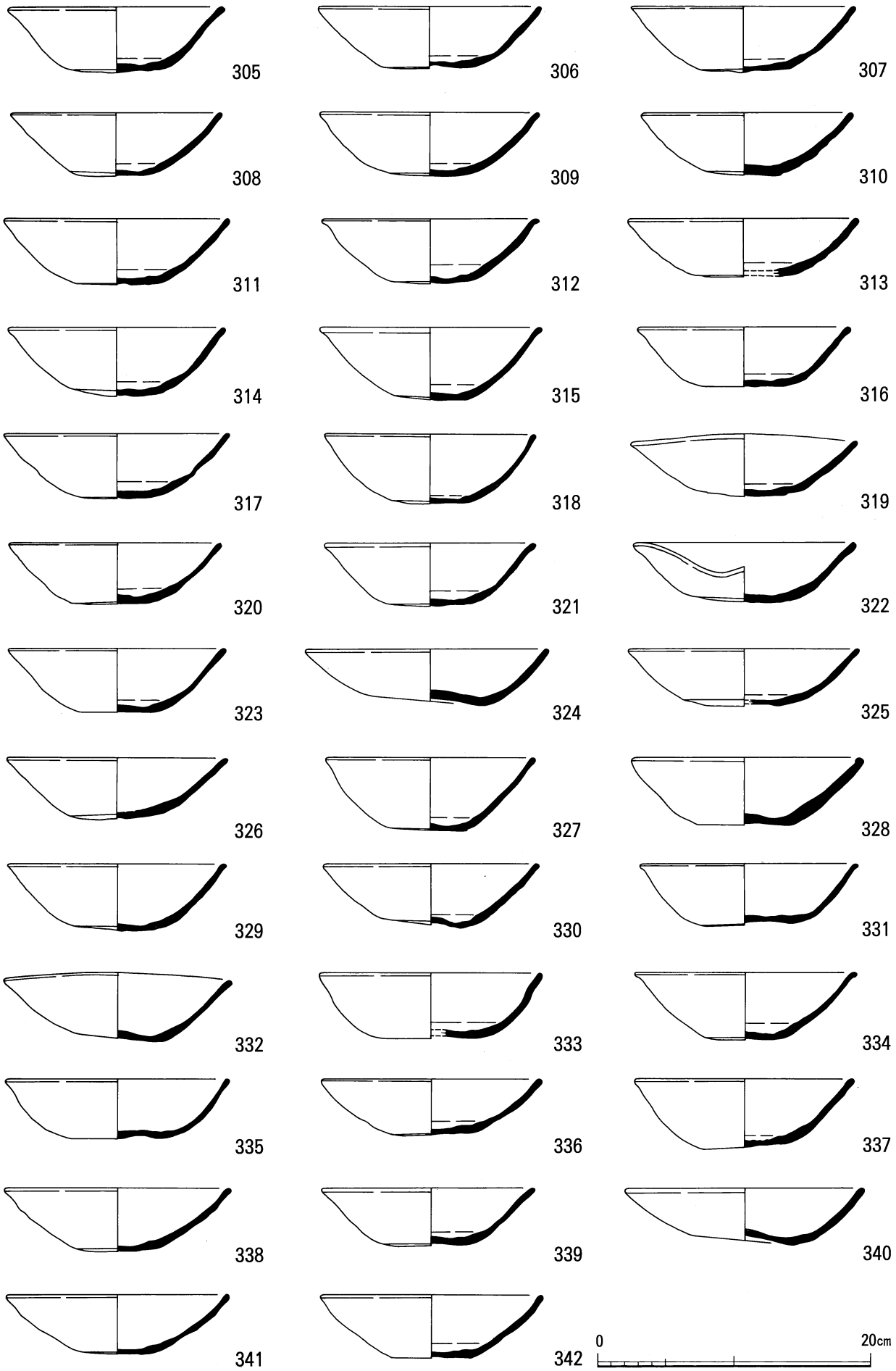
小名田窯跡出土土器（6）


229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
0
20cm

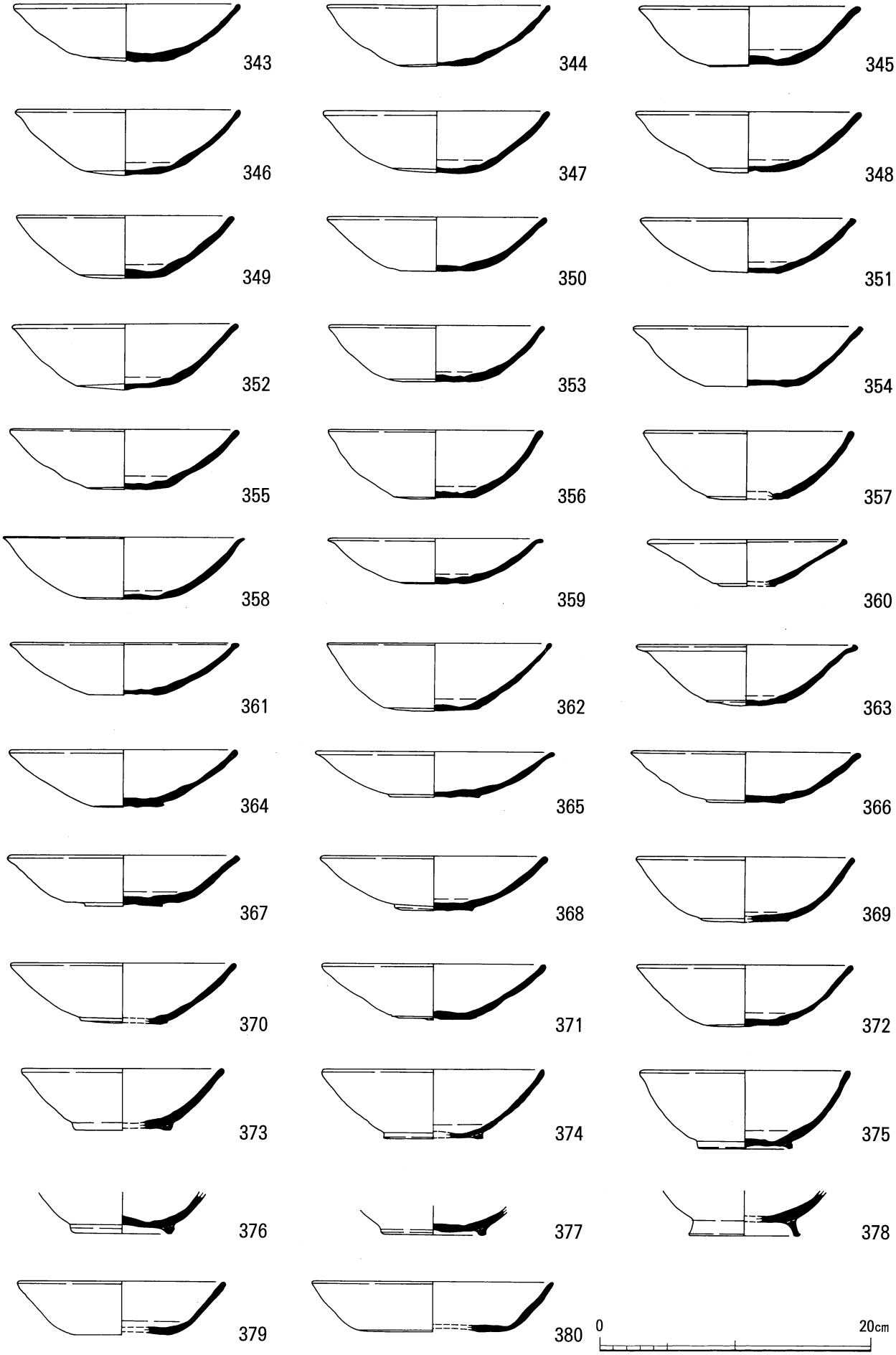
小名田窯跡出土土器（7）


267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
0
20cm

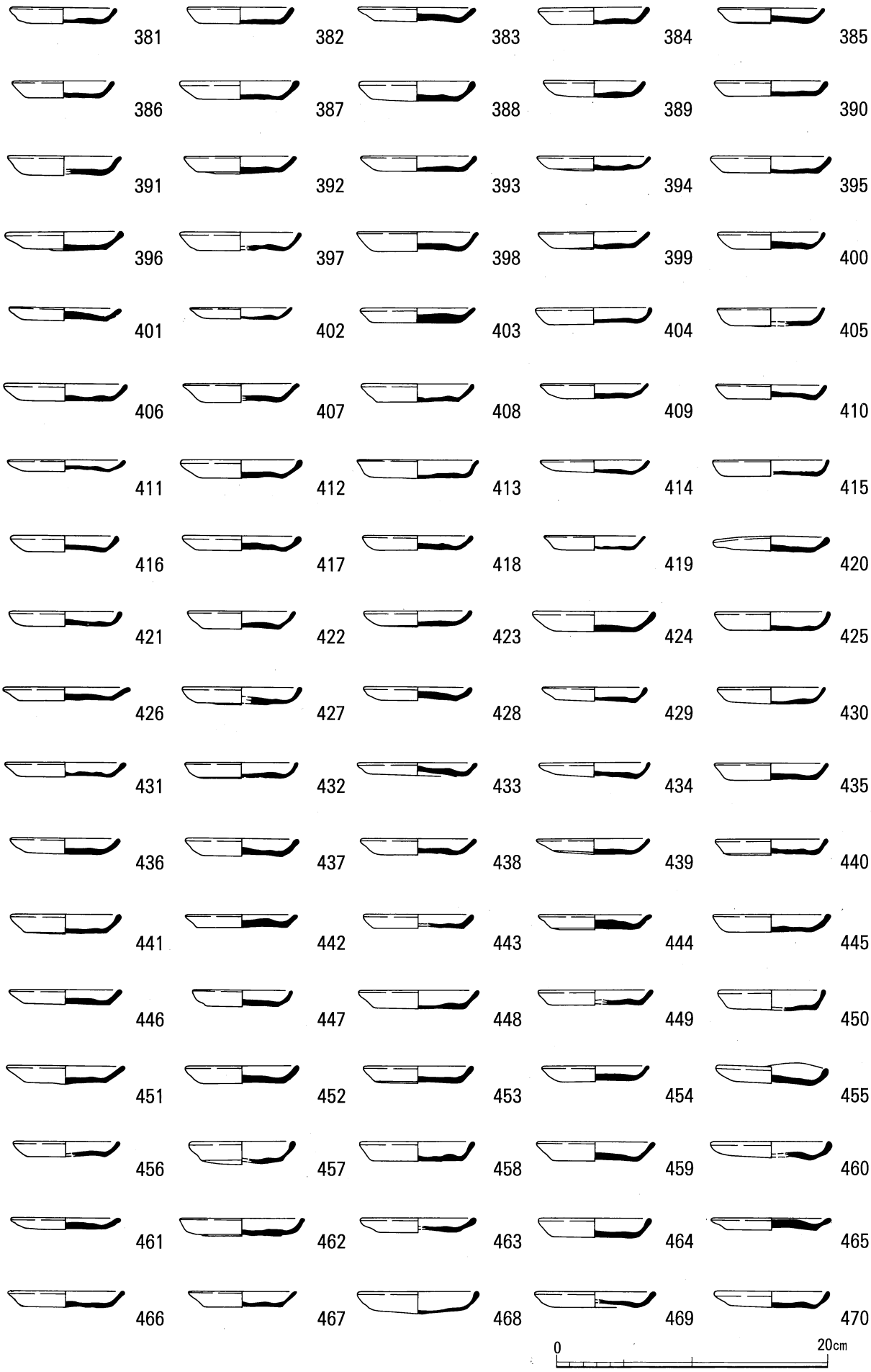
小名田窯跡出土土器（8）


305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
0
20cm

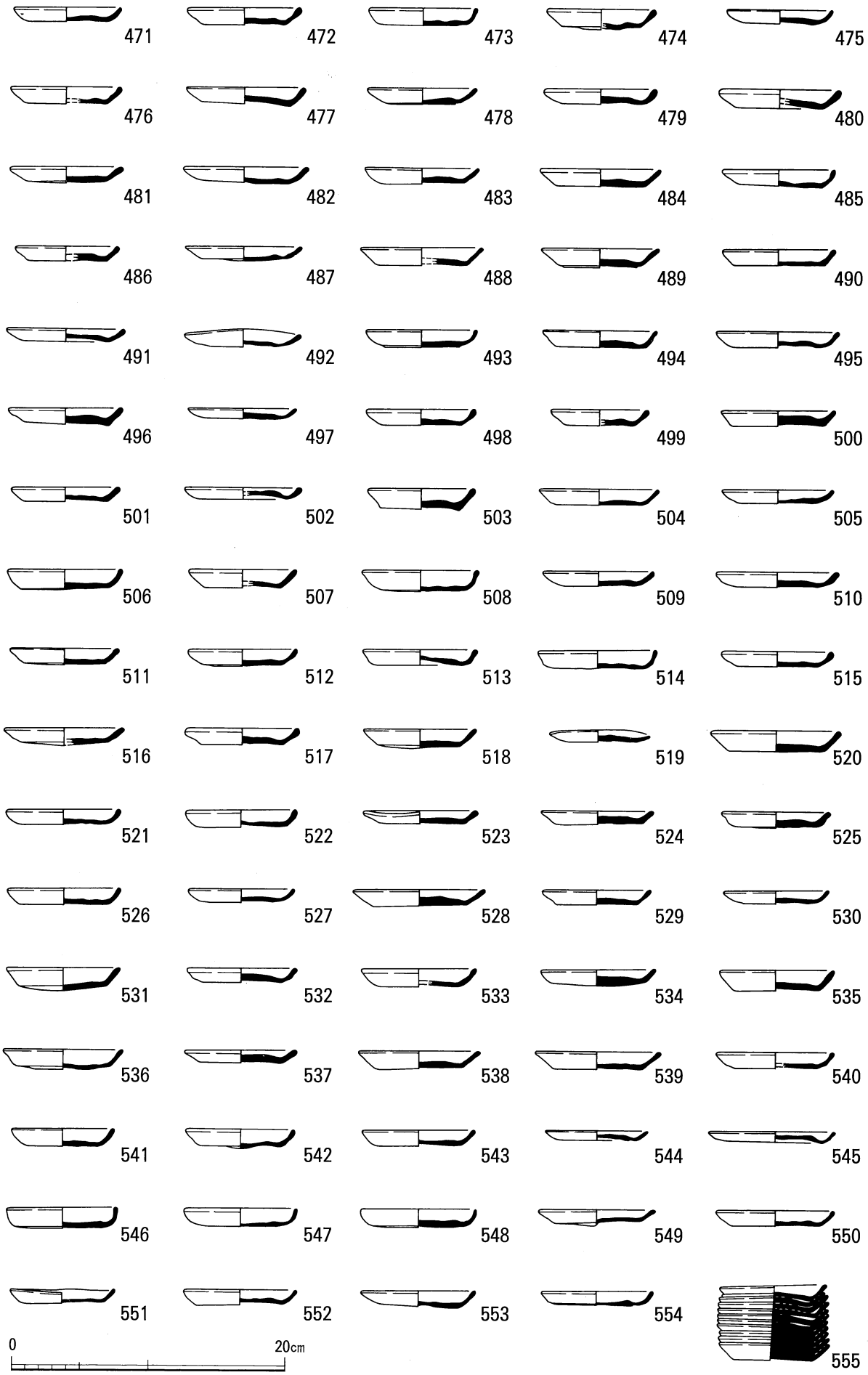
小名田窯跡出土土器（9）



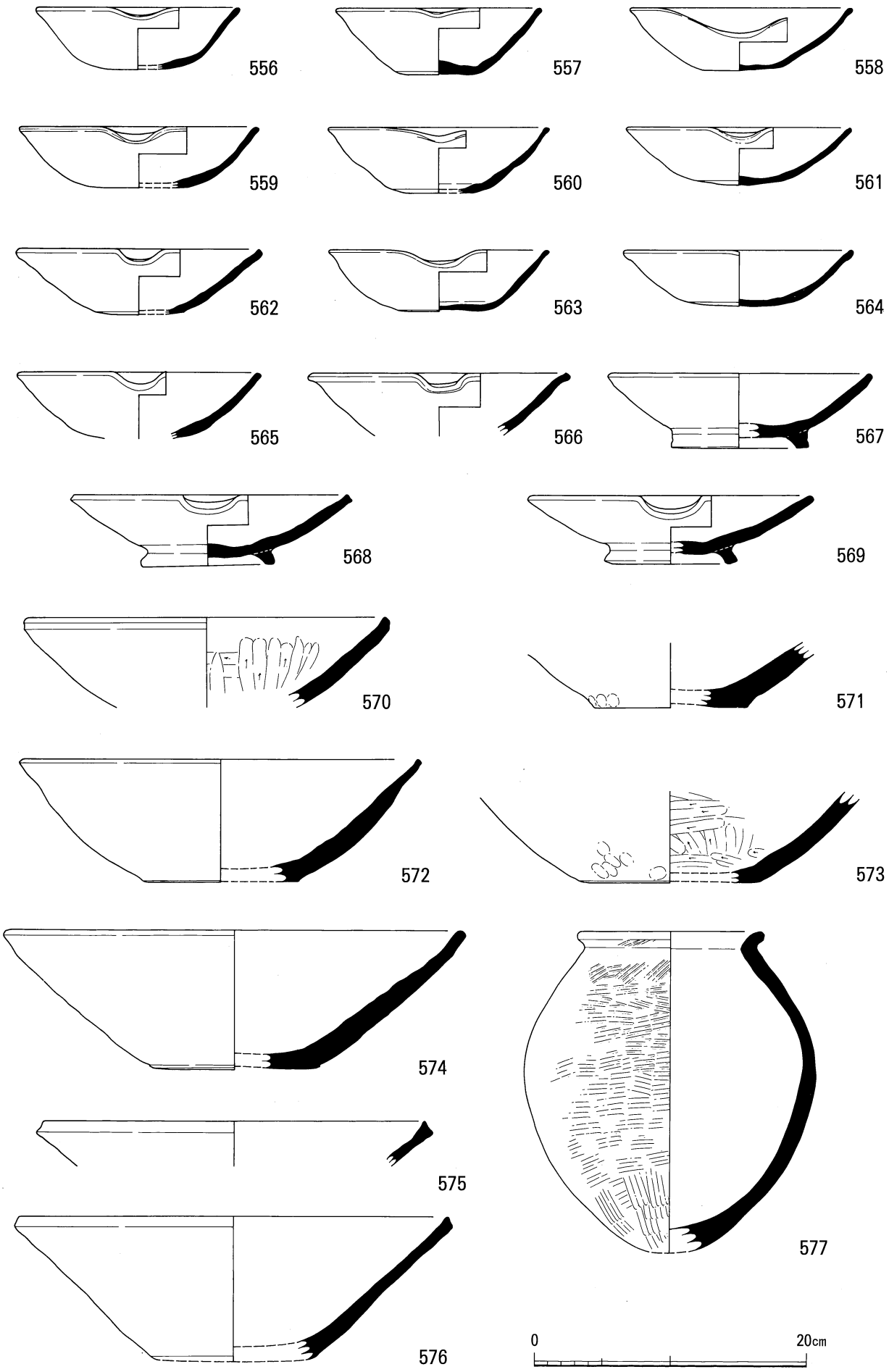
小名田窯跡出土土器 (10)



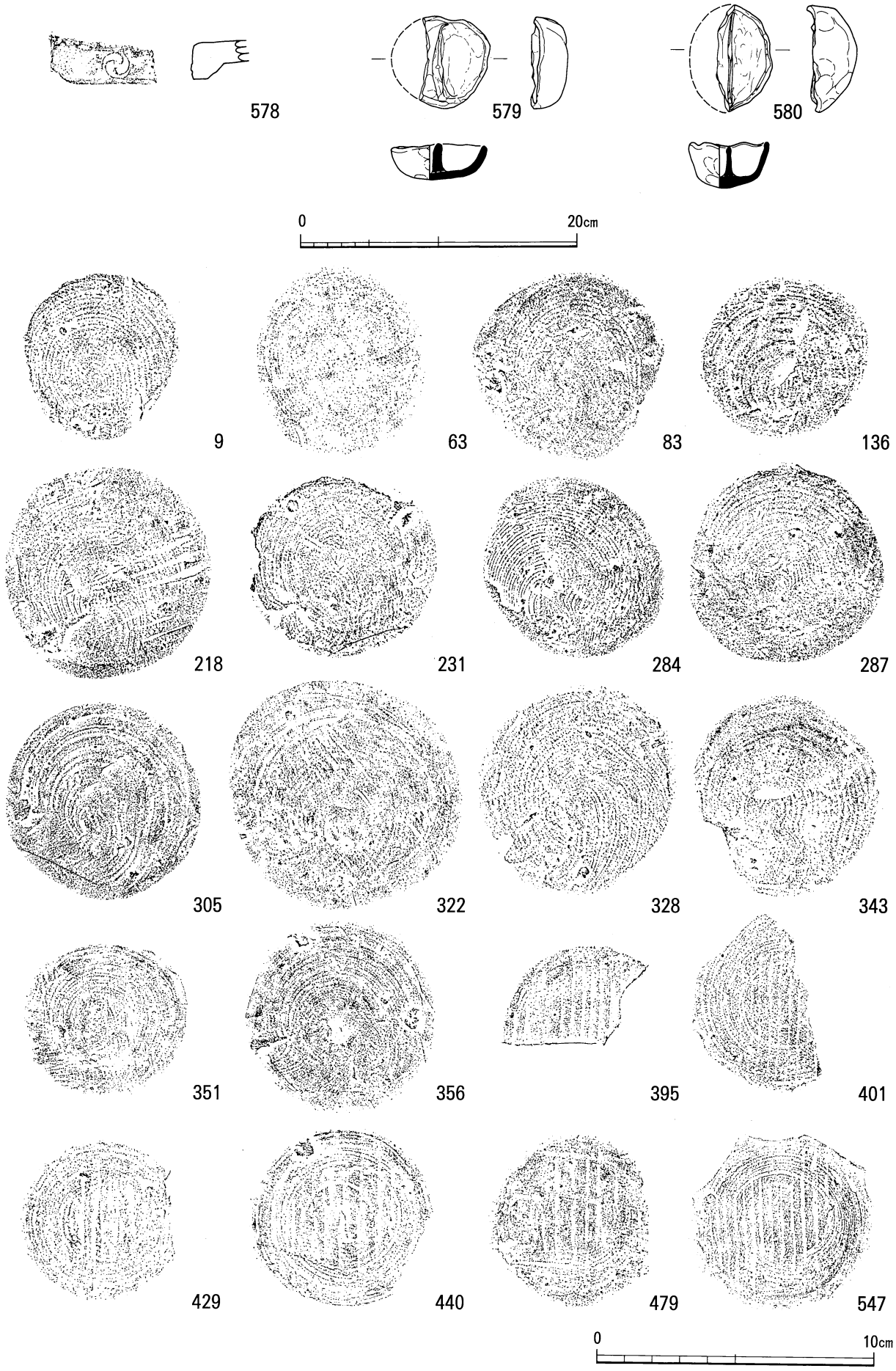
小名田窯跡出土土器 (11)



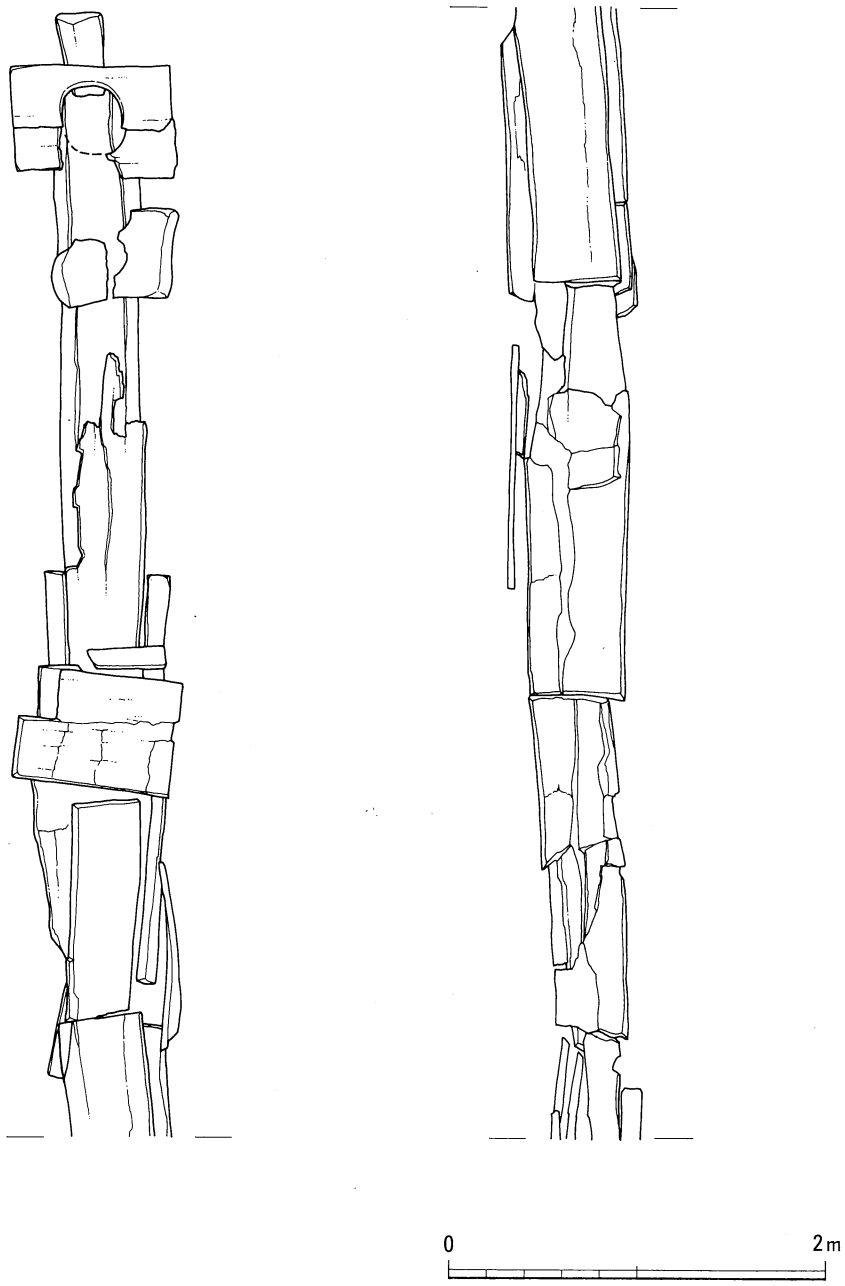
小名田窯跡出土土器 (12)



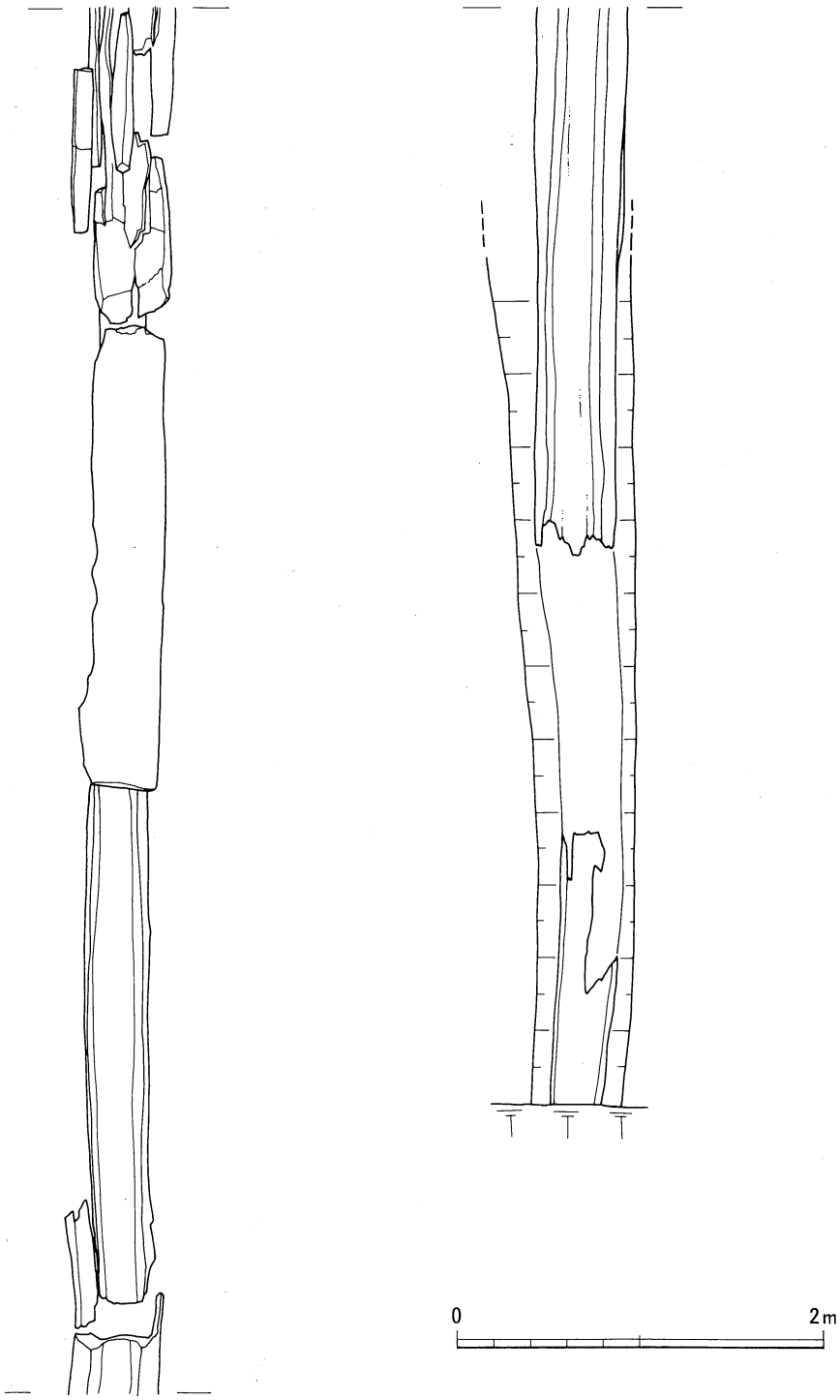
小名田窯跡出土土器 (13)



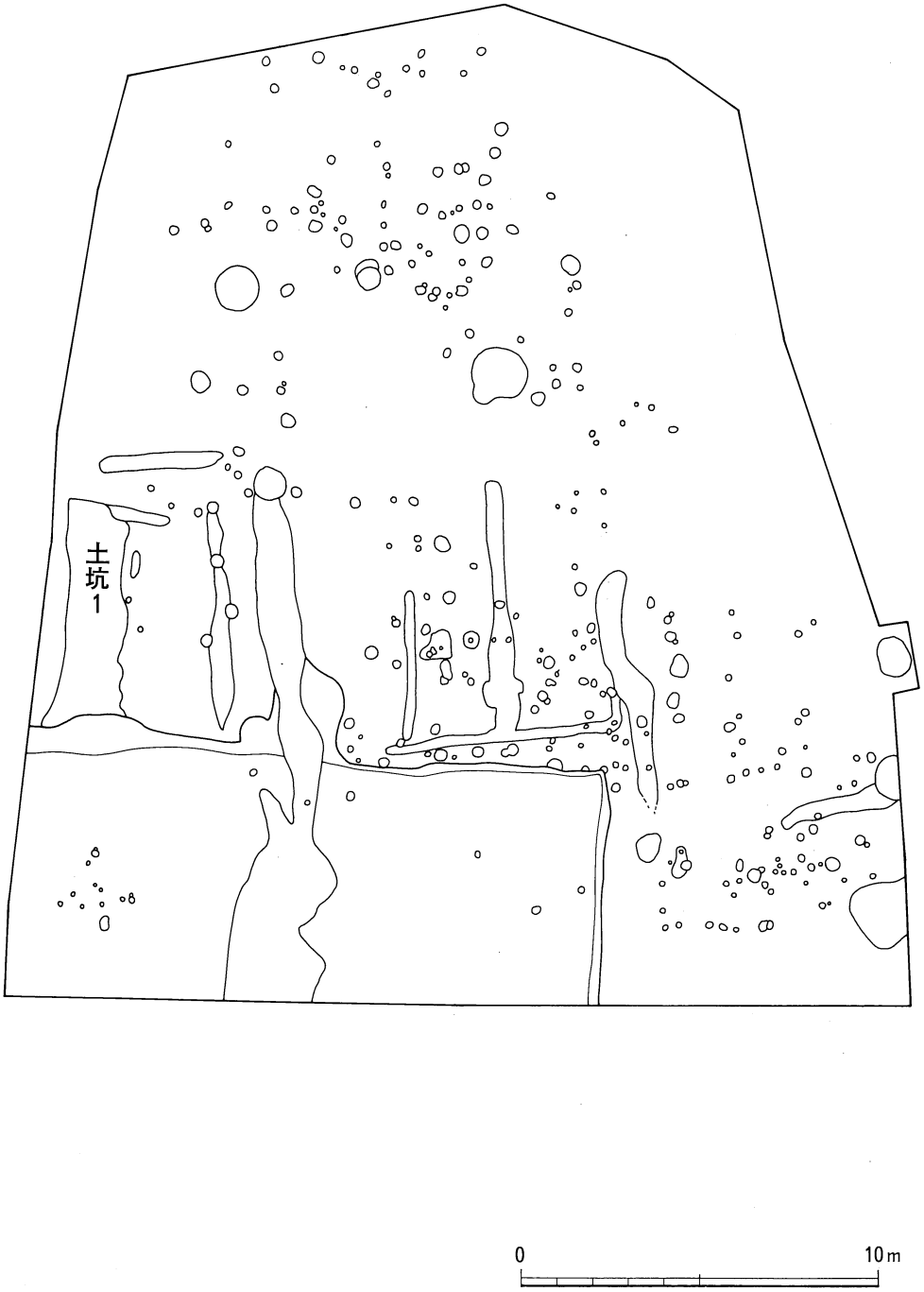
小名田窯跡出土土器 (14) 出土土器底部拓影



長命寺池底検出の樋平面図（1）



長命寺池底検出の樋平面図（2）



清水廻り遺跡平面図

小名田窯跡遠景（1）

小名田窯跡遠景（2）

窯体および、灰原検出状況（1）

窯体および、灰原検出状況（2）

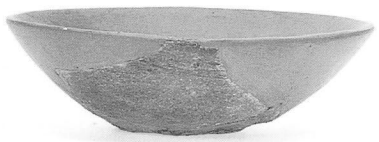
窯体完堀状況（1）

窯体完堀状況（2）

窯体第 2 床面検出状況

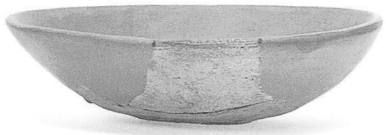
窯体断ち割り状況

小名田窯跡　出土土器


4

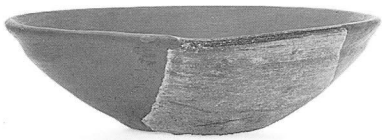
5

7


9

10

11

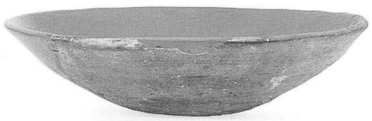

12

13

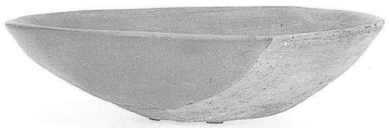
17

18

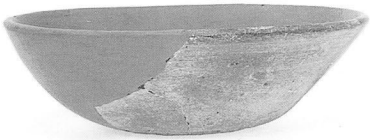
19


23

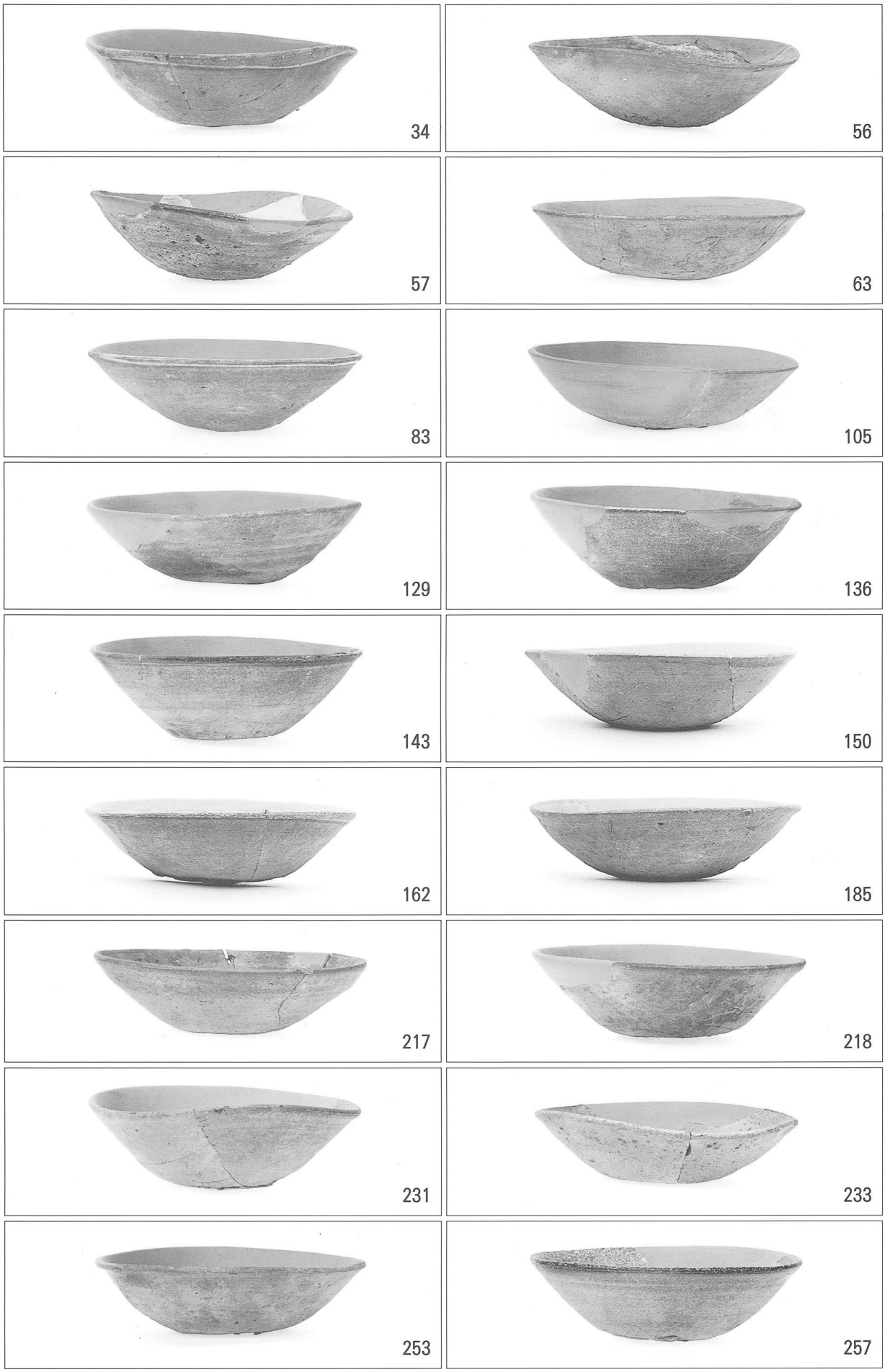
24


27

29


33

小名田窯跡　出土土器（1）



小名田窯跡　出土土器（2）

266

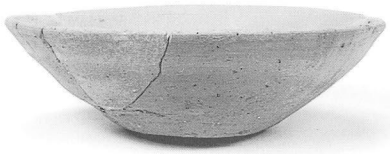
267

284

287

290

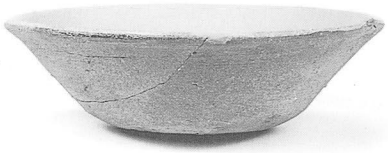
293


294

297

300

303


305

306

311

319

321

322

小名田窯跡　出土土器（3）

326

327

328

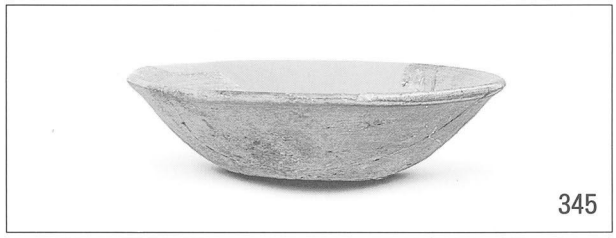
329

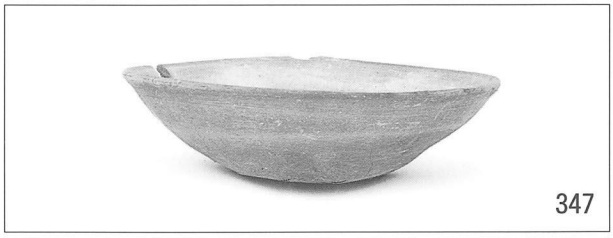
332

336

337

343


345


347

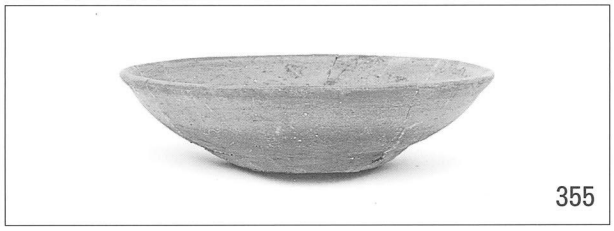
348

349

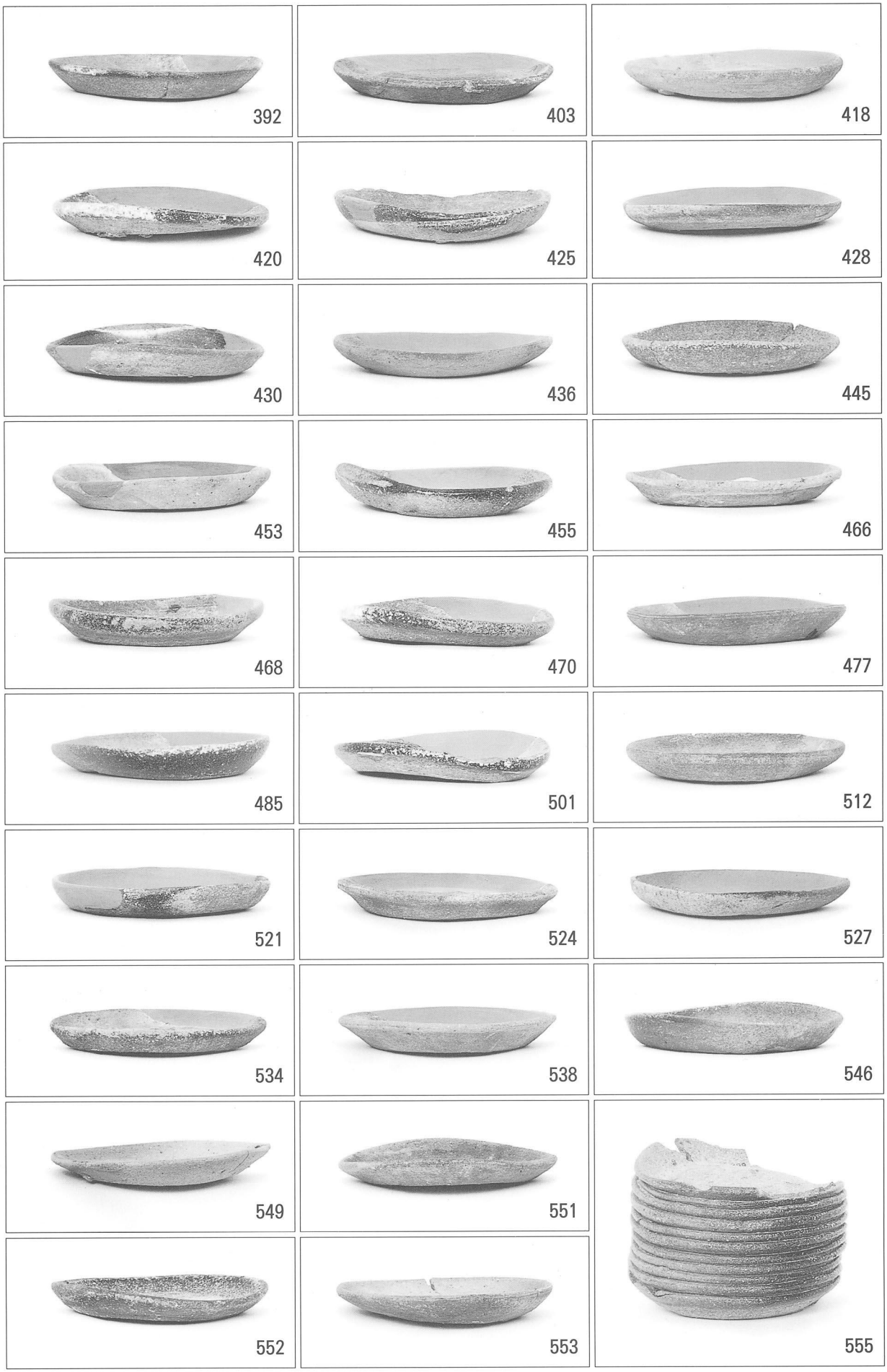
351

352

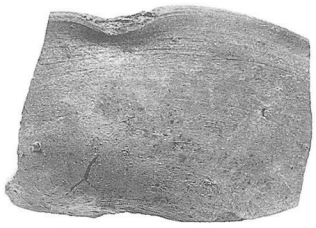
354


355

小名田窯跡　出土土器（4）

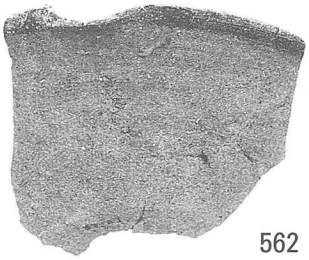

392
403
418
420
425
428
430
436
445
453
455
466
468
470
477
485
501
512
521
524
527
534
538
546
549
551
552
553
555

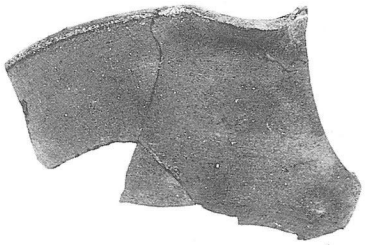
小名田窯跡　出土土器（5）

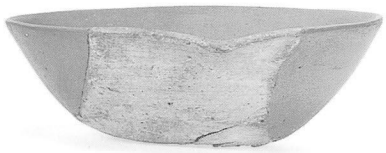

556

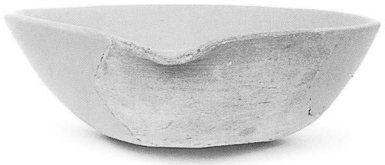
560

566


562

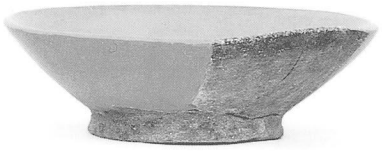

565


557

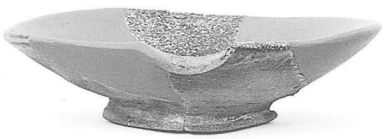

559

561

563


567

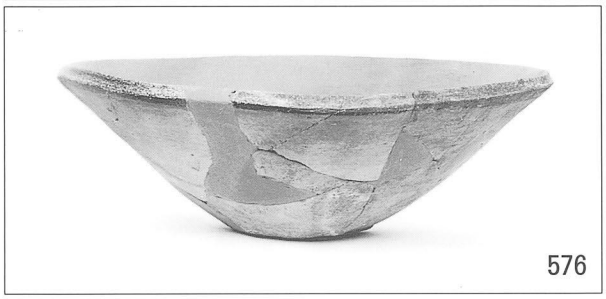
568

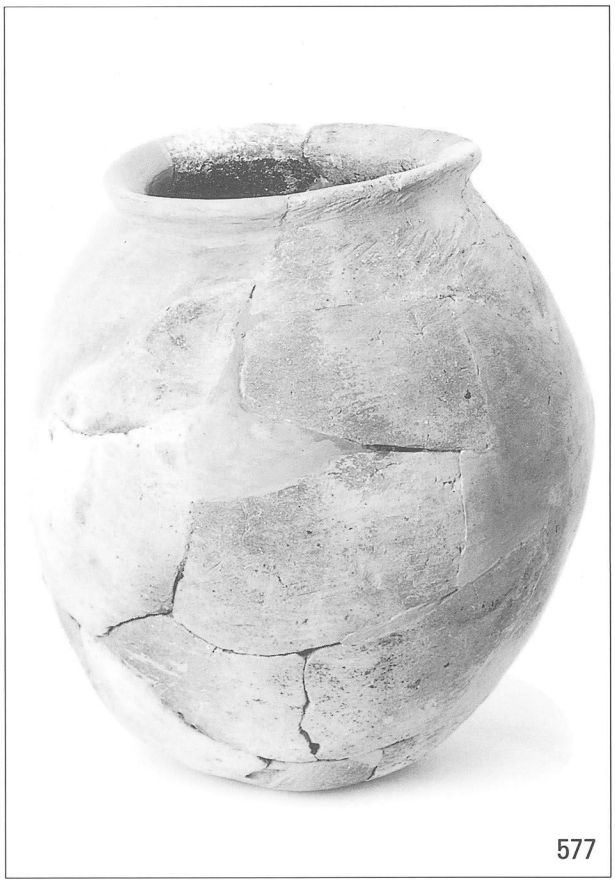

569

小名田窯跡　出土土器（6）

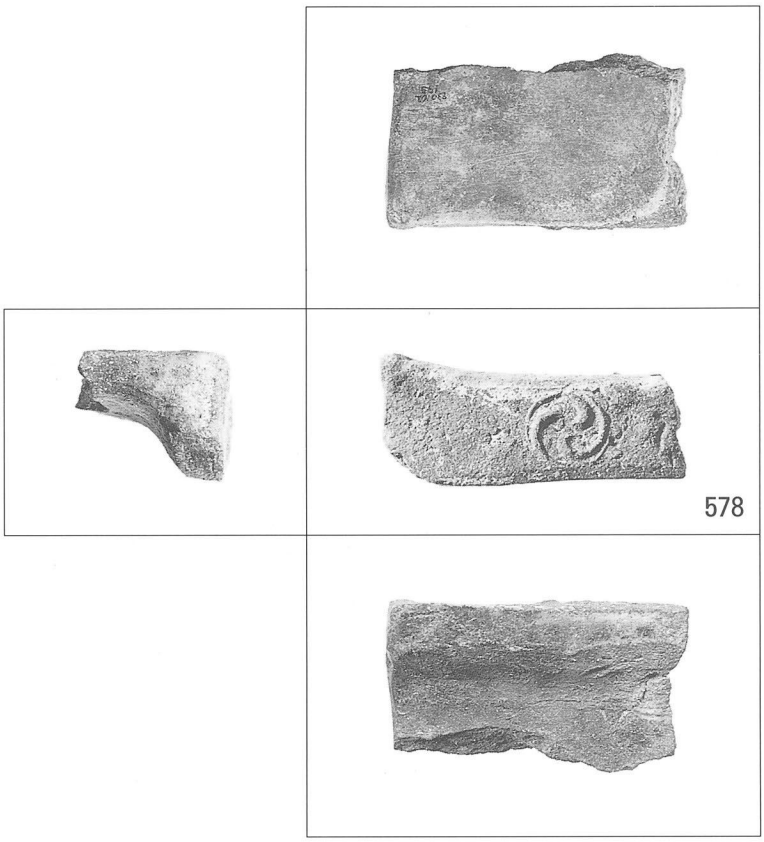
572

574

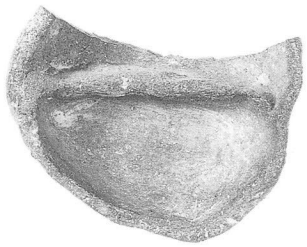

576


577

小名田窯跡　出土土器（7）


578

小名田窯跡　出土瓦



579

580

581

582

583

小名田窯跡　出土土器・石器・瓦

報　告　書　抄　録

ふりがな	おなだかまあと
書名	小名田窯跡
副書名	山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告
巻次	ＸＸⅣ
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第１５７冊
編著者名	久保弘幸・仁尾一人
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
所在地	〒652 神戸市兵庫区荒田町２丁目１－５　TEL 078－531－7011
発行年月日	１９９７（平成９）年３月３１日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
小名田窯跡	神戸市北区下小名田	28110	900162 930162	３４度５分４１秒	１３５度１２分４９秒	確認調査 910212～910213 全面調査 940111～940318	３５㎡ ２８６㎡	山陽自動車道建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小名田窯跡	窯跡	鎌倉時代 12世紀末 13世紀初	窯体１基 灰原	須恵器	椀・皿を主体に生産。片口鉢には他に見られない形態を含む。 少数の瓦も出土。

兵庫県文化財調査報告　第１５７冊

小　名　田　窯　跡

－ 山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告ＸＸⅣ －

編　集　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号
ＴＥＬ　078－531－7711

発　行　兵庫県教育委員会
〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号
ＴＥＬ　078－341－7711

印　刷　株式会社　旭成社
〒650 神戸市中央区若菜通5丁目1-16-280
ＴＥＬ　078－222－5800